
女鑑
第十八年第五號

大日本淑女學會

會員募集

講義錄は何時にても一號より送る

▲御自分のお宅に居つて高等女學校の課程を講習しやうとする方は、本會においりなさい

▲本會は文部省令に據り正則完全なる女學講義錄を發行します。講義の親切丁寧なことは云ふまでもありませぬ。新式の教授法によつて獨習に最も便利な方法をとります

▲卒業は二ケ年で會費も低廉であります

▲會員には講義錄の外『姫百合』と云ふ美くしい體裁の利益になる女學雜誌を毎號無料で進呈いたします

本會の講義錄

▲大版三百頁優麗なる冊子
▲講義平易にして興味多し
▲各科講義の程度一定せり
▲各科皆聯絡し組織的なり
▲講師は専門女子教育家也
▲科外講師は博士學士廿家
▲毎號科外講話を附錄とす
▲純潔高雅の家庭小說あり
▲會員の質問は直に解答す
▲學期毎に修業證書を與ふ
▲講義錄は貳ケ年完結とす

◉詳しい規則書は申越次第差上げます

◉東京神田駿河臺(電話本局三千四番)大日本淑女學會

春と化粧

美人となる秘法

近來化粧の方法が盛んに研究せられる樣になりましたが、多くは白粉等の研究のみでして、どふしたならば美くしい化粧が出來るかと云ふ事を忘れられて居る有樣です、一體化粧の上から見れば、白粉は枝であつて其の下には根の物があるのです、つまり白粉を美くしくつけるには先づ完全な皮膚でなくてはなりませぬ、若しきたない皮膚に美れいな仕粧を仕樣としますのは、丁度ヨゴレタ「ヌメ」へ立派な畫を畫かふとする如く、到底不可能の事で御座います、故に美つくしい化粧をなさりたい方は、まづ第一に皮膚を良くしなければなりません、之は極く譯もない事で、即ち常にローヤル水を用ゐて後白粉を御つけになる事を御忘れにならなければ、自然に好い皮膚と成つて美るはしい化粧が出來ます。

寒氣日増しに酷しく、今後人の皮膚はやゝもすれば荒れ易いのであります故、婦人方は固より殿方も常に注意して夫を豫防せねばなりません、夫れにはローヤル水を御使になるに限ります。

ローヤル水は此の外種々の特色がありまして、例ば脂肪分の多い爲めニキビの出來る人は、洗面の後にローヤル水を御使になれば非常の効があります、又脂肪分の少ない爲め皮膚のアレる方には適當い脂肪分を與へ、皮膚の發達を增す等、他の化粧水では見る事の出來ない多の効があります、故に世間でローヤル水を稱して萬能化粧水と申しますは偶然で御座いません。

◎定價　特大　一圓　大　五十錢　中　卅五錢　小　廿錢

郵税は十二錢販賣店は全國至る處の化粧品店洋品店小間物店賣藥店に在ります。

發賣元は東京銀座一丁目佐々木商店です。

女鑑第十八年第五號目次

なかよし



第五回内國勸業博覧會賞牌及褒狀受領

壽美禮おしろい

登録商標

壽美禮おしろい

五二會品評會 功勞賞牌

THE BEST MADE

SUMIRE

VIOLET PASTE

ヴワイオレツト煉製

錫蓋附乳白硝子器入



壽美禮れしろい

ヴワイオレツト水製

ねり製 定價 大壜二十錢 小壜十二錢

水製 定價 大壜二十五錢 中壜十五錢 小壜十錢

錫栓附乳白硝子壜入

◎壽美禮白粉は歐米諸國に專ら流行する香料及弊店特製の化學的炭水素の新成績體等を以て配劑しあるを以て常に用ひて御顏肌を艶麗ならしめ清々しく天然と色白きに至るべし殊に衣服半襟等のよごれざると汗の爲にムラを生ぜざるは本白粉の特色なり「菫れしろい」は芳香馥郁として長時間保續するが故宴會、祝席、雜踏の塲所に臨むに衛生上又社交上有益無比の逸品なり「壽美禮白粉」は高等優美にして意匠も美妙なれば御進物に最も適當す方東京横濱其他に於ても上流社會に益々好評を博しつゝ、流行せり

◎西洋皮膚艶麗劑 壽美禮あらひ粉の特性

綠、藍、紅彩蝶香ひ 鑵詰八錢

別製鑵詰五拾錢 大袋二錢 小袋一錢

◎壽美禮洗粉は近來歐米諸國に賞賛する香料及弊店が多年研究の上へ製せし獨特の新原料を用ひて製せし品なれば朝夕此の洗粉を御用ひ給はゞ常に御肌の艶深くきめを滑かに色白く美しくなす◎壽美禮あらひ粉は御髪洗ひに御用ひ給へば髪のねばりを取り油あか等を生ぜず又半襟ハンカチーフ絹布等に用ひて能く汚垢を落す總て物を漂白する特性あり◎御使用法は普通あらひ粉の半分にて宜るし水又は温湯に溶し又ぬかに混ぜ御入浴の際用ふるをよしとす

登録商標

西洋色白くなるあらひ劑

SUMIRE

WASHLNG IOWDER

壽美禮あらい粉

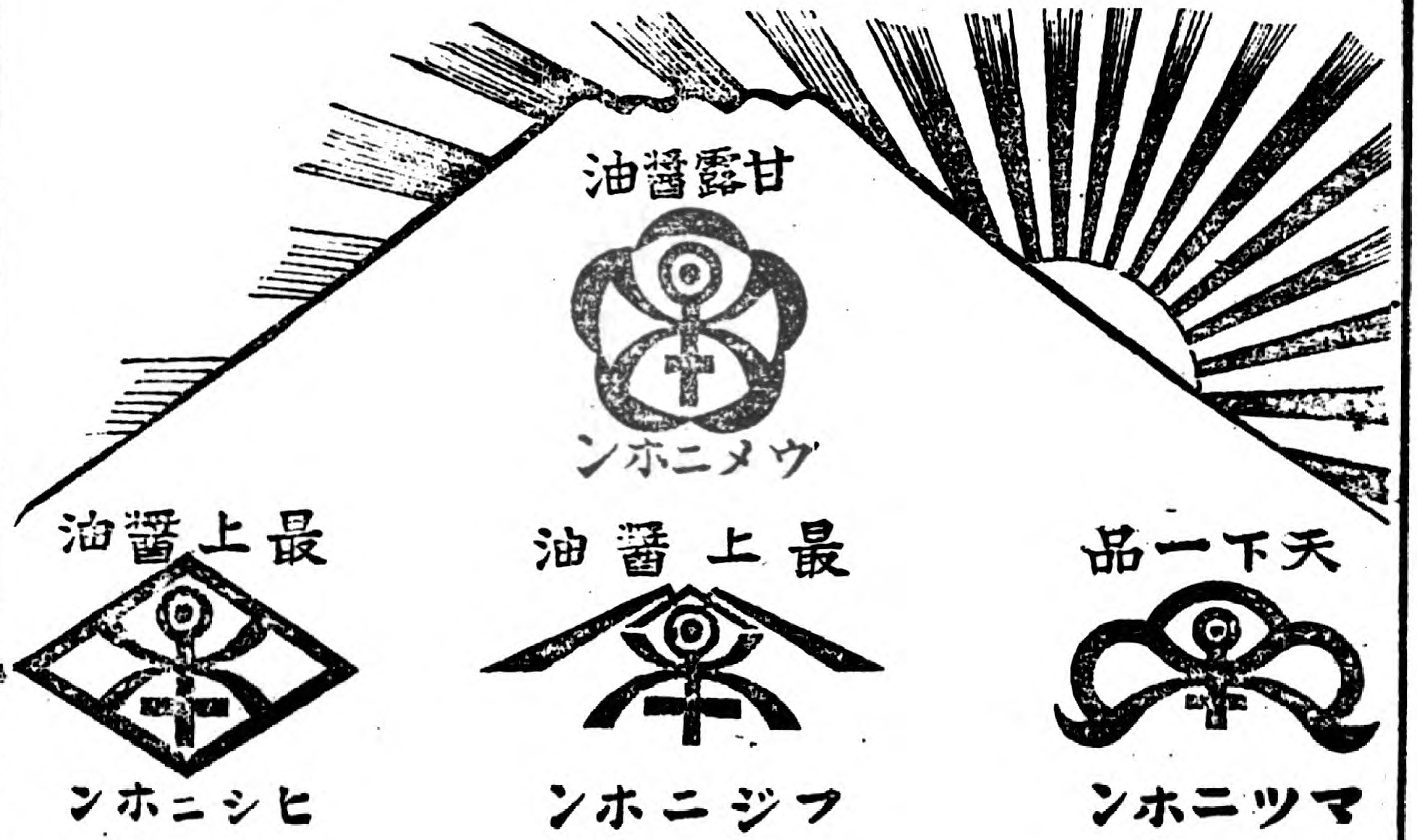


製造本舗 東京兩國 東京元町(兩國橋際) 壽美禮堂謹製

販賣所は全國到る處の小間物店化粧品店賣藥店等に有之候に付御近邊にて御求め在乞ふ

醬油釀造界の一大革新

最良醬油



●資本金＝壹千萬圓

釀造元
日本醬油釀造株式會社
東京深川區小名木川通
電話浪花（長）三七七三番
一五九五番

特色
製造清潔
品質佳良
黴を生ぜず
價格低廉
特色

弊社は前人未發の新發明にかゝる嶄新にして完全なる鈴木式釀造方法及機械的裝置により精良無比の醬油を釀造販賣す

特約販賣所
東京日本橋區北新堀町
合資會社日本醬油東京販賣所
電話浪花（長）一四六番

其他
東京酒類問屋組合酒類仲買店及各地小賣店にて販賣致候間御用命願上候

常宮内親王殿下

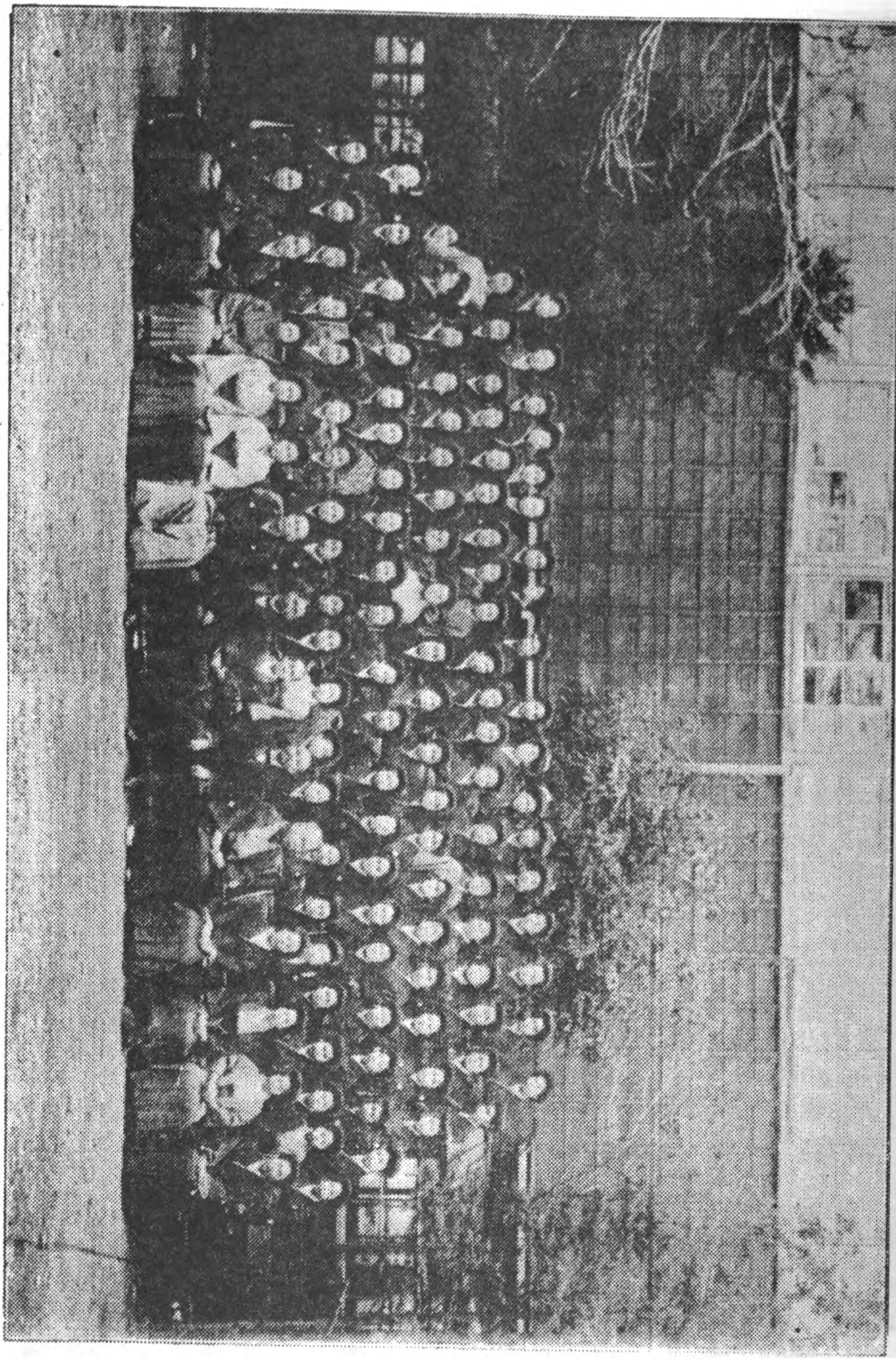


大統領夫人と大學長夫人



米國大統領令夫人

エール大學總長 ハッドレー氏 同令夫人



三輪田高等女學校卒業式

米國だより



小松緑氏夫妻



鳩山博士令姪佐藤まさ子君



スミレ香水ハ
実に好い香で永くもちます
發賣元ハ
パール本舗
で有ります
東京
濱町

婦人世界は簞笥長持と共に嫁入道具の一つ

婦人の友

婦人世界

婦人の師

五月一日發行 毎月一回 三巻第五號 一冊拾五錢 郵税一錢五厘 六冊分郵税共九十錢 十二冊一圓七十五錢

◎男女結婚論……村井弦齋

◎男子は如何なる妻を選ぶか……
◎何故に從順の婦人を選ぶか……
◎何故に箱入娘を選擇するか……
◎理想の妻とは如何なる者か……

◎何故に容貌の美しき婦人を選擇するか……
◎何故に藝者を妻とせんことを欲するか……
◎何故に金滿家の娘を好んで選擇するか……
◎金滿家の娘は如何なる性質を持てるか……

▲不幸なる結婚をしたる婦人の自白　無名子
▲子供を可愛がらぬ親　乙訓鯛助
▲私の實行せる簡易生活　古巣枝生

▲少女欄　人形物語
▲小說　摘草　桂林
▲郭公の歌　評釋

◎外國婦人の見たる日本女學生の缺點　報知記者　磯村春子
◎私は如何なる理由にて再婚したるか　三輪田女學校教頭　三輪田元道
◎若き婦人は家庭にありて何を爲すべきか　山脇高等女學校長　山脇房子
◎斯くの如き良人は必ず失敗す……清風生
◎女は如何にすれば美しく見えるか……柳川春葉

▲流產は如何に豫防すべきか　醫學博士　榊順次郎
▲小兒腦膜炎の手當　醫學博士　加藤照麿

▲弦齋夫人　鯛料理
▲紡績女工の日常生活

◎懸賞募集
◎短文◎和歌◎俳句◎習字◎珍らしき寫眞◎面白き繪探し
◎諸國の手毬唄◎新案文字合せ◎家庭笑話◎婦人頓智談◎

東京京橋南紺屋町十一　實業之日本社　(郵便振替貯金口座參貳六番)　(電話新橋八七四番)　賣捌全國書店

花上の雪

上野香畝君撮影





美人ナルト藥

と申しても憚りなき珍らしき有功化粧品の新輸入

人形的粉飾を好まず自然美を願ふ御方は美的修養として米國デトロキト市アクムケミカル會社製アクムフレンチマッサージクリーム。。。。。。。。。。。）大金二圓六十五錢小金一圓卅五錢）を日々御使用ありて根本から肌理及び顔色を美化せしむる事に御務めくださいませ

本品を使用するには入浴の際成る丈け熱き湯に手拭を五六回絞りては顔面を覆ひて蒸し冷風に吹かれぬ内に本品の少量を採り少々の水をまぜ顔一面にぬり指先にて摩擦するのです そうすると肌理は一ヶ月を出ずして微に透き通る樣に美しくなり色を白く薄紅にすることを断言致します

次に冬季中は寒氣の爲に皮膚細胞が硬くなり脂肪を分泌する事が不充分なので顔や手など忽ちヒヾアカギレ等の荒れを生じ甚樣が大に御悶みになるのでありますが能く此等の發を防ぎ肌理を微に軟かに保つには最も忠良に皮膚の脂肪に代り、肌を庇護する佛國巴里市ビベール會社製ヒリリン、オドトワレット（美顔劑と白粉下クリームとを巧妙に配劑したる珍らしき透明化粧水金二圓三十錢）を日々御使用になるに限ります尚ほ本品は他に偉大なる特長として尤も心持ちよきサラリとした粘着性を有してありますから白粉下をも兼る無双の優等品であります

本品を顔一面に塗り同會社製 ヒリスリン、プードルドリ（金一圓）の如き正眞正銘無鉛無害粉おしろいをハタキ付けにし三分時の後滑かなる紙類を以て摩擦して艶拭きを施しますときには白粉は普通のクリームを下にした樣にベトベトとしてヨレルことなくサラリとして心持ちよく充分に伸びて光澤を出し白粉をつけたようには視へず天然の色白に見へます

扨て美人の形容に雲鬢花顔と申す如く顔と髪とは兩々相並行して美しくなければ則ち美人たるの要素を欠くものと申しても差支はありますまい亦た髪の美は顔容の足らざるを補ふに充分なる力がありますす底で毛髪の美とは如何なるものかと申。。。。。。せば丈けなす黒髪即ち此の一條件に外ないのでありますす此條件に叶はんとするには毛髪美的發育法として佛國巴里市ビベール會社のペトロールハーン（大二圓廿錢小一圓五十錢）を毎朝或は御髪結ひの時小サキ海綿に浸し頭の生地へゴシゴシと力を込めて擦り込むに限ります否な實に天下に此れより良法はありますまい此ペトロールハーンは毛髪の肥料となり毛穴の掃除をなしフケを去ることは勿論 脱毛を治する事の上に 驚くべき功能があり忽ち其の結果を視る事が出來ます怠なく御使用あれば新に 毛を生ずる事をも證言致します

以上の各品は皆高價なる香料を用ゐあれば馥郁として品良き香氣を有してあります

眞正の美人とならん事を願ふ御方の心得べき定義 以上の如き有功無比の化粧品をお用ひにならぬ方は美人となる事を願ひつつも未だ其の實行をなさらぬ御方安化粧品を用ゆる方は時代遅れの一時的人工美人とならうとする御方否な表情も趣味もなき人形に猶は劣る御方

弊店は歐米各國に於て有名なる諸大會社と直接連絡を通じ優等なる石鹸香水香油白粉白粉下クリーム化粧水紅毛髪及び爪の化粧料美顔術用具等一切を輸入し最も親切に販賣す乞ふ多少の御注文あらん事を

東京市銀座尾張町二ノ二五
輸入部 萬治貿易商會

電話新橋四三三五
販賣部 めでたや

自宅作文獨習良師友

懸賞募集課題○○お伽噺○新派和歌○短篇小説○脚本○日記文○○新體詩○○實用文○○俳句○新論文○舊派和歌○美文○短文○繪書○○新歌謠○○滑稽談○餘興○(賞)○○女(醫顧問)學校生活(外)○○誌友の事柄

選評 巖谷小波、小栗風葉、佐野天聲、横瀬夜雨、與謝野晶子、谷江風、中村文學士、佐々木信綱、内藤鳴雪山中古洞

▲詳細は見本(價拾錢 送壹錢)に就て御覧下さい

本誌は卅八年一月創刊

投書は誰でも隨意

日本唯一女學雜誌

女子文壇

發行 毎月一日 増刊六回

口繪 名畫光澤紙原色版 寫眞肖像風景數葉

定價 壹冊(百卅頁)金拾錢送料壹錢○半年分(九冊)送共前金壹圓五錢○壹年分(十八冊)同金貳圓○郵劵代用壹割増

五月一日發兌
●四年第七號
例により卒業生の寫眞澤山挿入す

五月十五日増刊
●四年八號
定期増刊 夏すがた
價拾錢 送壹錢
之にも卒業生の寫眞を澤山入れます

低廉・好評・無比

東京京橋區大鋸町十一番地(振替貯金口座第壹七貳九番)

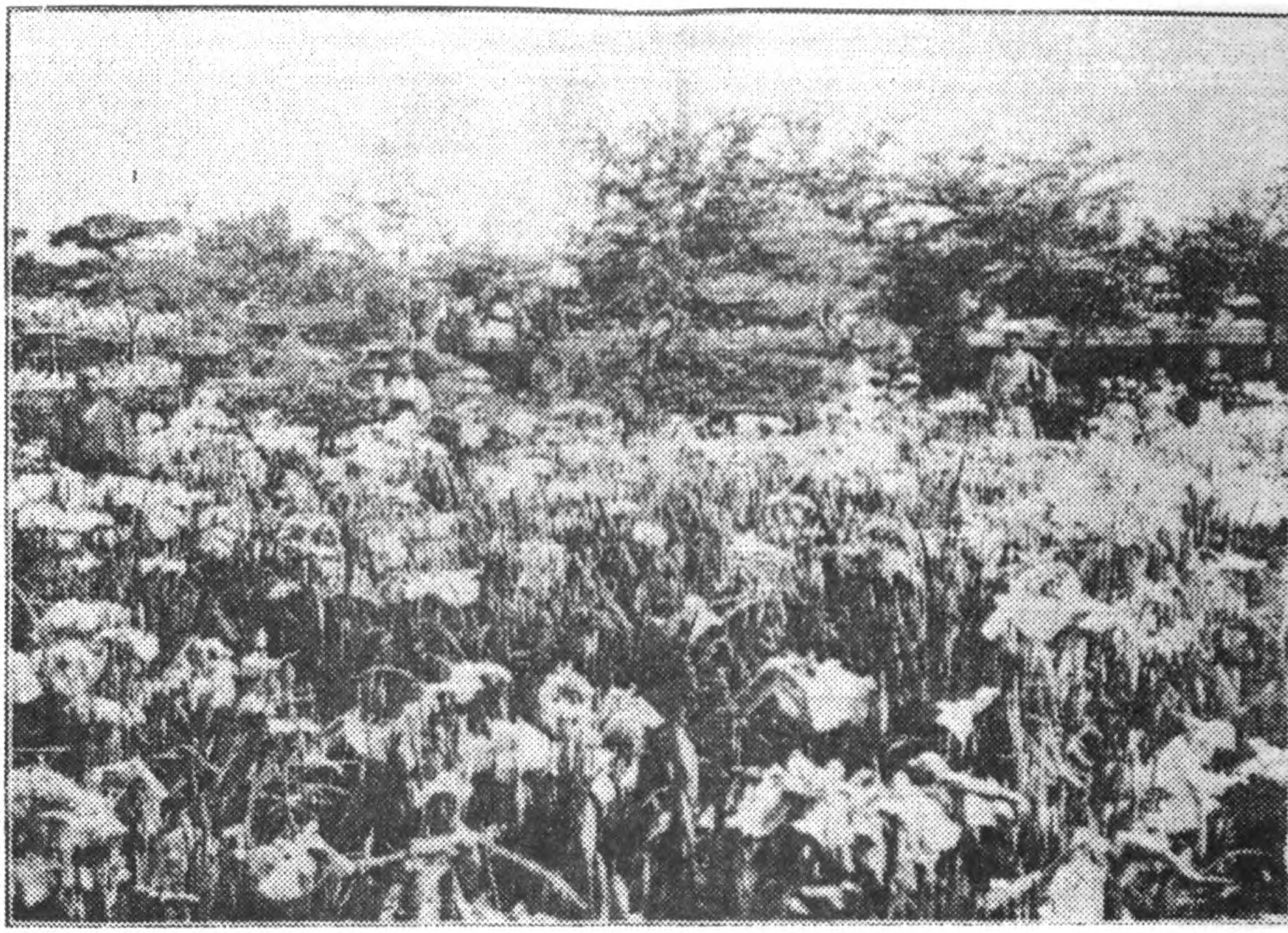
女子文壇社發行

電話番號 本局六百七番

▲注意‖一號より取揃あり最寄書店に品切の時は振替貯金拂込法により直接發行所へ御申込を乞ふ▼

特約發賣所 ◉神田東京堂、上田屋◉日本橋北隆館、至誠堂◉京橋東海堂、良明堂 其他取次店は全國各雜誌書店

福島名所



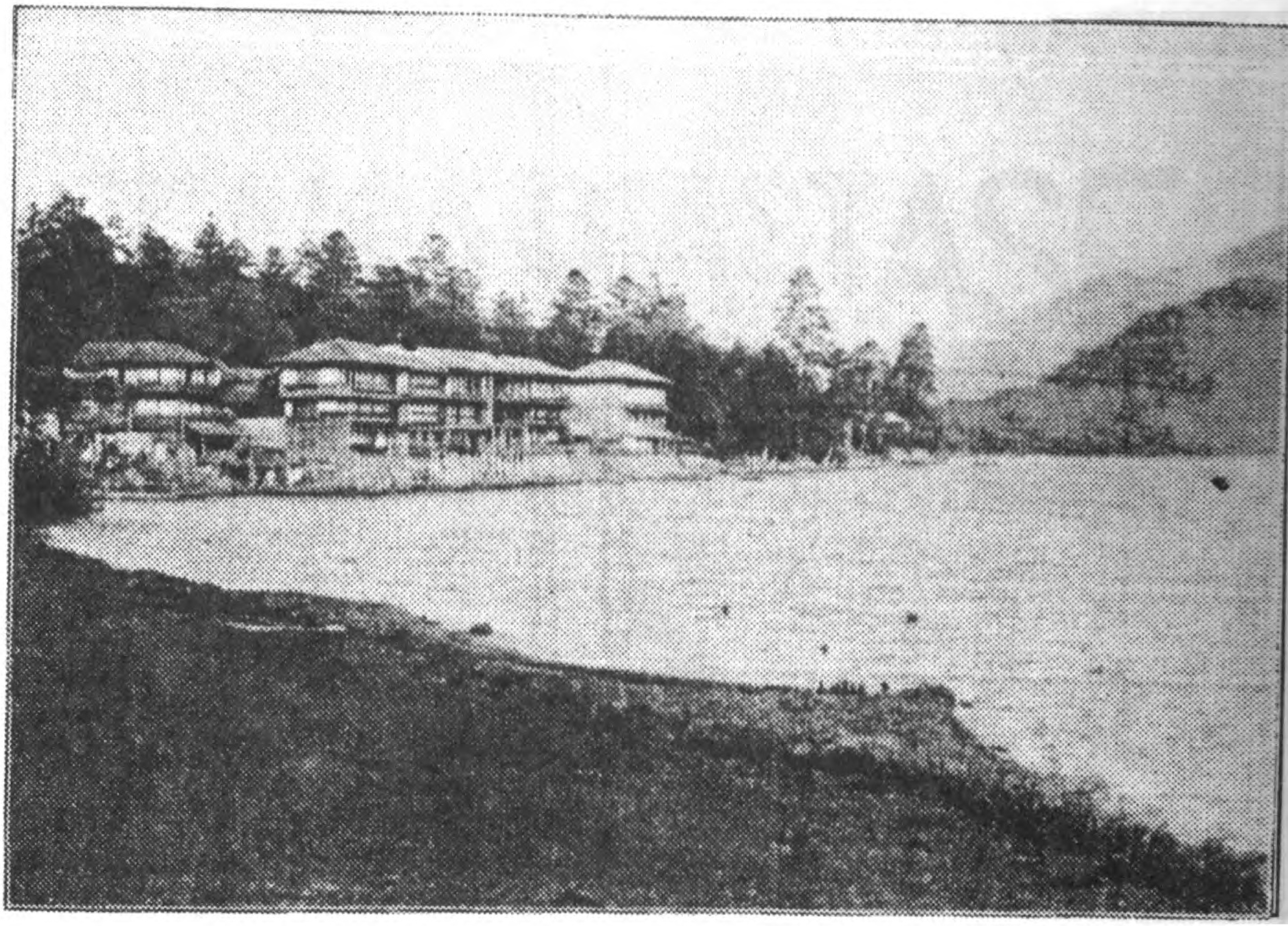
去來園の菖蒲

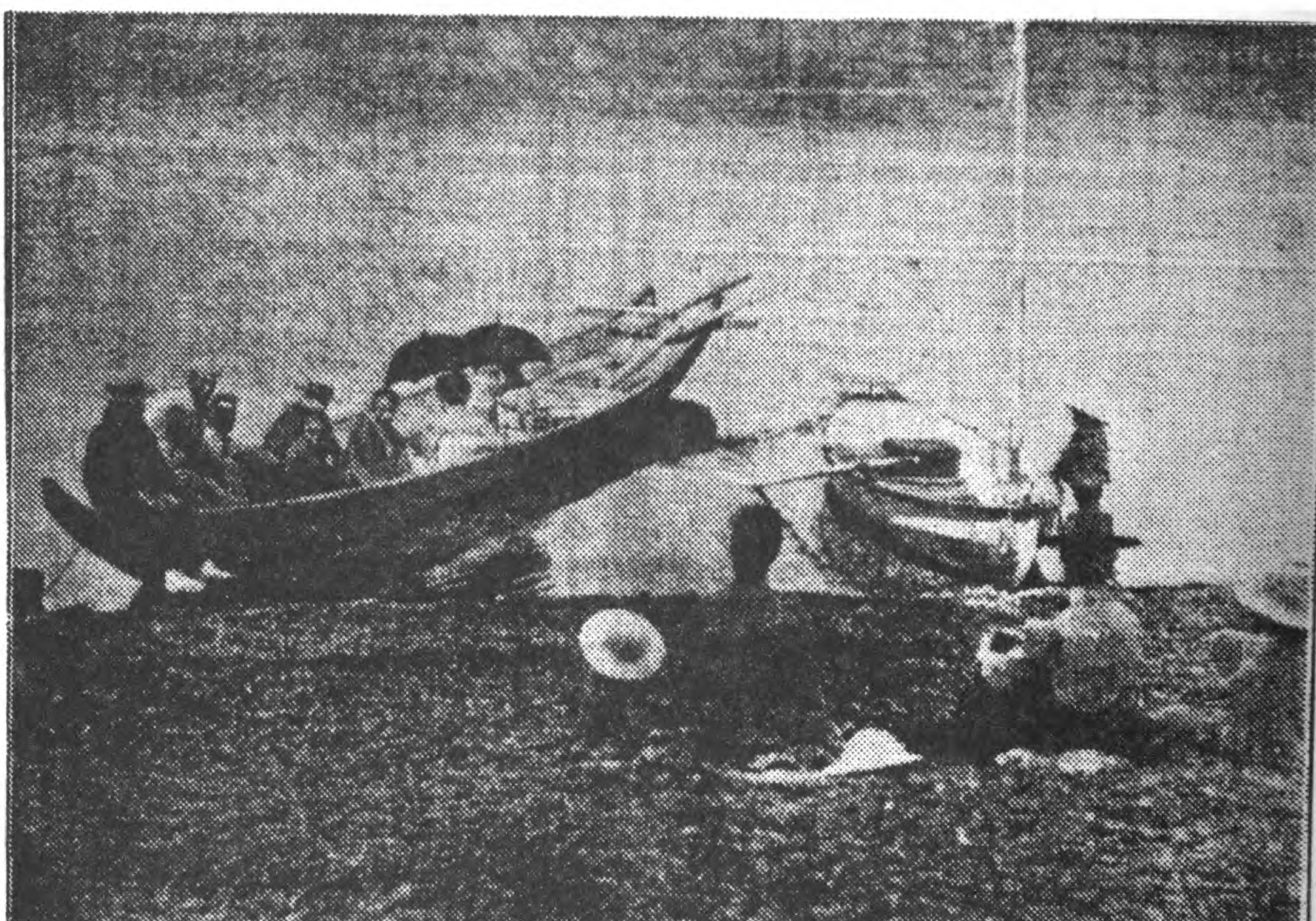


板こくり


夏物新柄大売出し
大丸呉服店
日本橋通旅籠町

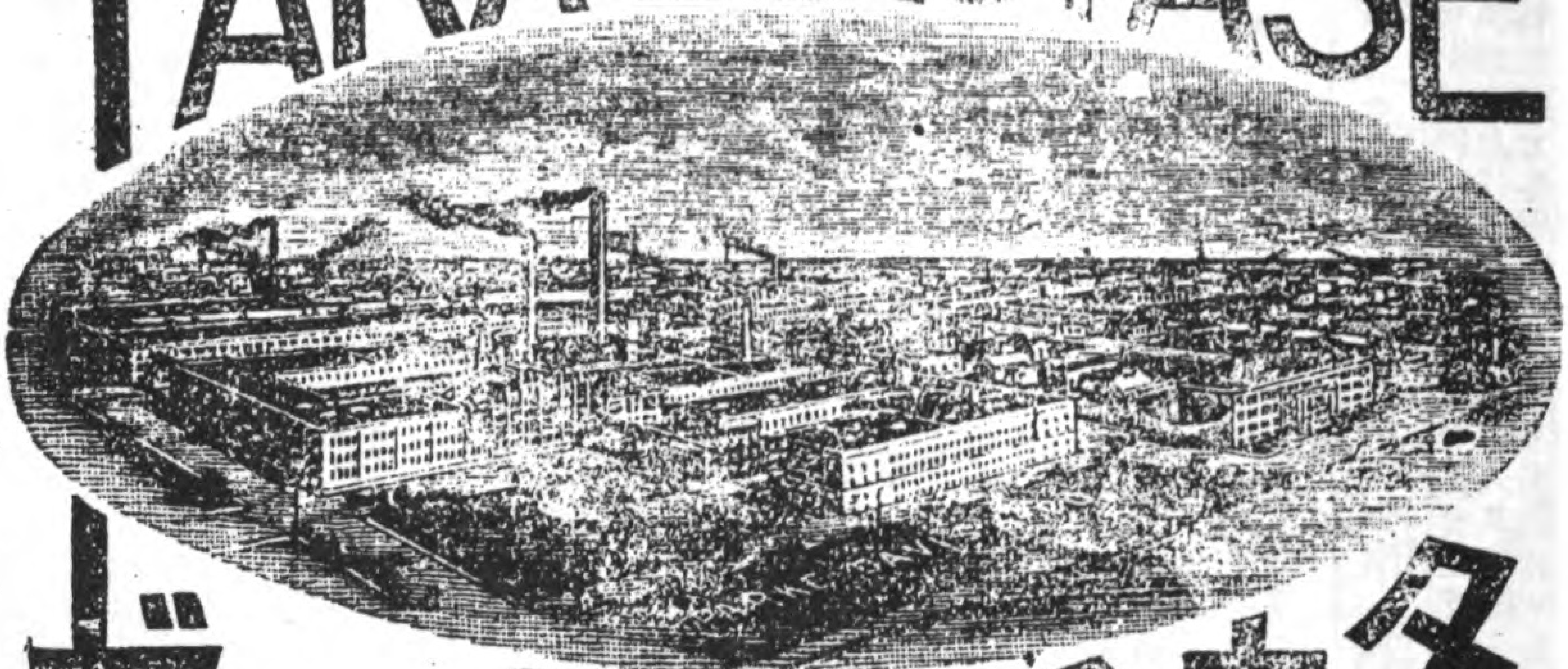
中禪寺湖





德川男爵撮影

TAKA-DIASTASE



タカヂアスターゼ

世界最大の製藥工場

パークデビス社は完全なる設備を有する世界最大の製藥會社にして、上圖は其デトロイトに於ける本社工場の全景なり。此他同社は加奈陀及英國に同一規摸の分工場を有し、世界の醫家が要求せらるゝ總ての醫藥品を製造す。

タカヂアスターゼはパークデビス社の製品なり。

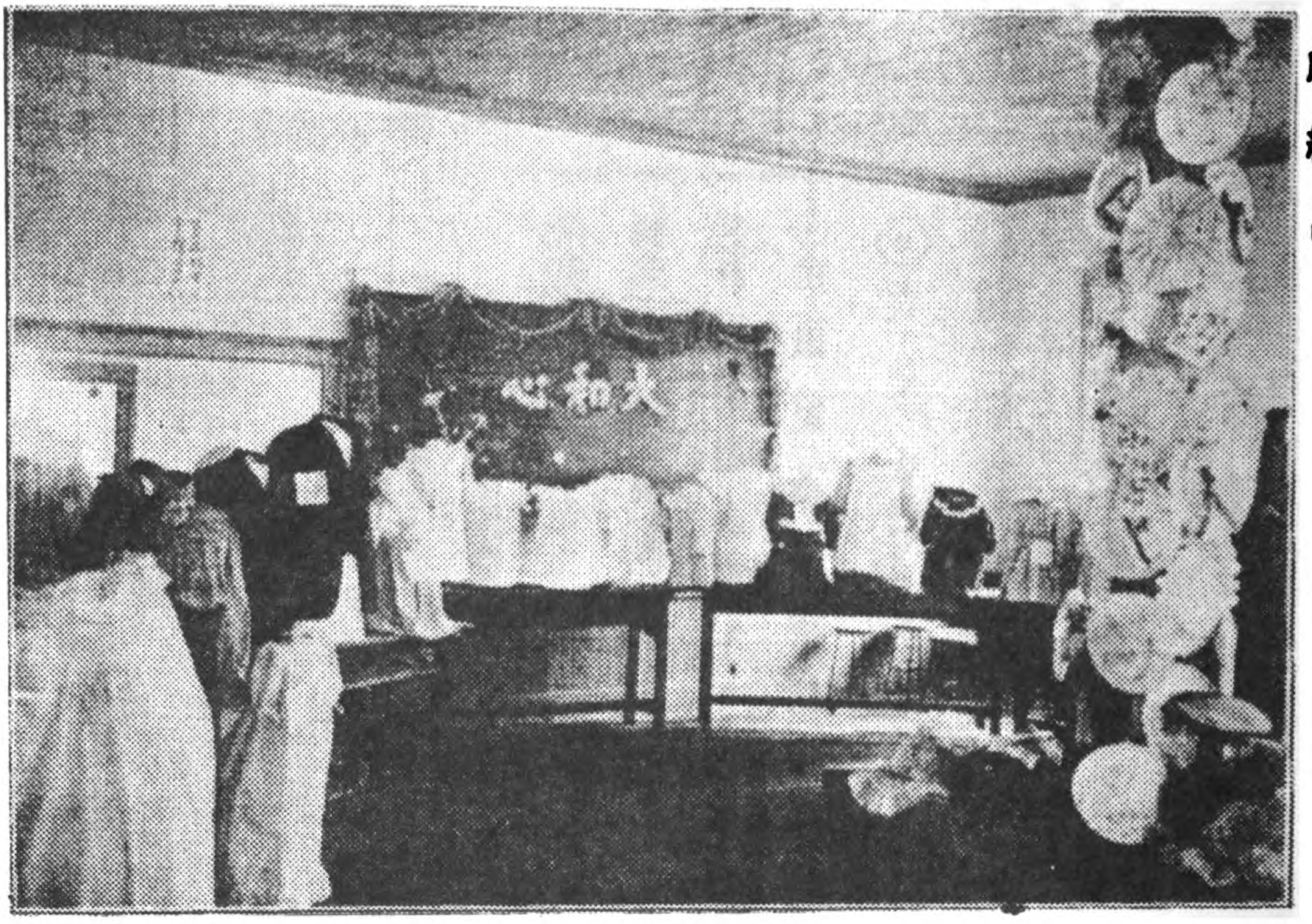
高峯氏發見消化新劑

完備せる裝置の下に熟練なる技術者に依り、製出せらるゝ本劑は品質純良、毎瓶強度均一にして、又其効力永久不變なり。

醫師及藥舖諸彥!模造品製造者の誇大なる虛僞的廣告に誤らるゝ勿れ、世上本劑以上の賣品なきは歐米及吾多數醫學大家の實驗報告に徵し確認せらるべし、需用者は必らず高峯氏タカヂアスターゼと指定せられよ、本劑は粉末錠劑水劑の三種として發賣せり各地藥舖にて販賣す。

代理店　東京南茅場町　三共藥品合資會社

シンガーミシン裁縫學院



成績品



卒業生

懸賞字數あて

明治四十一年六月二十日發行官報第五頁の假名字數（欄外に假名文字あれば、それをも算入す）を言當てたるものに、左の方法により賞品を呈す、

（一）もし各解答ともその字數に的中せざることあれば、解答者中よりその數に近きものを第一等とし、以下等級を定む、例へば五十五の正解なる場合に五十四と、五十六の二者あれば、數の多き五十六を一とし、五十四を二とするが如し。

（二）又正解者の數多き時は、抽籤によつて等級を定む。

（三）〆切は六月十八日中に當編輯局に着せるもの、解答用箋は本誌に印刷せる切とり線内に認むべし、抽籤の場合は、六月廿二日午後一時より本社編輯局に於て之を行ひ、六月二十日の官報を見てその字數の當りたる人は、便宜立會はれたし。

賞品

第一等 女持金時計
第二等 上等帽子地
第三等 絽帯地
第四等 純金指環
第五等 銀時計
第六等 秩父織反物
第七等 勸業貯蓄債券
第八等 女持洋傘
第九等 モウカ浴衣地
第十等より第六十等迄「刺繍教科書」
（第六十一等より第三百等迄 上等繪葉書壹組）



上圖かくし繪のうち七つを探し當てたる方に、左の方法により賞品を呈す

〆切　五月十五日

一等　勸業貯蓄債券

二等　縮緬帶揚

三等　編物教科書

右の外解答者三百人迄優美なる繪葉書を呈す、

解答者中より抽籤にて等級を定む、抽籤は五月十七日午後一時本社編輯局にて行ふ、解答者の封皮には『繪探し解答』と記入ありたし、

懸賞解答用箋

字數あて

字數

六月二十日發行官報第三頁記載假名文字（ひら、カタ假名とし）の總計

字

住所	姓名

繪さがし

住所	姓名


デパートメント・ストアー
三越呉服店
越
和洋
巻莨
シガー一切
鞄
折鞄
靴
旅行用
化粧品入
一式
舶来
文房具
時計
指輪
ブローチ
寶石類
其他
諸大家ノ繪画陶器漆器
銅器七寶 其他新式ノ日
用食器類一式
呉服
洋服
太物タオル
セル等比
新柄品
香水 香油
石鹸 白粉
歯磨 口紅
傘
履物



女鑑
第十八年第五號

男女の戀愛觀

文學士　三輪田元道

斯問題に付ては古來より八釜敷いので、或は神聖主義または本能滿足主義若くは自然主義等の名稱に由つて傳唱されて居るが、之が解決は却々六つケ敷い、併し事實は事實として斯社會に人類の存在する限りは之に伴うて存して居るので、上は貴族社會よりして如何なる下層の階級に至るまでも、皆斯戀愛的事實を存して居らぬ事は無い、最も之に高尚なるものと劣等なるものとの區別はあるが、その何れにか顯はれて來るといふものは

一歩退いて考ふるときは

生理的に關係する

からであつて、全體斯思想の起ることは、恰かも食慾と同じく自然の傾きである、それ故に社會上の事實をのみ根底として之を議論するといふ事は甚だ危險と云はなければならぬ、

一體これは生物の性の特長であつて、之あるが爲に同種族の者が繁殖することが出來もし、また繁殖せしめ得らるゝので、要するに其は性慾に基くのであるから、之を打破しやうとするのは不自然であるのみならず且つ生理的に背反するので、

絶對的に出來ない

若しも其を爲すとすれば直ちに人口問題にも影響して來るのである、以上の關係を根底とするが故に、是に於て初めて之が神聖主義、本能滿足主義若くは自然主義等といふものが成立つのである、

更に歩を進めて云へば

人間は社會を忘れてはならぬ

人間が斯社會に生活するに當つて、若しも斯社會より絶緣して生活し得るとすれば兎も角であるが、既に個人としても社會の一員として存する以上は決して、斯社會といふものを念頭より離してはならぬ、否、相離るゝ事を得るものでは無い、であるからして人間の一言一行は社會の一員として影響を及ぼす事が必要で而して、其が人類といふものゝ安寧幸福を增し、社會の發達進歩を助けて行くものであれば、それが

と稱するものである、之に反して社會の秩序を壞り風儀を亂し、從つて人類に不幸を來すが如き行爲は、不道德にして惡である、それ故に善惡といふものは、單に一個人の良心を基礎として標準を定むる事は出來ない、卽ち社會全體の上からして判定しなければならぬ、從來の學者は之を個人の良心にのみ求めたのであるが、今日の社會より見來れば殆んど其個人的道德といふものは用を成さぬのである、

人の道たると同時に善なる行ひ

此頃世間に喧傳せらるゝ問題で、男子は日本最高の敎育を受け、女子もまた同じく最高の敎育を享けたるもので、而かも其家庭は如何といふに、彼等の父兄は皆相當の敎育のある者で、所謂中等の生活を爲しつゝあるもので何一つ缺點は無いのである、此家庭に敎養せられたる青年の男女は、今日所謂自然主義を實行されたものであるから、彼等に對して新聞記者や雜誌記者は嚴かなる筆鋒を以て彼等に反省を求めたが、而かも彼等二人は恬として耻る色なきのみか、所謂自然主義を實行したのみであるといふ態度で、毫も其良心に於ては何等の苦痛をも感じないのである、

從來唱導せられたる良心說なるものは、反省を促がし制裁を加へて、人をして惡を捨て善に向はしむる根底となつて居つた、斯良心の學說は風俗を搖動することは事實である、それ故に惡い影響を受けたことも事實であるけれども、最早今日之を以て良心に向つて制裁を加へやうとするのは、乃ち木に緣つて魚を求むるよりも難いのであるから、此際社會的制裁の方面よりして之が發達を計り、而して風敎に大頓挫を來すが如き行爲は何處までも之を排斥して改善を圖るのが急務であらうと思ふ、換言すれば、道德的社會的に根底を持たすことが行はれて來て、敎育にも社會的敎育、經濟にも社會的經濟、または社會的道德

といふやうに、凡て何れの方面にも社會生活が接近して來たのであるから、今後は間違つた性慾觀を適當に解釋するには、必ず社會といふものを忘れて判定を試みやうとしてはならぬ。

第二に人間の努むべき點は、即ち自分の肉慾的を抑へる一點で、犬や猫は等しく生物であるから食慾もあり又色慾もある、それは有るのは當然だが、彼等は一たび其慾の發るや、之を制限して適當に滿足する事が出來ぬ、食慾もまた肉體と同じく無限に滿足を得やうとする傾きがある尤も之が動物的の本性で、無論人も動物的の方面であつて、その慾の程度が少なく且つ動物以上の生活をして居る、所謂高等なる階級に屬する者であるから

必ず或程度まで慾情を抑へる

佛敎が六根即ち眼耳鼻舌身意を清淨にするといふ事を說くが、之は人間の生活を禁慾主義に導いたものであつて、是は人格修養の上には大いに利益があつたのである、而かも今日の所謂佛敎徒なる者は、斯克巳的生活に打勝つ事が出來ないが爲に墮落したので、佛敎の衰退は固よりである、

古來の學者または賢人と稱せらるゝ人々は、孰れも道の爲研究の爲、遂に一切の慾望を忘れて

全力を有益の方面に費した

例へば、カントの如き獨身生活をなして學術の爲に竭し、スペンサーの如きも終生獨身生活をなして道の爲に盡瘁した、その他有名の學者等には隨分此例が尠なくない、要するに其等の人は、その研究する所の道や學問が樂しいので、之に向つて多大の趣味を感じて居るから、從つて動物的の慾情を抑へる事が出來

る、否、忘れて了ふのであるが、併し之は非凡の者で無ければ能はぬのである、眼を放つて今日の社會を觀れば、全體の方面が自然主義即ち肉慾的に傾注して居るのである、假りに靑年の男女が淸き交際をなして、兩者の間には毫も猥りがはしき行爲が無いにしても、果して其心の内に於て不都合な考を有たないかと云ふに或は無いかも知れないけれども、何うも是は斷言する事は出來ない、如何に陽に高尙なる風を粧うても、是のみは分らない、基督は言はれた、人間は己に戀愛の情を起すだも尙ほ且つ罪であると誡められた、既に其情を起すさへも罪であるものを況んや肉體に於て道ならぬ接近を爲るといふ事は不道德の極と謂はなければならぬ、聖賢が禮義禮節といふものを制して置かれた、其が慣習となつて之を守る人が多いので、要するに適當の道德慣習を作り、之を以て不德を匡正せられた、所以である、

今日の所謂自然派なるものを觀るに、皆動物的生理的に之が根底を置てある、それが爲社會に惡風潮を來した事は甚だ遺憾である、

第三に古へから繪畫に寫實と理想といふ二派がある、小說にも亦矢張り斯二流があつて、云ふまでもなく實際の事實を畫き且つ語るといふ事は、寧ろ空想を怪說的に描き且つ語るものよりは價値がある、從つて之に反するものは價値が無い、殊に小說の如きは多少活きたる事實を基礎として書いた物の方が感興を惹くに相違はないが、强ち事實をのみ根底として書くのみならず、現時の如く作者その者の生活を根底として書いた物などは甚だ宜しくない、假りに一歩を讓りて實際の事實を述ぶる物が良いとしても、若し今日の社會狀態を寫實したならば、殆んど缺點のみで鼻を掩はざるを得ないであらうと思ふ、此の如き寫實は、啻に社會の發達進步を沮害すればとても、毫も幸福の增進とか社會の發展とかに裨益する所は無い

のである、

故に社會の事實現象を描寫するにしても、其所には一定不動の法則といふものを土臺に置いて、而して之が發達進歩を計るやうに爲ねばならぬ、それは遠く求むるには及ばぬ、即ち理想が必要で、斯理想なるものは無限の發展が出來るのであるから、

理想は即ち社會の生命である、恰も暗黑の夜に一點の明光を認め、之に向つて進むと同じで、實に斯理想なるものが必要である、是の故に自然派、本能滿足派などいふものは、單に人間の弱點に根底を置き、墮落を唯一のものと考へて居るのが抑も間違で、か丶る病源を基礎とし以て自然の標準とするは惑への甚太しきものと謂はなければならぬ、元來定見の定らぬ者は戀愛の爲に目は盲となるもので、それは生理的を標準とするからである、由來盲目的の戀愛といふものは道德的に背馳して行くものであるから、墮落腐敗するのは勢である、故に斯の戀愛を說くに當りては、先づ禁慾的のものを標準に取りて、適當の範圍に於て行ふべきものと考へる、即ち一夫一婦が結婚後に於て味ふべきことで、それも禁慾主義に始まり、自然主義に中し、而して後に神聖に成るのであるが、未婚者は徒らに之に神聖の名を下して試むべきものでは無い、必ず結婚の後にあるべきものである、左樣なつてこそ初めて社會をして向上し發展せしむる事が出來るのであるから、克く斯邊の消息を愆らぬやうにせねばならぬ、

以上を概括して見れば人間は社會と絶緣して獨り生活する事は出來ないものであるから、斯戀愛その物を實行するに就ても、常に社會、道德、理想斯三者を離れてはならぬので、之に背反するものは極力制裁を加へねばならぬのである、

法律上より見たる結婚

江馬牟羅

結婚といふことは異性の男女が相和して第二の我といふものを作りて其種子を傳へると同時に、祖宗の國家を擁護せしむる爲に結合するので、言を換へて云へば、半面は一身一家の榮枯盛衰の基で、他の半面には一國一社會の隆替存亡にも關するのである、斯く大切なる事であるにも拘はらず、明治以前は是に關する規定といつては別に無いので、只一種の習慣法に依つて居たのみであるが、幸にして當今の社會から見ますれば、其組織が較簡易であつたから、先づ其でも濟んで來たのである、けれども女子たる者は始終二割も三割も損な位置に立つて居つて勝手に男子の側より三從とか、又は七去とかいふやうな掟を提出せられて、一も二もなく之に屈從して居たのであるが、最早今日のやうに複雜の世の中となり、且は人權を重んずる社會となりましては、さう迂濶なことでは過ごされない、ソコデ歐米各國にても之に關する規定があるが、それは別に必要も無いから他日に譲るとして、我國に於ける之に關する規定は何うであるかといふことの概略を述べて、聊か世の自由結婚などいふ、青年の男女にあられもない迷想を懷いて居る者の參考に供したいと思ふ、

先年發布せられた我國の民法では、その親族編の中に於てまだ、男女が

婚姻の出來ない場合

に關して左の如く規定せられてある、即ち

一、男は滿十七年、女は滿十五年以上にならなければ婚姻は出來ない、

二、配偶者のある者は、重ねて婚姻をすることは許さない、假りに離縁したとしても、婦人は六ヶ月を經過しなければ外へ嫁ぐといふ事は出來ないと定められてあるが、若しも奇麗に離婚をしないで、再び他の者と結婚すれば、男女に拘はらず、何れに

ても其者は重婚罪といふ刑に問はるゝのである、

二、直系血族すなはち實際骨肉を分けた中とか、又は直系姻族即ち義理なる親子孫祖父母等の間では決して婚姻する事は出來ない、尚ほ此外、三親等内の傍系血族と云つて、實際血筋のある兄弟または姉妹、若くは甥とか姪とかいふものと伯父伯母とかいふものとの間柄では、是また結婚を許さないのである、

右は大要を摘記したものであるが、まづ夫等は如何なる事情があらうとも、決して我國の法律では結婚を許さない事に規定せられてあるので、此の他は自由であるとは云ふものゝ、子たる者が婚姻をするに就ては

父母の同意

を得なければならぬのであるが、若しも子と父母たる者との籍が別になつて居れば、敢て同意を得るの必要は無いのである、けれども其籍が一つであるとすれば、是非とも父母の同意を得なければならぬのであるが、併し兩親の中孰れか一人の行衛が分らないとか、又は死亡して了つたとか、若くは他の籍へ往つて居るとか、或は白痴または精神病などで、迚も自分で自分の意志を表示することが出來ないといふやうな場合には、一方の親が同意さへすれば差支へないのである、斯樣に子たる者が結婚をするには親の同意を得なければならぬのであるから、是に就ては取違ひの無いやうに致したい、最も男子は滿三十歳、女子は滿二十五歳に達すれば、縱ひ兩親の同意が無くとも自由結婚することが出來るとは民法上で規定はせられてあるものゝ、成るべくは父母の同意を得るに如くは無い、之に就ては隨分世間では斯法文を實現して、後に大いに悔恨の境に陷つて、而かも父母に訴ふることは出來ずして、遂には可惜天壽を殞した實例等は尠なくないのであるから、親の同意を得るといふ事は最も安全な策と考へる、親も亦懇ろに之が撰擇の相談に預り、決して物質的の爲に生涯を誤らせ、又は強ゆべきものではあるまいと

深く信ずるのである、
併しながら父母兩方とも行衛が知れないとか、又は死亡したときとか、或は籍を別にしたるときとか、若くは意思を表示することが出來ない塲合とか云ふ時には、滿二十歳以上の男女たる者は、何人の同意をも要しないで、自由に結婚することが出來るのである、けれども滿二十歳以下の男女では、必ず其後見人と親族會との同意を得なければならぬ事に規定せられてあるから、滿二十歳以下の者で、以上の規定に外れたものは法律が許さないのである、もしまた繼父母や嫡母たるものが、その子たるものから申し出た婚姻に同意しないときは、子は親族會の同意さへ得れば、縱ひ繼父母または嫡母が不同意でも、子たる者は隨意に婚姻が出來るのである、こゝに一つの例外ともいふべきものがある、それは自分で自分の財産を處分して行くことを許されない、即ち禁治産者といふ者が婚姻をしやうとするに就ては、年が三十乃至四十にならうとも、その者は何うしても後見人の同意を得なければ爲らぬ事になつて居る、
右に述べたる如く、それ〳〵の規定によつて一男一女が結婚しても、尚ほ之に關する左の規定を履まなければ、法律の上では未だ全くの夫婦とは認めない、その手續といふのは

戸籍吏に屆出づる

ことである、此屆出での書式は役塲へ行けば直ぐ分るが、時に由りては新夫婦の者と、滿二十歳以上の證人を二人以上とで、共に戸籍役塲へ行つて、ぢかに口頭で陳べても宜いのである、此の手續を了れば最早正しく法律上完全なる夫婦と認めらるゝのであるが、若しも此手續が濟してないと、他日何事かあつた時に、正しく我夫または我妻と云ふことが出來ないのである、故に此手續は必ず濟して置かなければならぬ、先年この屆出でをして無い爲に、彼の日露戰役の後、それ〳〵行賞のあつた節に種々な悶着のあつた事は、更めて陳ぶるまでも無く、讀者は既に新聞紙上で御承知のことであらう、

既に正しく婚姻が成立つた以上は、夫婦の間で守るべき掟がある、まづ第一に

妻たる者は夫と同居しなければならぬ、是は妻の方ばかりではない、

之が夫たる者も同様である、而して夫婦は互に扶養をしなければならぬとしてある、是迄我國に於ては、普通夫たる者が其妻を養ひ來つたのであるが、民法の上では互に持つ持れつして行かなければならぬ、例へば若も其夫たる者が夫丈の資産もなく又是といふ技倆もなく、甚しきは夫自身の衣食にすらも窮するといふ様な場合には、如何しても之が妻たる者は自ら働き自ら稼ぎて夫を養はなければならぬと定められてある、是は斯うなければならぬ、是が夫婦の當然である、

それから一旦他に嫁しづいた即ち妻女たる者は、日常の事は暫らくおき、重大な事柄に関しては、夫に斷りなく自分獨りで裁斷をしてはならぬ事になつて居る、尤も夫を有たない滿二十歳以上に達した女子ならば、自分の隨意に處分しても構ひません　けれども夫のある身にはさうは行かない、而して其重大な事件といふのは、例へば、他人に貸付けてある資本または利子を受取るとか、人から金を借りるとか、又は人の保證人になるとか、不動産若くは重要な動産を賣買するとか、自分勝手に商賣を始め、又は仕舞ふとか、乃至は自分の身體に自由にならないやうな約束を他人と結ぶとか、此外まだ澤山あるが、すべて以上のやうな重大な事件は、必ず夫たる者の許可を得た上でなくてはならぬと云ふ事が規定されてある、若しも之を犯す時は又それ〳〵の制裁を加へらるゝのである、法律上の話は打止めて、サテ固より偕老同穴を契つた夫妻の間に、忌はしい水臭い事のあらう筈は無いのである、けれども血の多い青年の時代には、兎角の考もなく、單に情一偏に制せられて、後日臍を噛むとも及ばないやうな悲境に陷りし事例は決して尠なくない、故に愼思熟考の上に之を行ひ且己が權利義務を自覺せねばならぬ、

人體を世界とする蟲

ドクトル　鈴木清義

吾々人類は萬物の靈長だなど、力んで居りますけれど、一皮剝ぎますと疎然とする程ですが、併しその一皮剝がない中が良いので、例へば、演劇を看ても、俳優が舞臺に上つて爲る仕草を視て居れば結構ですが、サテ樂屋へ入つて化粧をする所を見ましては、御座の覺めるやうなものである、

ソコデ美男だとか又は美女だとか云る、方々の、その薄皮一枚の下には、丁度吾々が此地球上に住んで居るやうに、種々なる蟲類が、この吾人の身體を吾物顔に住んで居るのです、此く言つたならば其は蛔蟲や條蟲の事であらうと早合點さる、であらうが、成程それらも住んで居るには相違ないのである、けれども、また

その他に幾多の蟲類が住んで居るので、その蟲の中には往々恐るべき害を吾々の身體に及ぼすものがある、極言すれば其等の爲に吾人の生命を縮むる所では無い或は生命を奪ふ程の危害を時々刻々に與へて居るものがある、

一體それらの恐るべき蟲類は、凡そ何疋位あるかと云ふに、却々何疋位の少數では無い、殆んど何百を以て數へる程居るので、醫學と動物學



との進歩で、ます／＼多く發見せらるゝのである、而して既に發見せられたものも、前述の如く澤山であるが、一々今此に述べる事は出來ない、といふものは、之は一つの專門に屬するものであるから、その中の一疋の事でも、之を微細に說く時は數十頁に渡るのであるから、此にはその中の重なる物に就ての梗概を談ることにしやう、併し本論に入る前に、其等の蟲類は

何うして人の體內に居る

かといふ事を檢べて見たいと思ふ、それは或病毒が遺傳の作用に由りて、親から子に傳はるやうに、矢張り斯蟲類も、子たる者が母の體內より背負て來るものであらうか、但しは生れてから他より侵入するものであらうかと云ふのであるが、之を遺傳の作用に由るとすれば何も論は無い、けれども若しも生れてから、他より侵入するものとすれば、如何なる塲合に如何なる風に侵入し來るかと云ふ事を檢べて見なければなるまいと思ふ、先づ今日までの實驗に依れば、決して遺傳作用では無い、

無論侵入作用である

と斷定せられてある、然らば如何にして吾人の體中に侵入するかといふに、多くは

身體中の腔洞

即ち口とか鼻とかいふ腔から侵入するのである、然らば其等の蟲類は、始終この空間に浮遊して居て、吾人が呼吸する時でも這入るのかといふに、それは一樣でない、ツマリ蟲類の性質にも因るのです、その呼吸よりして入つて來るものは別として置いて、毎日我々が取る所の

飲食物より來るもの

を擧れば、水道は格別として、通常

飲料水より來る者

の中に十二指腸蟲といふのがある、これは我々の體內に大腸、小腸俗に百尋といふ、その小腸の初めを十二指腸といふので、此所に居る蟲は、巾は約そ五六厘から一分位で、雄の長さは三分程で、雌の長さ

は五分位である、而して雄の尾端は特更に傘のやうに開いて居る、それから

住血絲狀蟲といふのは、我々の血の通ふ管の中に住んで居るのであるから、その身體は最も成長した所で約そ三四寸であるけれども、初めは僅かに一分位のもので、太さは極大きいので我々の髮の毛ほどであるが、その運動は却々活潑なものである、以上は重に雌のことであるが、雄は夫より少し身體が少さい、併し活動の點に於ては毫も變りはないのである、

右の外に尙は肝臟ヂストマと云つて、その形は前二者とは異なつて、恰も扁平い木の葉のやうであつて、前端に口を有して居る、而して腹の眞中には吸盤と云つて、丁度蛭の吸口の大きいやうなものがあつて、之で確と吾人の肝の臟の內部に吸ひついて離れないのである、この蟲には雌雄の區別が無いのであるが、それでは自分の種屬を繼續することが出來まいとは、誰しも起る疑問であるが、そこに至つては造化の巧妙、イヤ一方から云ふときは、吾人に甚だ迷惑のものであるが、能くしたもので、一つの身體に雌雄の兩性を具へて居るので、少しも子孫の繁榮には差支へなく出來て居る、その大さは約三分から五分程のものである、

偖それらの蟲類が吾人の體中に入つたならば、果して如何なる危害を及ぼすものであるかといふに、初めの十二指腸蟲にありては、まづ輕いもので貧血を起すから、自然に皮膚や唇の色が死人のやうに變ずる、而して若しも之に罹つて居る者が勞働をすれば、動悸が高まつて非常に疲れを覺える、此に一つ奇妙なる現象は、大抵勞働して疲るれば瘦せるのが通常であるのにも拘らず、此病に罹つて居る者は、之に反して脂肪を增して肥滿するのである、若しまた重いものは、偶々急性な下痢などに遇へば之を支ふる事が出來なくて、爲に死に至る事がある、或は自然々々に衰弱して死の不幸に陷るものもある、何せさうなるかといふに、一體この蟲は、蛭のやうに堅く人の腸の內側に吸ひついて、常に吾人の血液を

吸ひ涸らすからである、何うして其様蟲が我々の身體中に侵入するかといふに、それは以前誰かの體内に居つたものが、何時か排泄物と共に其卵を體外へ出し、それが雨などに流されて、下水や川池などに入りたる生水を知らずに飲むからである、

次に肝臟ヂストマは、土地との關係があるものと見えて、東京などには少ないが、岡山廣島宮城等の各縣下には盛んださうで、就中岡山縣では、人口の十分の一は此蟲に侵されて居るとの事である、のみならず、甚しきに至りては之が爲に一家が全滅したといふ説さへもある、その病症は如何といふに、初め此蟲が肝臟の中で繁殖して肝臟一杯となるので、さうなると大抵生命を奪はれるのである、此の蟲が何うして人體に侵入するかといふに、之は未だ確かな事は分らないのであるが、先づ今日までの定説では、まづ其卵が人の便に伴うて外に出で、それが何時か川や沼などに行き、日を經て卵の殼の蓋が明いて、中から毛だらけの小さき幼蟲が現はれ、此幼蟲

が毛を動かして水中を游ぎ廻つて其間に、小い貝類等の體内に入込み、少しく其中にて姿を變じて貝より出で、又水中を游いで居る時に、それを知らずして其水を飲み、或は器物蔬菜の類を洗ふか、或は之を含んで居る小貝小蝦小魚等を食用して體中に受入れるのである、而して初めは誰も氣付かざるものなれども、病勢の漸く進むに從つて頻りに食氣を催し、或は軟らかなる便通を催すのであるが、此時は未だ苦痛を感じないから、別に仕事をするにも差支へはないが、それより段々胸の下の邊が、壓しつけられたるやうな感じが起つて少しづゝ痛を覺え、從つて腹の上部が漸次に膨れ來り、一層病勢が進んで來ると下痢が甚しくなつて、一日に十回乃至十五回に及ぶのみならず、往々血を混じたり、或は血を吐き鼻血を出し、非常に貧血して、食欲は減じ、脚に水腫を生じ、それが段々亢じて腹に這入りて呼吸は迫り、遂に痩せ衰へて命を殞すのである、

以上重に水より來るものを擧げたのであるが、そ

の水といふ中にも、前來述べたやうに、沼とか池とか、又は流れ川とかいふ所の水は一番危險なのである、然らば如何なる水が一番良いかといふに、先づ水道であるが、それ迚も器物や蔬菜の類に附着して來るものは防ぐことは出來ないのであるが、それは致し方が無いから、器物は克く乾きたる布巾にて拭ひ、日に乾して差支へなきものは、之は日光に曝すが宜い、又蔬菜類は成るべく克く煮て食すれば、大抵はその害に罹らぬものである、まづ今回は之で止めて置いて、何れ機會を得て食物より來るもの丶種類を話すことゝしやう、

實驗 家庭の園藝

青木壽

植物の吾人の身體と大關係のある事は今更ら繰返すまでも無いのであるが、それと同時に亦肉體以上吾人の靈即ち精神にも限りなき慰安を與へるものであつて、生活上缺ぐべからざるものと云はねばならぬといふものは、誰しも花に對して怒つたり、又は不快の感を懷く者の無いのでも分かる、古人の句に、憤として歸れば門の柳かなといふ吟がある、之は一面優しい婦人の美を表はしたもので、たゞ其美を植物に假りた迄であらうと思ふ、如何に外界でムシャクシャしても、内へ歸つて家婦の優しき慰藉に遇へば、忽ちにして其悒鬱は霽れるのである、殊に其時優雅婉麗なる花卉などがあれば、如何に精神を爽快ならしむるか測らるゝものでは無い、故に家の周圍に、縱ひ一坪でも半坪でも空地があるならば、其所に相應したる草花等を植えて培養することは、翅に美しく優しき花を娯しむといふばかりでなく、それと同時に

家庭の融和を計る

上に於て著しい感化を有するものであるから、最早時候も暖くなつて、そゞろに土いぢりも心地の良い季節となつたから、左に少しく此事をお咄して見や

うと思ふのであるが、

園藝の第一主眼は土壤であるが、是とても其所に植える植物の種類に因つてそれ〴〵異つて居るが、さういふ事は數年の功を積まなければ、一寸素人には分り難い事であるから其樣な專門的の事はお預りとして、凡ての植物は何處から生えるかといふに、無論土中から生ずるので、その土中に根といふ自分の身體の基礎を置いて、それから滋養分を吸收するのであるが、併し何れの滋養分でも、水に溶解しなければ自由に吸收する事は出來ないのである、と云つて植物が水に浸し切りになつて居る譯には行かぬ、その效用をなすものは土壤であるが、この土壤をして水分を適當に保たしむる爲には、土地をよく細かに碎かねばならぬ、左樣すれば土地は毛細管引力の作用によつて、水分を宜い工合に保つ事が出來るのであるから、植物の成長を望むならば、之は粗略にしてはならぬ、土壤に次ぐものは何であるかといふに

即ち肥料である

この肥料なるものは、吾人の身體に於ける食糧と同一なるもので、是が無ければ植物は育たぬのであるが、サテその肥料を施しても、葉や莖ばかりが成長して、望む所の花の附きが少ない、花の附きが少いから、果實の生るのが少ないといふやうな事は、吾人が屢次實驗する所であるが、是は何故であらうか、人類が蛋白質や脂肪質に富んだ物を多量に食すると肥滿するといふやうに、肥料中の窒素質の多いものを遣ると、俗に所謂草ぼけがして了つて、肝腎の花が咲かぬのであるから、その花に必要なる

燐酸素を多く含んだ肥料を遣らなければ不可ぬ、この燐酸肥料として今日一般に用ゐられて居るものは、即ち過燐酸石灰、重燐酸石灰など稱するもので、油粕や鰊の〆粕のやうなものは、燐酸と窒素との兩方を含んで居るから、大層都合の宜いので、世間の園藝家に歡迎される、この外に加里類の肥料は如何なる效能があるかと

いふに、窒素肥料を施して、葉や莖の軟らかになるに反して、之を强固に生育せしむるのである、彼の木灰などの中には多くの加里を含んで居ると共に、多少の燐酸も含んで居る、斯くそれ〴〵に効能が異ふのであるから、其植物によつては、是等の肥料を適當に混合して施さねばならぬ、尙一種の堆肥と稱するものもある、一體肥料は植物を生育する計りではない

それと同時に土壤を肥沃ならしめ改善せしむる所の効用のあるもので、例へば、石灰の如きは土壤の酸性を中和して其上に粘土のやうな凝まり易い性質の土を程よく軟らげ、砂地に施せば之を



緻密ならしむるといふやうな機械的の作用を爲すので、肥料としてよりも、此方に大いなる効能を持つて居るのである、

總て植物が養分を吸收するには、鬚根すなはち細い根の先端から吸收するのであるから、肥料を行るときには此事を忘れてはならぬ餘り根際にやると、益が無いのみならず時としては根を損ずることがある、元來植物の根といふものは、葉や莖が空氣中で四方に擴がると共に、矢張り地中に於て擴がるのであるから、葉や莖の擴がつて居る範圍内には、根もまた擴がつて居るものと思はねばならぬ、

既に地拵へが出來たならば、次には蒔つけ或は植付けであるが、小さい種子は土を極細かに篩つて其

上にまき、指の間から洩れるやうな小さな種子は、砂に交せて蒔くのが宜い、凡て土のかぶせ方は何の位かといふに、それは種子の大小や、種々の塲合によつて違ふが、一般の通則として、種子の大きさの三倍乃至四倍の厚さに掛けるのが宜いと云つてあるが、それよりも素人に早分りのするのは、砂土には深く、粘土には淺く蒔くものであると心得て居れば間違ひはない、それから種子は何時蒔くべきものかといふに

大抵は春の彼岸

と定つて居るもの〻、氣候の寒暖によつて、寒い處では其より晩く蒔かねばならぬ、尤も水はけの良くない土地では、他の水はけの良い處よりも春は晩く、秋は早く蒔き、寒地と暖地と比較すれば、寒地はどうしても生育が惡いから、多少細密に植えても差支へない、また痩せた土地は、肥えた土地よりは疎らに蒔かなければならない、とは云ふもの〻、それも取るべき食物即ち肥料の多少によつて云ふまでも無い事である、種子の説明は先づ其れ位として、苗を植えるに就ての注意を云へば、

苗を植えるには曇つた日

が一番宜いが、餘り風の強い曇つた日は不可ぬ、若しまた丁度曇つた日が無いといふ時には、葉を半分位に切り詰めて植えると、大抵日中でも枯れずに生えつくものである、それは何故であるかといふと、前にも述ぶるが如く、凡て植物といふものは

根の働きと葉の作用

とで生育するものであるから、常に此二つの作用が平均して居なければならぬ、然るに之が其一方、例へば、葉を皆挘つて了へば大抵の植物は枯れて了ふ、根に於ては云ふまでもないのである、而かも今植えかへるに方り、根はまだ十分土に落ち着かないで弱つて居るにも拘はらず、葉の方だけが依然として働きを繼けて居つては、ツマリ根との平均を失つて終に枯れてしまふ、其所でその力を平均させる爲に、一時チョット葉の勢力をも縮めるのである、是の故

に植木師が大木を植えかへる時には、必ず根を切り縮めたらば、枝もそれに準じて切り縮めるのであるが、此所に根といふのは、重に牛蒡根と稱する大きい根で、成るべく細い根は切らないやうに爲るのである、

全體植物を植え換る時期は、大抵秋になつて葉が落ちてから後とか、又は春なれば芽の出く前とかに行らねばならぬ、これは植物も動物の或物と同じやうに、冬の間は葉が落ちて用をなさず、根もまた吸收の働きを止めて、殆んど枯れたも同様な有様で居るものが多い、これを

植物の冬眠とでもいふので、此間に移し植えるのが最も得策なのである、而して若しも誤つて根を傷めた場合には、その傷口を更に鋭い小刀で切つて、滑らかにして置かなければ不可ぬ、また遠方から苗木を送つて來た場合などには、それを急に水の中に浸けることは最も宜くない、かゝる時には漸次に濕氣を含ませるやうに日陰の處か、或は少し濕氣の多い處に假りに植えて置かなければならないのである、

それから時々に水を遣らねばならぬが、その時には必ず如露の孔の細かなのを用ゐて、平均に徐かに撒くやうにしなければならない、決して柄杓などで一時に亂暴は遣り方をしては良くない、全體如何に植物の發芽や成長に水分が必要だからと云つても、若しも其度を過すときは、却つて其が爲に地中の空氣の流通を妨げて、根は窒息して了ふ、鉢植にした植物が原因も分らずに何時の間にか消えてしまふやうな時には、餘り水が過ぎるに依る事が往々ある、土の中にあるべき根が地上に出て來るやうな場合には、確かに水が過ぎて、地中の空氣の流通を妨げた爲である事が判る、

第一發芽の時に水分が多過ると、如何に太陽の熱は十分に當つて居ても、周圍の水分が蒸發するために、芽の發育に必要なる所の温度といふものが皆取られて了ふから、従つて芽が十分に發育する事が出

來ぬ、それは丁度夏の熱い時に氷室の中に入ると、周圍の氷の爲に身體の温度を奪ひ去らるゝから、知らず〳〵涼しさを覺えると同様な譯である、それ故に此點も十分注意しないと、それまで折角丹精したものも、それが爲に枯らして了ふに至るのであるから、層一層の注意を拂はねば不可ぬ、

以上述べ來つた所は一般の園藝に通じての事を略説したのであるが、或は事業が忙しいとか、勤務に暇が無いから、迚も其様な庭いぢりや土掘りは出來ないと云はるゝか知らないけれども、何も左程事業や勤務の障りになるまで時間を潰すには及ばないので、朝夕僅かの時間を利用さへすれば其で出來るのである、何も貴重な時間を浪費してまで園藝を行るには及ばない、專門家は別として、單に素人が所謂慰み半分に遣る仕事のために、日々の勤務までも怠つてするといふ事は固より良くない、けれども其勤務や事業の側ら、斯様な園藝を嗜むといふことは、啻に自己の身心を怡樂せしむるばかりでは無くして、また家庭の者と共に其樂みを同うする事が出來るのは云ふに及ばず、何時となく夫等植物に對する智識をも收得する事が出來るので、一擧兩得どころではない、一擧三得も四得もあるが上に、家庭を融和して春の海の如くならしむるの要素とも爲るのである、

簡易生活の勁敵

宇留野琢一

世の中が進歩すると同時に、社會を通じて複雜となるのは今更繰返すまでも無いのである、其に就て吾人人類が直接に苦痛を感ずるのは何であるかといふに、萬口一齊に唱ふる所の生活難である、某統計家の説によれば、我國も今より二十年前の生計費に比べると、最早今日は殆んど三倍以上に達したので、例へば、飯米の如きも一圓に一斗三升替へ位であつたものが、今日では同じ一圓の金でもつて漸く五升前後といふ、騰貴である、家賃の如きも其頃六

疊、四疊半、二疊の三間で、其の上一切の造作が附て一ケ月僅か二圓五十錢に、七圓足らずの敷金であつたものが、是も今日では同樣の家が、家賃が一ケ月七圓に敷金が二十一圓といふ相場であるから、却々なまやさしい事では暮して行かれない、それも側がさう何に限らず騰つたのであるから、まづ月給取なれば其だけ額が增されて居るかといふに決して左樣でない、單に月給取りのみではない、一般世間の收入が夫程增して居ないのである、故に生活難を唱ふるのも無理からぬ、とは云ひながら是は世の中の大勢であつて見れば、一人や二人のものが兎や角言つた所が如何とも仕難いのであるが、此所に一つ憂ふべきことは、かく生活難が襲來すると共に、今後は家庭を作るといふことは、最難中の最難事で、方今世の靑年男女が夢想して樂しんで居る所のスヰートホームとか、又は

理想の家庭の實現は容易でない

然る時は必ず非常な速方を以て、所謂老孃が增加するに相違ない、これは餘儀ないこと丶、云へばいふもの丶、單に其人のみでは無い、延いて國家の一大不祥事は此に胚胎さる丶のである、何故なれば、結婚者が少なくなれば自然人口が減ずる事となる、當今世界各國の有樣を觀るのに、

その勝敗は人口の多少と正比例

するので、人口多ければ勝ち、少なければ負けるといふのが事實であつて、近年フランス國がます〳〵弱くなるのは、畢竟生活難が加はると共に、家庭を作るといふことが非常に困難となり、從つて結婚の數が減り、それと共に人口が殖えないからである、この人口の增さないといふ事は、一國に取りて最も忌むべき現象で、必ず其國は衰へるのであるから、米國の現大統領ルーズヴエルト氏などは之を憂へて處々の母の會などで演說しては、頻りに結婚を奬勵して居る、けれども一たび此世に生れたからには、厭でも應でも此生活難といふ大敵と奮鬪しなければならぬのである、先年東郷大將は、日露の戰役から

目出度凱旋せられた時に、軍人の一生は連綿不斷の戰爭であると云はれたさうだが、何も此言は軍人のみに限つた話では無いので、我々人類は一生涯この生活難といふ大敵と

連綿不斷の戰爭

を繼けねばならぬので、而かも此生活難といふ敵は、平時も戰時も差別はなく、日曜大祭の嫌ひなく、晝夜間斷なく我々に肉薄して來るのであるから、餘程覺悟をして掛らないと、見苦しい敗北を取るのは必定である、ソコデ何とか此生活難に打勝つ工夫は無いものかといふに、その作戰計畫は幾らもあるが、唯一の策略は

簡易の生活に如くものは無い

この簡易生活を持續すれば急度その生活難を降服することが出來るのであるが、こゝに其簡易生活を爲すに就ての前途に一大障碍物が横つて居るので、この障碍物は男女共に之が爲に阻まれるであるけれども、殊に婦人には此物の爲に簡易生活を遂行するに憚るのである、それは外の物では無い、

即ち虚榮心である

最も此虚榮心も遣ひやうに依つては左程咎むべきでもないが、今日多く表面に現はれたる所の事實より推斷するときは甚だ喜ばしからぬので、例へば、婦人の第一に此虚榮心の爲に捕虜となるのは衣服および身の周圍の裝飾で、次は家屋であるが、此住居といふことに就ては、隨分良人に反對してまでも高價を拂ふ家屋に住みたがる、また其に連れて食事萬端、、がさうなつて行くので、其では迚も此生活難の包圍攻撃を免るゝことは出來ない、とは云ふものゝ、其は僅に自己の虚榮心を抑へて簡易の生活に甘んずると否とに在るのである、

一體我國の中流以上では歐米とは異つて、成るべく少しでも多く人手を借りるのを何よりの誇りとして居る、即ち夫等の階級に屬する夫人や令孃になると、先づ重い物は箸より外に持つた事が無いといふのが常で、僅に一二間向ふにある物でも、直樣女中

に命ずるので、それも何かと思へば、書棚の本を取つて呉といふ位に過ぎない、また餘所へ行くにも、僮に菓子折一つ位の包も自分で持たないで、女中を供に伴れて行くといふ鹽梅であるから、自然家庭にも多くの女中を傭はなければならぬといふ事に立至るのである、是等は皆虚榮心に驅らるゝより生ずる所の弊で自然家政の一端に斷隙を生じ、
乃て生活難を呼ぶの聲と化するのである、云はゞ嗜き好んで内を火の車にするので





あると云つても過言では有るまいと思ふ、
昔し大祿の某大名は、維新の後市中の湯屋に行かれ、自分は相變らず召使の者に背中を洗はせて居らるゝ其傍らに、一人の男は手拭を扱ひて、精せと自分の背中を洗つて居るのを見て、非常な感に打たれたものか、皈邸の路すがら供の者に打向ひ、予も來世は彼の者の樣な重寳な腕を具へた人間に生れて來たいものだと述懷せられたといふ事だが、最早今日の樣な世智辛い世の中では、迚もそんな悠長な事では行くものでないか

ら、何ごう外見を張らずとも、成るべく着實に往つて貰ひたいものである、換言すれば、凡て物事を簡易にするといふ心を養つて欲しい、併し是は婦人方に取てはより以上の苦痛であるかも知れないが、努めて此虛榮心といふ勁敵屈服しなければ、迚も家庭は豐かに爲るものでは無い、

布の曲りを正す仕方

小出新次郎

衣服を綴る上にてそれ〴〵原則用の事も澤山あることであるが、今日は兎に角その一部分に屬する

布の曲りを正すこと

即ち布曲整理法といふことゝ、これに相伴うた補綴方に關するお話をしやう、

先づ布曲整理法のことからすれば、これは衣服を作る上に於て凡ての場合に於て必要があるので、例へば、袵の篦附若くは褄先の篦附等は云ふ迄もなく、或は衣服の表又は裏となるべき布地の總ても、第一は此法に依りて正しくし、而して後仕立つべきものである、また此く爲なければならぬ、即ち下着服でも胴貫の衣服を作るにしても、必ず此法に依らなければならない、また或場合には長着の裏などに二つも三つも補綴なければならぬ事があるが、さういふ場合には是非とも此法に依らなければならぬ、若しも此完全なる方法に依ること無しに二つも三つも補綴だとすれば、必ず一枚は左りに傾き他の一枚に右の方に歪むといふ風で、迚も完全なるものを得ることは出來ない、去れば其方法は如何いふ風に爲るのであるかと云ふに、先づ其前に一般の人に用ゐらるゝ之が方法を述べて見やう、

世間多くの人々が從來如何に布帛の曲りを直すの方法として、常に如何なる手段を取り來つたかと云ふに、まづ初め布曲を正すべき二三枚の物を揃へ置

き、而して其布帛の縁邊の切小口の方へ目分量に尺度を當て、その尺度に準じて引篦をなし、その篦筋より掻き落し、之を以て布曲りを正しくした積で居る。否、之を以て完全なる方法と心得て居るけれども、その實は危險千萬なのである、何故かといふに、假りに一枚の上で五厘の違ひが生じたとすれば、三枚では一分五厘の狂ひを來すこと丶なる、して見れば到底これを以て安全なる方法と云ふことは出來ない、併し他に安全なる方法が無いとすれば兎も角、暫らく其方法に依るの外は無いのであるが、若し他に完全なる方法があるとすれば、其に依らぬのは愚の極と言はなければならぬ、とは云ふもの丶、從來之に關する安全にして而かも完全なる方法があつたのである、けれども多く專門家の堂奥に秘せられて居て、容易に門外より窺ひ知ることは出來ないのであつた、併し技藝は何種に限らず、或部分より以上は自ら工夫して達すべきものであるが、それ以下は學んで得らる丶のであるけれども、その先覺者が秘して傳へなければ知る由は無いのである、

今日の如く時間の經濟を尊ぶ時代にありては、殊に己が長は他に施し、他の長は取つて以て己が短を補ふといふやうにして、また昔日の如く口傳秘訣などゝ稱して偏狹に構ふべきものでは無い、依つて予は今こ丶に安全にして毫も危險なく、學理と實際とより割出したる布曲整理法なるものを開陳して彼我の便に供しやうと思ふが、

その方法は、初め二枚乃至四枚の布帛を揃へて裁物板の如き平らの物の上に正しく置き、その中の上の一枚を竪に二つ折となし、右にある切小口もまた不揃ひにならぬやう正しく揃へ置き、而して向ふへ折りたる處の二枚の耳もまた正しく揃へるやうになして、そして右の向ふの端の處で五厘乃至一分かけて篦標をなし、更に元の如く引起すときは、今現に附けたる篦が右の向ふの端と手前とに標が附くのである、ソコデその向前の標を定木に尺度を當て引篦をなし、そして下なる布と共に掻き落して布曲を正

すべきもので、斯様に爲なければ迚も正確に且つ安全に爲ることは出來ない、何故かといふに、凡て角度を起すといふ事は

曲尺即ちスクエールを使はなければ正しく行くものでは無い、依つて今は其曲尺を用うる換りに、一旦二つ折となして耳を揃へて標附をなし、それより引起して其向前に尺度および定木を當るので、是は取りも直さず尺曲を使ふに等しき事となるのであるから、完全なる衣服を作るには、耳の處より折癖を附け、また物によりては熨斗若くはアイロン等を使ひ、時としては耳に鋏を入れて充分に布癖を直し、而して後繼合すべき物は繼合せ、左様で無い物でも、必ず布の周圍を正し、次で正しく篦附をなして後衣服を作るべきものである、苟も是等の注意を怠つては不可ぬ、

それにしても表樣の物を繼ぐ必要の場合、即ち絹物などに至りては、或場合には

横糸を一本引拔きて其處を繼ぐやうに爲ることもある、左樣すれば繼目か折目か殆んど見解が立たぬまでに完全に出來るものである、次に縮緬の類には

しめしはぎといふ事がある、この方法に依れば、何うしても繼目が見えるもので無いけれども、

それは色氣に由つて出來ないそれ故にチヨツト濕した布巾で濕りを呉れた位では色氣に別段の變化を來さない物に限る、その方法は如何するのであるかと云ふに、最初繼ぎ合せやうといふ布の其部分へ、濕布巾を當て上より壓へて充分に濕りを呉れ、そして出來得るだけ布を引延し、直ちにゾベ又はヌキ糸のやうなる極めて細き糸にて、極めて小針に繼合せ、そして暫く其處に放置すれば、乾くに從つて縮むのであるが、そのまだ生乾きの處で程好く鏝を當て、双方の布に伸縮みの無きやう平らな程度にて止むるので、斯樣さへすれば決して何處で繼だか分らぬやうになるのであるが、是は縮緬

に限るので他の物には不可ぬ、兎に角繼方で大切な事は前陳の布曲整理法で、その他は木綿、絹、縮緬等布その物の性質に由つて多少其繼ぎ方が異なるのであるけれども、まづ大體は右の如くである。

旅やどり

佐々木信綱

小金井や櫻の雨にそぼぬれて
　土産の若鮎のもちおもりする
僧と我と船子と三人の下り船
　岩なみもゆる丹つゝじの谷
並びたつ老木大木の物がたり
　千歳の森を月はおぼろに
立こむる霧のちまたのやちまたに
　一人たゝずむ我世なるべき
眞白帆に朝風みてゝ千石の
　舟つゞきいづる港江の春

夢さめてふと見かへれば天地の
　見ゆるきこゆるわれにしたしき
椿さく川そひゆけば今も君に
　あふ心地する川添ゆけば
あじろ笠はるかになりて若草の
　野をゆく僧の二人づれかな
なにごともいはでわかれしそのかみの
　人なつかしきおぼろつき夜や
早鞆のせとの早汐緑汐
　あさ日にかをる二月二十日
雨の音胸にぞ語る何せんに
　いきながらふる此世なるべき
もやのうちの燈火の色物の音
　夜のみやこのたゞうつくしき
かゞりあかき櫻がもとの走り舞
　撥さす袖に花ちりみだる
四とせぶり手とり語らふ水樓や
　流れをくだるやみ夜舟唄



胃腸の養生法（承前）

醫學博士　長與稱吉

營養品としての肉汁

肉汁は、牛肉又は鳥の肉を細かく挫いて、湯煎にしたもので、肉類中の、水に溶解する性質をもつたものは、悉く其の中に溶けて出るのであるが、其の滋養價に至つては、實に微々たるものである。

肉汁の製法　は至つて簡略である。即ち牛又は鳥の粉韲肉、百分をとり、之れに普通の水二百分を加へ（たとへば肉五十匁に水二合許り）よく攪拌て、二時間ばかり冷所に置いた後、重湯煎にかけて、水分が半量と減るまで、煮つめるのである。之れを煮つめるに際しては、高熱を避け、七十度以下の温を以て、徐々に煎じることに注意しなければならぬ。

さて、そこで、煎詰めた汁を冷却くなるまで、放置つておいて後、なる可く篩眼の細かい布片を以て、それを漉す。而して最後に、殘つた肉の滓をば固く搾つて、充分に水分を取るのである――これで肉汁は出來上るのだ。

肉汁の滋養價　についても、此の前に説いた牛乳の如く、世人は一般に大なる迷信を抱いて居る。肉汁は決して諸君の思つて居られる如く、多量の滋養分を含有て居るものではない。論より證據、之れを分析して見ると、大なるコップ一杯の肉汁中、蛋白

及び脂肪分の量は、小刀の尖に、チョンぴりとした位ほかない。即ち二合位の肉汁中には、大凡一匁位しかないのである。だから、吾々が此の肉汁から、團子位の大きさに當る。滋養分——蛋白質脂肪分を得やうとするには、非常に多量の肉汁を飲まなければならぬ。

かく言へば諸君は不思議に思ふのであろう。五十匁の肉を二合許りで煮て、それを一合程に煎じつめるのであるから、其の中に含まれて居る滋養分は、少なくとも二十匁や三十匁位はあると、思はれるであろう。處がないから、おかしい。なぜ無いかといふに

元來蛋白質は不溶解性の物であるからして、水の中へ溶けて出る分量は、極々微々たるもの、殊に熱を與へると、初めから溶けて居る蛋白質でも、直ちに凝固つて了ふ特性があるので、故に煮れば煮る程、凝固くなる。

脂肪とても其の通り、水に溶解するのはホンの一部分で、これも矢張り二合の肉汁中、一匁内外しか溶けて出ない。

斯の如く諸君が信せらるゝ肉汁中には、滋養分の分量が少ないのである。然らば其の原料に使つた肉類中の養分は、什麼なるかといふに、蛋白や脂肪は、決して那邊へも逃げてゆきはしない。肉の中に依然と止まつて居る。だから、どうしても煮出した汁よりも、殘つた肉滓の方に、滋養分があるといはねばならぬ。

肉汁の應用　肉汁は病人の食餌として、或る止むを得ない場合に用ふべきもので、建康人の用ふべきものではない。用ひた所が害はないが、其の代り効能も少ない。こんな肉汁に信頼つて、補給をつけやうと思ふのは、大なる誤り、已に前にも述べた如く、普通の常飯、肉、芋、豆類が食べられる腹ならば、水のやうな肉汁を飲むよりも、煮た滓を食つた方が、幾倍まさつて居るか知れない。これを金屬に譬へて見ると、肉汁は鉛、肉滓は金である。

だから本品も矢張り、固形食を取ることの出來ない病人にこそ、重寶なるものなれ、建康な人に向つては、實際價値の少ないものであることは、論ずるまでもない！

肉汁の效用としては、幾分神經の興奮劑にもなり、又消化を催進める力もあると、言ふまで。建康人が用ひんとならば、よろしく湯茶を呑むつもりで飲めば、間違ひはない。之れを以て、衰弱を恢復しやうとか、身躰を肥滿さうとか、いふのは大なる見當違ひである。

終りに肉汁の分析表を掲げる。

牛肉汁の分析表

水分	九七、五五九五
乾燥殘渣	二、四四〇六
酒精エキス	〇、九五七八
膠質	〇、二二一四
其他のエキス	〇、六四二二
窒素全量	〇、二八七六
灰分	〇、六一四二
燐酸	〇、〇八二六
加里	〇、一四八〇

鷄肉汁の分析表

水分	九七、一八五二
乾燥殘渣	二、八一四九
酒精エキス	〇、四九〇三
膠質	一、四九〇六
其他のエキス	〇、五三六四
窒素全量	〇、三七三五
灰分	〇、二七二五
燐酸	〇、〇一四九
加里	〇、〇二九七

（以上二表ハ藥學雜誌所載の竹内辰藏氏報告による）

（附言） 本章は前號牛乳の話の次ぎに掲ぐべきを取りおとしたれば茲に追加して掲載することゝす

若葉かげ

伯爵　東久世通禧

谷新樹

しげりゆく木々の若葉に谷川の
　音さへほそくなりぬべきかな

山新樹

みなれたる軒ばの山もみづ枝さし
　高さをそふる心地こそすれ

杜新樹

神がきの森のしめなは見えぬまで
　木々のわか葉のしげる頃かな

林新樹

のこりなく夏のけしきになりにけり
　片山ばやしみづ枝さしつゝ

雨中新樹

若みどり枝おもげにも見ゆるかな
　雨のしづくにしなへまさりて

芍薬

ふかみぐさ散りにし後にさく花の
　色もにほひもたぐひなきかな

岸上藤

むらさきの雲かと見えて若葉さす
　かた山きしにかゝるふちなみ

待郭公

老が身は心せかれてほとゝぎす
　おそき夏ともおもひけるかな

遠郭公

夕月のかげもくもりてほとゝぎす
　とほき初音もさやけかりけり

雨中郭公

ほとゝぎす忍び音なれどふる雨の
　軒のしづくにまぎれざりけり

五月雨

池の面のはすのうきはも波こえて
　にごりぞまさる五月雨のころ

折に觸れたる感想

中川愛氷

花より團子

近來高等女學校といふもの頗る繁昌し、極めて不景氣なる女學校も、その上に高等の二字を認可さるれば、忽ち繁昌すること受合なるは、最近の事實之を證明して餘りあり、然らばそれ等の女學校は、校長の人格中心といふよりも、敎授法の如何といふよりも、一の免狀によつて立行く譯なり、なさけなき話なり、さるが中に東京は十五區より郡部にかけて、實踐といふいさゝか陳腐なる、否當世女學生に不向なる名稱の下に、校舍を幾度か建增をせねばならぬほど多數の生徒を通學せしめたる、下田歌子氏の女學校は、此の點に於て大に誇るべきものあるなり、殊に支那留學女生の養成に至つては、下田氏の得意如何ばかりぞ、予は三月廿八日同校の卒業式に列し、支那女學生の尋常ならざる成績を目擊して、頗る愉快に感じたりき、

欠伸催す長談義

今年も例によりて、東京の女學校卒業式には大半列席したり、今日を限りの別れなる師弟の情、重荷を卸せる如きよろこびの中に、今更ながら名殘の惜まれて、動もすれば打しめらんとす、興味ある演說の一つ位は是非この式にほしきものなり、時間を平氣に費やす學者の長演說に、欠伸など催さるゝに至つてはさんぐ\なり、頼まれてもすまじきものは、かゝる折の長談義也、

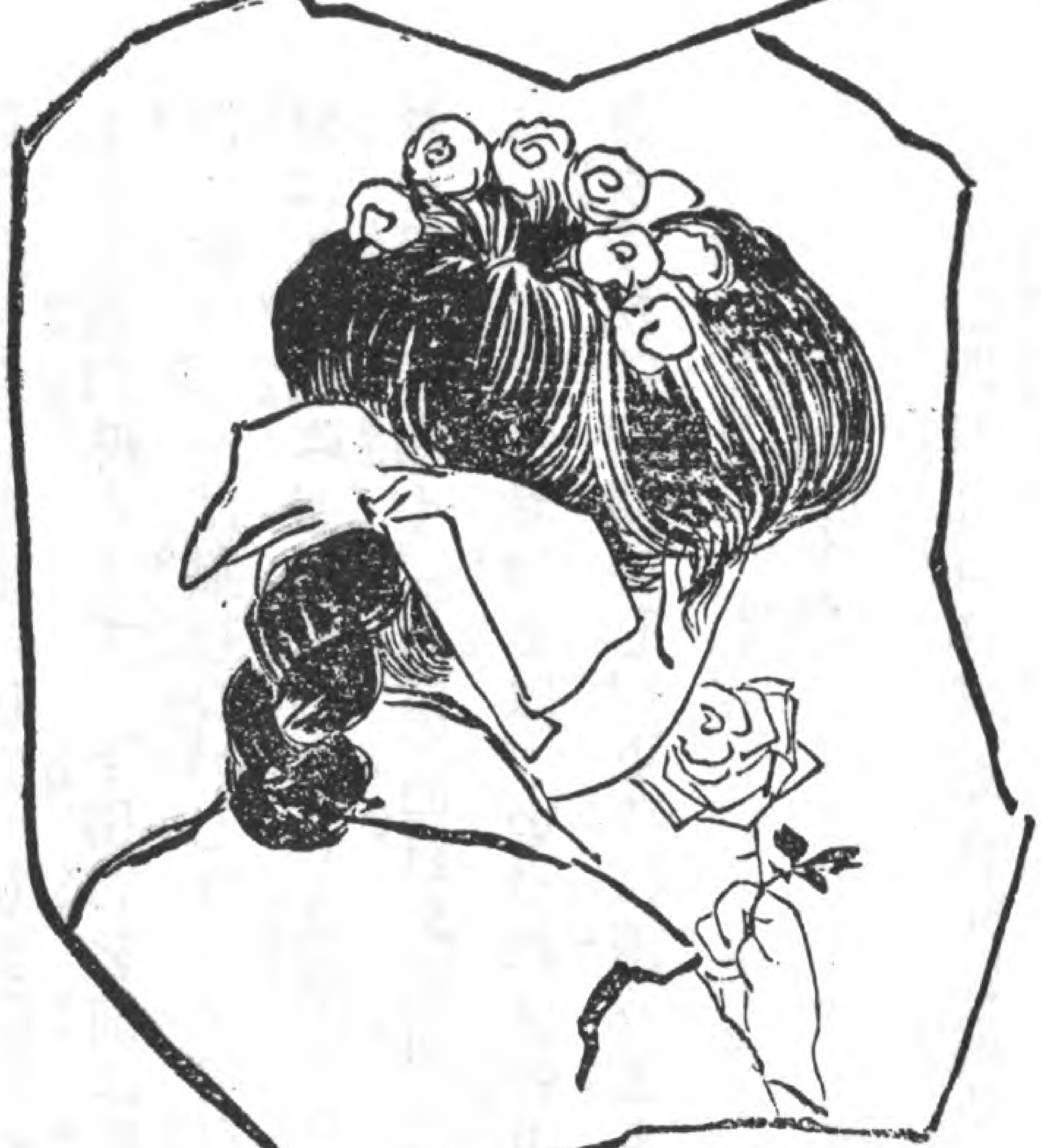
人と人との因緣

夫婦となるべき人は、双方の僅に見合したる位の間なるがよし、といふ人あり、それにてはあまり心

細きことならずやといへば、大抵はそれにて治まるなりと答ふ、成程それにて思合はさるゝことあり、學習院の女學部長にても、東京にて誰よ彼よと騒ぎ出せば、毛嫌ひなどいふものも手傳ひて旨くは行かぬを、遠方より思掛なき人を迎へて、意外の感に打たるゝ間に、時日は經ちて、下田氏の後任、今日まで兎に角に批難少く漕ぎつけたるは、さもあるべきことならんも實は不思議なり、



花下の眠



小出粲大人は、老ハイカラの評ある如く、歌も古雅なる中に氣の利きたる所あり、當代第一流の歌人なるべし、予は十年以前京華日報といふを編輯せる時、募集歌の選を賴みたる事ありしよりの知合にて、女鑑の讀者文藝に大人を煩はすに至りしは、昨年九月の事なるが「大人を選者にと思立ちたる時は、編輯〆切に一日の猶豫あるのみなりしに、大人は二つ返事にて快く受合はれ、爾來選者として一度も予等編輯者に餘計なる手數をかけられたる事な

し、道に忠實なると、その氣根のよきによるべく、たゞ／＼敬服の外なし、この女鑑五月號、遂に大人最終選歌の紀念となりて、四月十五日大人を白玉樓中に送りたるは、まことに思ひも掛けぬことにて、老ハイカラの面目、今も見る心地せらるゝなり、大人は西行法師の德を慕ひ、我も死なば、きさらぎの望月の頃なるべし、と期せられしに、法師の命日なる十五日、散りゆく花の下に眠られしは、大人にとりて最後の本意なるべく、從七位より一躍正五位に累進せられしは、死後の光榮これに如くものあらず、歌人として圓滿に終始を一貫せられたる、大人の如きはまた珍らしからずや、予は大人の逝去を惜むとゝもに、大人が地下に於いて如何に得意なるべきかを思ひてほゝえまるゝも悲し、

女性の修養

さき頃下田次郎君より其の著『女子の修養』を、鳩山春子君よりその著『婦人の修養』を寄贈せらる、女學生間に面白からぬ評判多き時、かゝる著書の出づるは、まことに喜ばしきことなり、拜讀するに、下田君のは重に皮の内に就て、鳩山君のは皮の外に就て、女性の修養を說きたるものなり、一は眞面目なる顏に愛嬌あり、むつかしき理屈の中にも、いひしらぬ面白味ありて、下田君を前に置きて其談話を聞く如く、一は氣むつかしさうにて存外さばけ、如何にも氣輕に、また如才よく立廻はらるゝ、鳩山君自身を畫ける如く、各其の面目を紙面に躍如たらしむ、この二冊を併せ讀まば、いづれに押出しても差支なき女子たるを得べし、下手に讀み玉ふ勿れ、

花上の雪

ことし四月九日には、年代記に殘るべき珍事あり、この朝窓前の櫻花、今を見頃なるべしと起出づれば、冬にもまたあるまじきほどの雪ふりつもりて、綿を包める如き枝に、下より見る花の色彩、畫の如しといひたけれど、かゝる畫のあらん筈なし、夏霰がふ

ればとてさまで珍らしくは思はねど、今を眞盛りの花の上に、置たがへたる雪と見るの外なし、雪の日の景色のみは尋常ならじと思ひて、求得たる我家ながら、この珍事を狹く看過さんも本意なしと、目的地を本誌編輯局と定め、四谷霞ヶ岡なるわが家を立出づ、雪ならば幾度袖をはらはましといひけん、滋賀の山越にはあらで、花のトンネルに雪にまじれる花片を傘にうけて、練兵場に出づれば、滿目唯白一色なる中に、勇ましく繰出す兵士の、次第に霧中に入る如き光景あまり寒からぬだけに面白し、青山四丁目より電車に乘る、滿員にてプラットホームに身動きのならぬ仕合せなりしが、大路の景色を送迎するには却つて妙なり、多くは雪の爲に意氣地なく切れたる電信の糸の、雪をつゝみて大仕掛の花がたまと見るべきに、左右に立並びたる櫻樹の景を添へたる、その日忽ち電話不通に不自由を感じたるにも思及ばず、この美觀をいつまでも留めまほしく思ひたるは、我ながら餘りに思ひやりのなき話なり、赤坂見付下にして電車は半時間ばかり立往生したりしが、右に閑院宮邸、左に北白川宮邸より辨慶橋にかけたる雪げしき、三宅坂より御濠端の眺め、雪はいよ〳〵降りていよ〳〵おもしろし、木挽町を通れば、この大雪にはと思ひしに似ず、歌舞伎座の前は、黑山の如き人が雪の爲に白山となれるを見たり、やがて築地に着きぬ、一時間ばかり經ちて戸外を見れば、來りし時の鐵道は、いつしか雪に埋もれて、行通忽ち自由を失ひぬ、さてもこの雪をおもしろしと見しは、千人中の一二人なるべく、造物主の惡戯としては、上の出來なるべきか、

四季の景物

その翌日は空晴れて、夜に入れば月さへ出でたり、花と雪と、いづれに影を宿すべき、月もいさゝか戸惑ひせる感を起せるなるべし、折から取忘れたる軒の風鈴、落花に短冊を拂はれて、チリ、ンと音せるに、四季の景物滯りなく揃ひたり、御馳走も斯く揃

ひては、食傷せざるを得ず、之を歌にすれば

雪に冴え花にかすみてさす月の
　軒端にすゞし風鈴のおと

人の慾も大抵にしたきものなり、

入江川

侯爵　鍋島直大

江柳

入江川ゆきかふ舟にさはるまで
　岸のやなぎはのびまさりけり

折蕨

永き日の暮るゝもしらで野に出でゝ
　わらび折るこそたのしかりけれ

新樹廻庵

我やどのめぐりの若葉生ひしげり
　となりの家も見えずなりにき

杜新樹

夕月のひかりはうすきおくやまの
　わか葉がなかに鳴ほとゝぎす

紫陽花

花の色のゆかりもことに見えにけり
　おほにはにさくあぢさゐの花

朝梅雨

閨の戸はふるさみだれに明かねて
　朝のねざめのおそくもあるかな

海邊の郭公

さやかにもなく聲すなりほとゝぎす
　荒いそなみの音にまかせて

夏花

さみだれの晴れたる庭に出て見れば
　くりの花こそちりみだれけれ

晴後遠望

海こしのあはの遠山見えそめて
　晴わたりたり沖のあまくも

見た事の記

爵伯　柳原華山

その一　始めて踏んだ外國の土地

何確によらず始めて出逢つた事は腦裡に深く印象を與へる者だと云ふ話は、豫々聽いてゐたがなる程、實に其通りだと悟つたのは、僕が昨年の十一月の十八日に横濱を解纜した郵船會社の加賀丸に乘つて太平洋を越え、十二月の二日に漸くビクトリヤに着いた、兎に角見渡す限り渺茫たる波濤の上を十數日航海して、久々で陸地に達したわけだから早速上陸を試みて、船の茲に泊まる、まる一日のうちに政廳の建物やら市街やら公園やら、主なる處を殘らず見物した、勿論ビクトリヤは太平洋沿岸にある英領の土地に過ぎないのであるから、之を其後に巡歷した諸所に比べて見たなら、殆んど話に成らぬほど小さな場所だが、前に述べた通り始めて踏んだ海外の土地の事故深く記臆に存して居て、未だに少しも忘れられないのである、譬へ紐育や倫敦のある所を忘れても、此所ばかりは決して忘れる事はない、つまりビクトリヤは僕の一生涯忘却する事の出來ぬ土地であるのだ、堅固な石造の政廳や（内に博物館もある）また丁度霜枯れ時であつたから極めて物さびしく感じた町外れの公園に、人馴れた鹿が落葉を踏み分けて彼方此方に遊んでゐた姿や、詩人バアンスの銅像があつた事などは、今なほ歷々と眼に見たる樣に思はれる、これは話としては極めてつまらぬものだが自分に取つては深く感じた事だから、先ず第一にこゝに掲げて置く、

その二　漫遊中に見たオペラと芝居の概略

今回の漫遊中に觀劇した度數は大層多い、所謂芝居の方は平均一週間に二た晩は必ず見てゐた割合である、オペラは紐育で一度（ゲーテのフアウスト役者は伊太利人及佛蘭西人であつて謡は佛蘭西語）巴里で一度（Lastaue）と云ふ題目で役者は佛蘭西人、謡も佛蘭西語）倫敦で一度（題は名高い彼の（wagn

er & tristanund. Isolde）役者は獨逸人で謠も獨逸語）都合此の三度だけであつた、僕は英語の外は全く不通だからして、勿論役者が何を謠つてゐるのやら少しも解らなかつた、尤もオペラは其國の人でも仲々謠の文句を理解する事は骨の折れるものだ相だから、まして自分の知らぬ外國語で以つて演じてゐる事はわかる理由が無いのである、たゞ豫め見物する前に其のオペラの筋を一通り心得てゐてから見ると今なにをしてゐる所だといふのがわかつて趣味が深く成るのである、全體オペラに行くのは眼の快樂よりは却つて耳の快樂が主な者であつて、道具立や役者の服裝の美麗なる事よりは、寧ろ役者の謠の節の高低又は其の細い太いに連れて、數十人（百人以上のもある）の樂人が吹奏する美妙なる音樂が之に伴うて、一種何とも言へぬ快感を耳に與へ、實に陶然として醉へるが如き心地を覺えしむるのである、强い太い聲の時は怒濤激浪の巖に打ち寄せる樣で、從つて音樂も賑かで頗る壯快な音を出し、細い低い節の時は風がおのづと奏でる松籟のやうな響を出して、極めてゆかしく思はするのである、そして役者の聲と音樂とが巧みに調和した極に達すると、所謂肉聲や音樂の響以外に其處に何者か或る別種の音聲がある樣な氣持がして思はず訴ふるが如く笑ふが如く怒るが如く又泣くが如き感を起さす事が多い、オペラは見るよりも聞くものだといふ證據は、見物人のうちで多少音樂の心得のある者は樂譜の本を持參して居つて役者の謠と、奏樂とを譜に合せて一生懸命にきゝながら其妙所に到ると、拍手喝采する人が多い事でも解る、かう云ふ人は舞臺の方は餘り見ないで、只謠を聞くのを主にするので、丁度これは日本で謠本を持參しながら能を見る人とよく似てゐると思ふ、僕などは西洋の音樂を聞き分ける耳は極めて幼稚だが、矢張オペラは耳の快樂が大部分だと信ずるのである、芝居の方は實に澤山見た、其中でも最も多く見たのはトルストイのレザアレクションである、紐育で二度、バルチモアで一度、ボストンで

一度、モントリヤル（加奈太）で一度、倫敦で二度、都合七度見た、かう云ふ高尚な仕組で割合に舞臺面に變化の乏しい者を觀劇して喜ぶ人の多いのは、流石に敎育が一般に普及して居る歐米なればこそだと大に感服した、（最も宗敎的觀念の多いのにもよるけれども（沙翁劇は幸にハムレット、キンダリヤー、オセロ、ロメオエンドヂユリエット、マクベス、アズユフライキイット、ジユリアスシイザアなどを多いのは三度四度位づゝ諸々で見物した其の中で僕の最も氣に適つたのは



費府で見たシユリアスシイザアで、其時アントニイに扮したのは合衆國での人氣役者マンスフキールドといふのであつて、左の肩を少しあげる癖のあるのが此の人の瑾だが、其の外に批難する所の無い巧い役者である、體の動作藝風などがどこだか故音羽屋と云ふ風があると思はれた、此劇は四度見物して大層面白かつた、名高いヘンリーアアビングは倫敦で見た、顏附はどこか市川團藏に似てゐたが、（少しく根性が惡る相な顏附がある）勿論表情術に巧なる事は團藏どころか、實に故團洲以上とも想はれた、老年の故だらうが聲は餘り通らない方で少し寂を含んでゐた、此芝居は非常な大入のため席

の都合ができず、漸く入場券を讓りうけて一度見物したのみであつた、別に項目を更めてアアビングの演じた此のダンテの事を詳しく書うと思つたが、たしか既に島村抱月子が新小說に見物の記をくはしく掲げられたと記臆してゐるから、これだけにして止めて置く、佛蘭西の女優サラベルナの芝居は丁度優が伯林に出稼中であつて、同處で僕は一度見物した（題は Ladanie, aux, Camelias）と云ふ同優得意の出物、（日本の小さん金五郎に似た樣な筋）もうい丶加減のお婆さんだが頗る若く見える所は何所も同じ事で、役者は化物といふ譬の通り尤と思つた。然し、なにしろこれは佛蘭西語で演じるのだからさつぱり解らなかつた、只だサラベルナの顏を見たと云ふまでゞある、また巴里のテヤトル、フランセーにも行つて見たがこれも言語不通のかなしさ別段書く程の話もない、此の外に英米に於て種々芝居を見てゐるが、これは題を別にして細大漏らさずくはしく書いて見たいと考へてゐる、其序に劇場の建築の一般及書割り道具建の事、電氣を巧に應用する事、また觀客がいかに行儀よく靜かに見物して居るかをも述べ度いと考へてゐる、

華山子の世界週遊は實に數年の以前にして此稿は（歸朝せられし當時其聞見を手記して示されたるの一節なり、讀者その心したまへかし）

代用絹の試験成績

曩に一獨逸人は、阿非利加ウカング地方に於て、代用絹を差出する仔蟲を發見したるが、こは學名アナフエ種に屬し、主として學名フ井クス種樹木の葉を食するも、其繭は殆んど何れの深林樹にも存し、仔蟲は相寄りて大なる巣を作り、此中に多數の繭を收む巣は內外共に右仔蟲の吐きたる纖維質より成り、外部は緩きも內部は緊張して紙葉を見るが如し、此繭は皆解き放すを得べく屑絹として用らるべき見込なり、又繭は一般に緩く完全に紡績するを得ざるも其中より撰擇したる少量の良種のみは必ずしも然らず、糸は光澤を有し容易に染色するを得べし、尙ほ繭は阿非利加南北、ニジエリアニアザランドにも產し、南ニジエリアに於ては絹糸を加へて、ソーヤンと稱する織物を製するに用ふ仔蟲の種類も多く、殆んど皆阿非利加諸地方に於て之を見る由

家庭に於ける心理學の應用

高島平三郎

第十　判斷（上）

判斷とは如何なる心の作用なるか。俗に判斷と申しますと人相見か八卦見が眼鏡か筮竹を以て人の吉凶禍福を豫言するとの樣に思はれて居ますが學問上でいふ判斷は誠に廣い働でありまして決して右の如きとに限られたものではありません。例へば婦人方が今迄着てお出になつた衣服の柄が大層氣に入つたので次に新しく求められる時にも前のと同じ柄のものをと望まれて呉服屋に探しに往かれたとしませう。其時店の番頭にかういふ柄のものを見せて呉れとおつしやれば番頭は其見本によつて大體夫に似よりのものをいろ／＼取り出すでありませう。此時その婦人が自分の今迄着て居られた衣服の柄と今眼前に陳列べられた端物の柄とを見比べて此は違ふとか此は全く同じであるとか獨り心にうなづいてその氣に入つたものを求められるでありませう。此場合に此の婦人が二つの柄を見比べ同じであるか違つて居るかを定める作用を即ち判斷といふのであります。それゆゑ判斷をするには必ず二つの觀念又は概念がなくてはなりませぬ。此の二つを同時に心の中に思ひ浮べて比較するのです。此の事は皆樣の毎日なさる事の中に屢々行はれて居ることであります。八百屋が小さい葱を持つて參りますと之を御覽になる方の中には之はたゞの葱の小さいのであるか或は淺葱であるかと一寸御考になるやうなことがありませう。此時此人の心の中には葱の觀念と現在の野菜の觀念とをくらべそれがどうも一致せぬやうに思はれると更に淺葱の觀念と現在の野菜の觀念とをくらべるのであります。そこで愈淺葱の觀念と一致するとか分れば此野菜は淺葱であるといふ判斷が出來るのでありま

す。總て物事を見聞して此は何であると知る働や此は善であるか惡であるかを定める働や又これは美であるか醜であるかを決する働は皆判斷であります。ゆゑに判斷の働は極めて廣く行はれる大切なるものであります。判斷は又斷定とも唱へます。いづれにしても作用は全く同一であります。

◎判斷の種類　前に說きました樣な心の働きは其働き工合や現はれ方によつていろ〳〵の種類に分ちます。次にその一々に就いて簡單に說明いたしませう。

前に述べたやうに二つの概念を一つ心に思ひ浮べてその一致するか否かを充分に考へる場合には之を思慮判斷といふのです。思慮判斷は平生習慣となつて居らぬこと即ちたび〳〵出逢はぬやうなことに出逢つた場合にすぐこれはかうあれはあゝと判斷することが出來ずにいろ〳〵と思慮をめぐらして後にいよいよこれに違ひないとかあれに違ひないとかいふことがわかる場合に行はれるのです。すべて學問上のことや家政上のことでも少し込み入つたむづかしいことになればそれを判斷する爲めには必ず思慮を費さねばなりません。世間で婦人は愚痴であるとかわけが分らぬとか決斷がないとかいふのはこの思慮判斷が充分に働かぬよりおこることであります。思慮判斷を養ふ方法は後にも說きますがつまり判斷の出來る筋道をちやんと辿つて心を落ち付けるといふことが一番大事であります。それには何か事がおこつたらその有り得る場合を出來るだけ考へて見て此處にはもう思ひ付かぬといふまでに達し措てその後にくりかへしてあれかこれかと充分に比較して其の一致を見出すの外はないのであります。ところが婦人方は兎角感情に馳せる傾がありますから落ち付いて比較判斷をなさることが出來難くすぐに一方に偏るか又は心が亂れてどうとも判斷のつかぬやうになるのであります。此の缺點をよく自ら覺られて靜に落ち付いて考へる習慣を養はれゝば必ず知力が進んでまゐるでありませう。忙しい中でも靜に考へるといふことは誰にも必要でありますが婦人の修養として

は殊更之をおす丶めしたいとおもひます。

思慮判斷は婦人の長所ではありませんがその代り平生屢々くりかへす事を一目見てすぐに是れ彼れと悟るとか或はかうするあ丶するといふことを迅速に極める働は到底男子の婦人に及ばぬ點であります。かやうに別に思慮せずにすぐに判斷する作用を直覺判斷といふのであります。敏捷とかはつきりして居るとかいはれる人はこの判斷がよく行はれるのであります。平常のことでも初めて出逢ふ場合にはなかなか直覺などいふやうにすぐ極めてゆくことは出來ませぬ。唐の王建といふ人の新嫁娘といふ詩に「三日厨下に入り手を洗うて羹湯を作る。未だ姑の食性を諳んせず。先づ小姑を遣て嘗めしむ。」といふのがあります。これはまことによく新に嫁した人の有樣を寫して居ると思ひます。婦人が他家にまゐられて一番心づかひをせられるのは姑でありませう。そこでお母さまは食物は鹹いのがお好か甘いのがお好きかと第一に心配する。それで大體甘いがお好きとわかつても自分がこしらへたお菓がこれでお氣に入るか入らぬかなか／＼判斷がつきかねる。そこで鬼千匹といはれる小姑を呼んで喰べて試て貰つてその小姑がお母さんは此の位がお好であるといへば始めて安心して差上げるのです。それゆゑかやうな時には自分でも思慮し人にまで賴んでいろ／＼と心配して事を極めるのですがそれが五年となり十年となり度々くりかへして居る間にはすつかり姑の氣質も食物の好惡もわかりますからもう直覺判斷で少しの心配なしにずん／＼決めてゆくことが出來るやうになるのであります。婦人が思慮判斷よりも直覺判斷に長じて居るといふのはつまり境遇が然らしめたので婦人のする仕事は毎日大體一樣なことをくりかへして居るからであります。又婦人が常識に富んで居るとか又富まねばならぬとかいふのもつまり婦人はめつたに出逢はぬやうなむづかしい理屈を判斷解釋するよりも日常普通のことをずん／＼取り捌いてゆく必要があるからです。それゆゑ婦人の修養としましては

自己の缺點である思慮判斷を養ふと共にその長所である所の直覺判斷を充分に行ひ得るやうに家庭のことなど進んで自ら取り行ひ何事もはきはきと捌きの付くやうにせねばなりません。分り切つた事や極まり切たことをいつまでもぐづ〳〵して極めもせず決行もせぬのは婦人としての大缺點であります。

思慮判斷は之を言葉に現はす時はちやんと一つの句になります。例へば婦人が他に嫁して後一家がとかく折合あしくどうも生涯の辛抱がむづかしさうであるといふやうな場合にはいつそ歸らうかといふ心がおこるでありませう。その時ほど婦人の身に取つて思慮判斷を要することはないでありませう。さうして思慮の結果「一旦他に嫁して再び吾家に歸るは恥辱なり」といふ判斷が強く起つておもひ止まつたとしませう。此の判斷は文章で申せば體言も用言もちやんと具はつた立派に一つの句であります。又之を論理學から申しますとかやうに言ひ現はされた句を命題といふのであります。命題には主辭と賓辭との

二つがあります。前の句の「一旦他に嫁して再び吾家に歸ること」は即ち主辭であります。なぜ之を主辭といふかと申しますれば此の判斷即ち此の句は一旦他に嫁して再び吾家に歸ることがどうであるかと極めるのでこれが即ち主なるものであるからです。次の「恥辱」は賓辭であります。なぜといふに主辭のことを極める爲めに迎へたお客に過ぎぬからです。文章では名詞といへば大概簡單なものでありますが命題ではいくら複雜なことでも一つの主辭や賓辭となるものは皆一つの名辭であります。前の句の「なり」といふのは主辭と賓辭とを結び付ける語でありますゆゑ論理學では之を連辭といふのであります。

凡そ學問上から判斷をいひ現はすには必ず前のやうな主辭と賓辭と連辭との三つが揃つた命題でなければならぬのです。かやうな判斷を表出判斷といふのです。即ち表出判斷に於ては心の中で働いた結論がすつかり言葉に言ひ現はされるのであります。併し

日常のことや屢々くりかへされる學問上のことなどは一々前の三つを具へて言ひ現はされるものではありません。例へば誰も家庭に於て雀を見て四角四面に「此の鳥は雀で御座います」とか鼠を見て「此の獸は鼠であります」とかいふものはありますまい。一寸鼠の姿が見えれば「ア、鼠が」といふやうにたゞ簡單に其の名詞を唱へるばかりのことが多いでせう。これは判斷の言ひ現はし方としては甚だ不完全でありますけれども之を唱へた人の心の中では矢張ちやんと判斷が出來て居るのです。何故といふに雀を見て雀と知り鼠を見て鼠と知るには自分の心中に雀なり鼠なりの概念が出來て居て此の概念と現在目の前に現はれた雀なり鼠なりの觀念とを心中で比較して直覺的にこれは雀これは鼠と判斷するのであるからです。それゆゑ口でいふのは「ア、鼠が」といふやうな不完全な簡單なことでありますが心の働は表出判斷と同じく完全に働いて居るのです。前のやうな表はし方の不完全な判斷を包含判斷と申します。

これはつまり大部分は心の中に含まれて居つてたゞ一部分例へば主辭ばかりが言ひ現はされて居るからであります。

包含判斷は言ひ現はし方からいへば不完全でありますが日常の實用からいへばなか〳〵大事な作用であります。吾々が日常くりかへして居る直覺的の判斷は一々之を完全に表出して居ては面倒でまどろこしくて仕方がないでありませう。然るにそれが敏捷く簡單に行はれるのは包含判斷の爲めであります。家庭の親しい間で毎日くりかへされる慣れたことを取り行ふ場合にはいつも包含判斷の言ひ現はし方ですみもすれば又之が實際上便利であります。併し又若し婦人方の弊風として自分にはちやんと判斷を持つて居りながらつまらぬ遠慮「はにかみ」からたゞ一寸一部分を言ひ現はして煮え切らぬやうなこともあります。是等は努めて改めねばなりませぬ。それとて又古來誡められたやうに婦人が饒舌で自分のよく知りもせず判斷もつかぬことを出過ぎて語り或は誰

にも分り切つて居ることをさも偉さうに命題のやうに表出するのも大に愼まねばなりません。

支那料理

嘉悦孝子

紅燉魚

鯉の鱗をひきて、腸を出し、全のまゝ若くは五分の厚さに切り、沸ひて水を切り、醬油をかけて一時間ほど置き、油を煮たゝせて其中に入れ、から〱にあげ、油をしたみて其中にスープ二合と、煮つけ置きし醬油と、酢と鹽を少しづゝ入れて煮、魚のみ皿にとり、殘りの汁にかたくり粉を水にときて入れ、煮たちたらば魚にかけて出す、

慕許肉

豚のロース百目うすくそぎて細く切り、醬油と胡椒少し入れ、玉子を入れてかきまぜ、鍋に油をしきていため、スープ一合五勺入れ、醬油、酢、鹽にて

味をつけ、かたくり粉少し水にときて入れる、

薺姑鷄

二百目の鳥を細かに切り、松茸を薄く切り、油をたてゝ肉をいため、松茸を入れ、少しの酢と醬油と鹽を入れ、細かに切りし葱と薑を入れ、スープ二合入れ、カタクリ少し溶きて入れて煮る、

炸丸子

豚のもゝ肉二百目細かにたゝき、微塵薑少しと、醬油と鹽を入れ、かたくり粉半袋水に溶きて入れ、丸くちぎり、弱き油にてあげる

蜜餞秤菓

林檎五つ皮をむき、わりて心を去り、縦に四分程に切り、鍋に水五勺、砂糖三十目入れてとき、林檎を入れ、ざつと煮立て、かたくり粉少し入れる、

清蒸海參

キンコ六本程湯煮し、煮たちてよりとろ火にし、半日位煮て、腹よりワタを出して洗ひ、やはらかにならば水につけ置き、うすくそぎ、鹽少し入れて煮

る、煮たちたらば洗ひて水をきり、茶碗にもる、鳥肉二十目うすく切り、胡椒と醤油にて味をつけ、玉子一つ入れてまぜ、これも茶碗に盛り、スープ五合に醤油と酢と鹽にて味をつけ、茶碗に盛り、四十分ばかり蒸す、

炸銀魚

白魚を洗ひて水を切り、醤油と胡椒を入れ、別に玉子五個、めりけん粉四五十目よくまぜ、鹽少し入れ、白魚をまぜて油にてあげる、

蜜餞蓮子

支那の蓮の實を熱湯に二十分ばかりつけ置き、皮を剝き、心を押し出し、洗ひて器に水とともに入れ、一時間以上むし、水を切り、鍋に水五勺、砂糖三十目入れて煮つめ、此中に蓮の實を入れ、かたくり少し入れて煮る、

炸蝦球

伊勢蝦をよく洗ひ、皮を剝ぎ、縦二つに切り、胡椒と醤油をつけ、玉子にてメリケン粉をときたるを、蜀黍にて揚げる、

炒裡脊糸

豚肉を細にきざみ、葱二本きざみ、フンスー（支那素麺）百二十目、熱湯につけて湯を切り、直ぐ鍋に少しの油を煮たゝせ、肉をいため、其汁をすくひとり、葱を入れ、フンスーを入れ、スープ二合入れ、醤油、鹽、酢にて味をつけ、片栗粉を玉子にときて入れる、

會江魚柱

帆立貝をよく洗ひて器にとり、水を入れて一時間蒸し、水をきり、大きく割り、メリケン粉をかけて粉をふるひとり、油にてあげ、油をしためて、鑵詰の豆を入れて共にいため、スープ三合入れ、鹽、醤油酢にて味をつけ、かたくり少し入れる

炸魚片

ひらめ、鯛等の白身の魚をうすく切り、玉子二つとき、鹽少し入れ、メリケン粉をよくまぜ、これを衣とし、油にてあげる、

不用の買物

中村初雄

誰も買物をするといふからには、各々それ〴〵の注文見積りといふものがあつて爲るに相違ない、何の馬鹿げた入用でも無いものを買ふ氣遣ひは無い、それは誰に聞かしても異論のない世間普通の話しであるが、實際になると却々左様でない事が多いので殊に婦女子には此癖が多いやうに思はれる、手近な例が、尚だ若い娘盛りの者に就て云へば、今日は頭髮を結ひに行くのだが、何も掛物がない、それではと云つて小間物屋の店へ馳けつけ、彼か是かと撰つて當日の物を調へたるにも拘はらず、その際にチヨット眼に止つたものまで、今日は要らないが、今度の時に掛けるのにといふ工合に、それまで併せて購つて來る、成程備荒貯蓄など丶云ふ事もあるから、豫め之を買調へて置くのも宜いが、併し初め家を出て行く時には、その豫備まで調へて置かうといふ了簡は少しも無かつたので、たゞ其所で彼か是かと撰ぶ間に、不圖氣が變つて後日の物まで買求めるのであるが、是等は最早豫算外の支出で、語を換へて云へば即ち不用の買物と云はなければならぬのである、尤もこれは尚だ確かに後日に用うるといふ目的が立つて居るので夫程罪もない、けれども一つ進んで奥様や妻君連になると、さう無邪氣には行かない例へば、今日は三越で寄せ布の賣出しがある、明日は白木または大丸の賣出しであるとか、近くは或新聞社の催しにかゝる大安賣日であるとかいふ廣告を見ると、一から十まで左様といふでも無いやうだが先づ十中の七八までは、何か格安の掘出し物があるであらう、或は斯ういふ縞柄の物があつたら買つて置きたいものだ、或は何か氣に入る物が無いでも無からうと云ふやうな、實に漠然たる目的を以て出掛ける者が尠なくないのみならず、中には世間へ外聞の爲に出掛ける者さへある、何も他人が金を出して與れる譯では無く、一文半錢たりとも凡て自己の財

布から拂はなければならぬのに、何も世間の外聞も外見もあつたものでは無い、況して時としては隨分辛い工面までして出掛ける者のあることは屢次見聞する所であるが、何もそれ程まで

虚榮心の奴隷

となるには及ぶまいと思ふ、それも實際の必要に迫られつゝあつた場合で、丁度折よくも安賣日に出會したから、此時を利用して求めるといふなれば、少しは恕すべき所があるとしても、別に必要も無いけれども、行かなければ世間體が惡い、肩身が狹いなどゝ云ふ爲に出掛けるのは、實に沙汰



の限りと云はなければならぬ、寧ろ論外である、縱ひ金錢に不自由のない家庭の奥樣でも、何も昨今に左程必要でも無い物を、有るにまかせ金に飽かせて買ひ置く必要は無いのである、而も其時に行かなければ、その店に對して借財でも出來たかの如く、或は自己の身代に瑕疵でも入つたかのやうに思はれはすまいか抔といふやうな心配から出掛けらるゝ向もあるやうだが、一體是等の階級に屬する婦人は、兎に角金錢に事を缺がないから、今度は之が流

行するからと云つては其を買ひ、今度は彼の品が持囃さるゝと云つては其を購ふといふ風に、夫から其と手に入れらるゝのは結構だが、

流行といふものは時々に變るもので、その變る毎に夫等を求めても、一旦それが廢つた日には深く篋底に藏つて置かねばならぬ事となり、徒らに土用干に手數が多く掛る位が落となるのであつて、一家の不經濟は此上もない事と云はねばならぬ、金錢の融通の附く者は勿論だが、中には其が附かないでも、その賣出しの日などは、彼も安い、是も格好であるから買つて置かう、買つてさへ置けば何かになるであらうといふ鹽梅に無暗に前後の考へも無く買占めるまでは宜いが、サテ内へ歸つてから檢べて見ると、何にしたものか考へが附かない、目今考へは附かないが、藏つて置いたら何かの間に合ふであらう、禍も三年經てば何とやらの諺もあれば、況して禍では無いものを、何時かは世に出ることがあらうと云ふので簞笥へ仕舞ひこむ、固より最初に目的があつて買つて來たものでないから、容易に一度簞笥の中に葬られたが最後、世に出る事はない、さうかと云つて高い金錢を出した物を見れば、さうムザ〳〵と人に遣るのも惜し、と云つて單に藏つて置くのも詰らないと氣が附いても、最早後の祭り、呉服屋へ返す譯には行かず、またその儘簞笥の中へ押込んで置くのもある、之に就て前年

私の知人の奧樣は、その背負こんだ端物を諸所持廻つて買者を搜して居られた事を實見したが、家によりては此くなる不面目を來すに立至るので、是といふも畢竟は買物をするのに規定がないからである

右は只卑近の一例を示したに過ぎないのであるが一體我國の婦人社會には以上のやうな弊が勢を逞うして居る。元來買物を爲るに就ては、衣服飲食の事は勿論、日常の事に至るまで一定の規律といふものを設けて置きさへすれば、決して前陳のやうな不用の買物を爲る氣遣ひはないのであるが、それが無いのと、一つは虛榮心との爲に家庭の不經濟まで來た

すのである、一定の規律など丶云へば大層四角張つて聞えるけれども、何もさう六づヶ敷い事は要らない、これを極平たく云へは、その都度

覺書を作ること

である、斯く云はゞ、何だ小兒の遣ひではあるまいし、一々買物の覺え書などを記すものがあるものかと笑はる丶かも知れない、けれども歐米の家庭に於ける主婦などは、大抵前週の終りに於て略來週の献立を作り、而して腐敗の憂ひなき限りの物は、一切自分が出掛けて行つて一週間分を調へ來り、然らざる物は毎朝々市へ行つて買調へるといふ位に規律が立てられてある、單に食料のみでは無い、凡て買物に出掛ける前には、必ず其品物を一々覺え書して行つて、一切その他の物は求めないやうにするのである、是は大いに我婦人の學ふべき事である。

燕の話

宮田爲興

燕といふ鳥は妙な鳥で、雀や烏のやうに始終此地に居るといふものでは無くして、九月比になれば何處へか行つてしまつて、また春四月の末から五月時分にかけて、何時とはなく來て、五月になれば軒端に巣をかけるといふ、實に一種不可思議な鳥であるのみならず、サテ來たからといつて、少しも木の枝や屋上などに止つて休んで居るといふ事は無い、まづ始終飛んで居るやうなもので、翼を用うることが多い、用うることが多ければ多いだけ、よくそれが慣らされて發達するやうになる、であるからして彼の翼は他の鳥に比して身體不相應に大きい、その代りに足は小さい、けれども樹木等に止まるよりは飛ぶことの方が必要のために、自然かくは發達したので疲れも少ないのであるが、さてその飛び廻る迅さは今こゝに説くまでもあるまい、之に就て一つの滑

稽話がある、それは一羽の燕が不圖途中で鳶と出會つた所が、鳶のいふに是より二人にて鬼ごッこをしやうとの相談である、それといふも實はその燕が某美味なる餌を持つて居るので、鳶は引提へて其を奪はうとの隱謀で、兎に角相談一決して鬼ごッこを初めると、燕は名に負ふ飛び廻りの名人であるから、如何に鳶が苦心焦慮しても捉まらない、それも道理燕は直角にカキリ〳〵と曲るけれども、鳶には其が出來ない、どうしても圓形を造らなければ曲れないので、到頭鳶は斷念したといふ譚がある、此くまで燕は翱翔に巧みなのであるから、彼が地に觸れんばかりに飛ぶ時に、之を打たうとしても打つ事は出來ない、併し彼は時々地の上に仕事をしたり、泥を掘つたりして居る事もあるが、それは虫を啄むためである、泥をくわへて行くのは巣を作るの材料を運ぶが爲なのである、

世には無暗に米、麥、その他果物等を竊み食する害鳥も隨分少なくない、多いのであるが、之に反し

て燕のやうに、吾人々類のために害虫を平げてくれる鳥類も亦少なくないのであるから、是等は國の法律として無暗に之を捕ふる事を許されない、併し燕は如何なる蟲類を好んで食するかといふに、重に翅のある小蟲である、即ち蚊、蠅、その他黄金蟲とか蜂の類とかいふものを捕へて食するのであるから、燕は實に吾人々類に寄與する所が多いと云はなければならぬ、換言すれば

燕は人類の爲め恩惠者

であるといふべきである、而して彼は地に降りてのみ蟲を捕ふるのでは無くして、大空の中を翔りながらも之を捕ふるので、その遣方の巧者なことも驚くばかりである、即ち蠅が今や水邊にて繭より出で、まだヒヨロ〳〵して居る所を狙つて、さも愉快らしくその群がりの中へ飛び込んで漁つたり、又は時としては蜂の巣の近傍を徘徊して、蜂が其巣に出入する所を目蒐て、巧みに之を捕ふる事がある、それも良いが、不思議にも彼は雄蜂ばかりを捉へて、決し

て工蜂すなはち勞働に服する所の者へ手、否、口を附けない、それといふは、此工蜂は恐るべき毒劍を持つて居ることを先天的に知つて居るからである、何と智者ではあるまいか、

燕は斯く飛びながら昆蟲の類を捕へるのであるがそれには亦造化が其に適すべきやうに重寶なる武器すなはち口を賦與されてある　彼の口は其身體の小なるに比して、非常に大きいのみならず、廣く之を開く事の出來るやうに造られてある、實際その嘴は短かくて濶い三角の形をして居るけれども、その口頭が眼の下まで深く裂けて入つて居るので、大きく開くには都合が宜い、であるからして、自然飛びながら其狙ひを違はずして上手に昆蟲類を啄へこむ事が出來るのである、

燕は雛の時から飼ひ慣らせば能く懷くもので、殊に彼等の住替の時を通した後には、一層その家を戀慕ふやうになる、何故かといふに、彼等の兄弟は遠く暖地に去るに引換へて、自分は寒い此地に留つて其苦を忍ばねばならぬ、然るに飼主の介抱によつて之を免るゝ事が出來るので、之を恩として服するのである、燕が寒さ暑さを感覺するの力は非常に精密なものであるが、特にコレラ病の流行する時には驚くべき程で、現に外國の某市で、チヨツとコレラ病の流行出した時には、申し合せたやうに孰れも一同その市を去つて了つて、全く其病が消え失せるまでは立返らなかつたといふ事である、

燕が巣を營むことの巧者であることは皆樣の知らるゝ通りであるが、その巣を搆へるにも決して雨や風のために害を蒙らない場處を撰ぶのみならず、また一旦此所と定めたからは、無暗に其を替へるといふ事はしない、日本では重に屋内に作るのが例であるが、西洋などでは時々不用な煙突の中に營むことがあるので、之を煙突燕と名けて居る

が、是は近傍の煙突から温暖を慕ふ爲のやうに考へらるゝ、而して其巣の構造の一班を述ぶれば、外側の方は粘土や泥で積み上げてあるは誰しも能く見るのだが、その内面は如何なつて居るかといふに却々巧者であつて、すつかり居心地の善いやうに塗りならして平滑になされてあるとは驚くべきではあるまいか、彼が家の梁や煙突などに巣を構ふる時は如何して止まるかといふに、それは彼の小さな鋭い爪と強い尾羽とで其身を支えて爲るので、其が出來上ると柔かな毛や草のやうなものを敷き詰め、而して雛を生やすのである、

私共はまだ見たことは無いが、燕は時として奇妙な處に巣を營むことがある、それは昔時或燕は戸の半開きの處へ巣を造つたといふ話がある、また壁の釘に掛つて居る古帽子の中へ巣を作つたこともあるそれより可笑しいのは、小屋の戸に梟の翼がひろげて掛けてあつたものに巣を營んだといふ奇談もある或動物學者の引いた例は一層奇妙で、それは池の上に垂れて居る無花果の枝の叉に巣を造つて、其所で一回は雛を孵したが、再びその古巣に卵を産みつけたが、今度は孵らなかつたといふ奇説もある、

元來彼は年に子を産むのは一回に定つて居るが、時としては二回まで卵を産み落すが、この二度目の卵の孵つた雛は、輙もすれば旅立が後れ、寒さの爲に凍死することがある、されども亦どうしても其を連れて行かうといふので、その親鳥は旅立を延期することがあるとの事であるが、かくも子を思ふ親心は切なるものと見える、

鳥の種類によつては、此國には居るが彼地には住んで居らぬといふ事は決して珍らしからざる話であるが、この燕は世界中に棲んで居る鳥で、種類も隨分澤山ある、我國に居るものは英吉利や亞非利加に居るものと同一で、それでも四五種はある、通常はツバメ、ツバクラメ、ツバクロなどゝ云つて、翼の黒いところから斯くは呼ぶので、即ちその黒色は頂部も背部も一様であつて、そして其黒い所には皆青

味の光澤を有つて居て實に美しいものである、尾も黒いが、斑が少しづゝ入つて居る、胸や腹は白く、額と咽喉とは栗色で尾羽は知らるゝ如く深く二つに分れて居る、別に岩燕と稱する一種はその脚の爪のもとまで白い短い毛を被つて居ることが特徴であるのみならず、尾は深く裂けて居ない、常に深山の岩石に止つて、それに土の巣を造るから此名があるのである、この外に德利燕と稱するものがある、大抵は通常のものと異はないけれども、たゞ其色が違ふ、即ち額から背に渡つて黒く、頭の側面と腰部とは栗色である、そこで斯く命名した次第を尋ねるに、その巣が恰も德利に似て居るからである、是は我國の南方の島々で見受けるのみである、



私は以上の如く何くれとなく燕の事を述べたが、これは單に燕の姿や形の事のみを知つて貰ひたい爲では無い、如何にも此鳥は吾人に無關係のやうで、其實は前陳の如く我々人類に取つて大切なる鳥であるといふ事をも併せて知悉して貰ひたいからである。

男子を手本と思ふ勿れ

福田太一

自由に動くことは、いふまでもなく動物の特性であるが、更にその上に、自由に働くことは、人間の一大特性なので、從つて人は活動を喜ぶと同時に、これを尊び、等しく無爲を卑み、且嫌ふものである。これは明らかに、女子が男子を、自然何となく人間の典型と思ひ、人間の模範と考へて終ふ理由であると思ふ。男子を、女子以上に發達した人間、人間の上位に置くべき人間と思ふに至る源因である。

勿論、男子は女子に似ず、人間の大なる發達を、獨力で經營し、又獨りで背負つて居る實に名譽ある立派な人間だと余は認める。人間社會の總ての現象狀態が、皆ひとり男子によつて造り出され、又男子に向つて作られ、男性に都合のよいように出來て居るも、當然の理と思ふ。又、女子が男子の作り出した現象規範によつて動き又動かされ、それに司配せられ、それに捕はれて居るのも、自然の數と思ふ。

併しながら、女子が男子を手本とし、模範と考へることは、喜ばしい事ではないのだ。斷じて非である。乃ち余は、男子を手本と思ふなかれといふのである。

かくいへばとて、決して男子の所作を眞似るなといふのではない。男子の所作を眞似ないのは、普通の女子、大抵の塲合に於て皆然りである。余はたゞ女子殊に敎育のある女子に向つて、男子を人間の手本とすべきもの、人間の上に位すべき價値を具ふるものなどゝ考へるなといふのである。又、男子の司配を脫せよといふのでも、無論ない。たゞ男子を、目するに、人間として女子よりも價値多いものと考へるなといふのである。

余は、我が國の今日の女子に向つて、自から卑下する勿れといふ注文を、一番重く見る。かういふと、

今少し高慢になれといふようだが、断じてさういふわけにあらず、已れらの人間としての價値を、わけもなく低く直觀して終つて何事に就ても何となく、男子を優れたりと思ひ男子に求むるところあるが如きを、不可なりと認めるのである。(但し、舊日本の女子は、女子の價値を、極めて下位に認め



て、敢へて向上せず、常に男子に服從し、男子の命令規範を奉じ、進んで、男子に求むるところあるが如き、態度はなかつた。又、西洋の女子は此男子を求めようといふ傾向が、今日のわが國の女子よりも、非常に強いのである。進んで男子の有するところのものを吸收

し、遂に男子と同等とならうとして居るのである。）萬事に卑下して、男子に求むるところがあるから、從つて、常に男子の干渉を必要とし、その小言が入用になる。余は、すべての女子が、自ら女子としての地歩をかため、女子としての進歩をあらはし、以て、人間の男性と對立せんことを欲するのである。又、要求するのである。これが、即ち、眞の人間の發展ではないか。然かるにそれには、女子は決して男子を、人間として女子よりも上位に位すべき者、價値の大なるものなど、思惟してはならぬ。男子の高尚な立派な行ひを、人間の標準的行爲、理想に近い行爲と思つてはならぬ。人間として男女兩性、各同等同位の道を持つて居ることを忘れてはならぬ。

要するに、女子は男子を、手本と考へてはならぬ人間の模範であり、標準であると思つてはならぬ。又、人間は男子によつて代表せらるなど思ふ勿れ。人間の一部分としての男女兩性は、各々同等にして而も區別あるねうちを有してゐるのである。兩性は

おの／＼違つた典型で、而かも同一同價値なる手本を有しなければならぬ。實に、女子としての見識、女子としての威嚴に缺けて居るのは、女子古今東西の通弊である。余は、女子としての價値を自覺し、女子として男子と對立するといふ考へを、行爲の基礎とした、女子を求める。

序に、余は男子に要求する、男子にして、これを讀むもの少なからずと思ふからである。われ／＼は痛切に女子の、女子としての價値を認めなければならぬ。巳れ等を、人間の上位を占むべきもの、人間の價値を代表するもの、人間行爲の標準となるもの女子の手本となり模範となるもの、女子を司配し監督するもの、女子を卑下し輕視する能力あるもの、人間として女子よりも進歩したものなど、考へてはならぬ。つまり、女子よりも大なる力と、ねうちとを持つて居るものと考へてはならぬのである。言ひ換へれば、男子を人間の手本と思つてはならぬのである。然らざれば、柔順なる女子をして、自から卑

下せしめ、輕視せしめるではないか。加之、自から女子の長所、女子の進歩、女子の眞價値を見ること能はず、知ることが出來ないではないか。それから學ぶことが出來ないではないか。

有利なる女子の新職業

佐々木秋穂

男女に關はらず、凡そ人として斯世に生れ來るからには、必らず先天的に何等かの默約がなければならぬ、否、默約があるので、それは身分の高下や又は資力の有無によつて異なるものでは無い、即ちその先天的の默約といふのは、約めて云へば活動である、活動といふと少し堅苦しく聞えるが、平たく云へば稼がなければならぬといふ事である。この稼ぐにも、或は年齢に依り、或は地位に依り、或は該者の能不能等に依りて千差万別に岐るゝのである、けれども一人として遊んで居て宜いといふ者は無いのである、申すも畏れ多いことだが、天が下を知ろし召す所の止んごとなき御方でさへも、日々萬機を御親裁あらせらるゝのであるから、それより以下の者の働かねばならぬといふ事は、今更繰返して云ふまでも無い、假令、親々から多大の遺産を貽られて、何一つ不自由のない身分でも、決して遊んで暮すといふことは非違の極である、啻に非違の極であるばかりで無く、人類として斯世に出でたる

先天的の默約に背く

のである、その多大な父母の遺産に衣食して居る者も、今その地位を替へて考へて見たならば、必ず思ひ當るであらうと想はれる、といふものは、吾人々類といふ者は、この大切なる生命を保全し持續して行かなければならぬ必要があるので、その必要に應ずるが爲には此に衣食住の三要素を請求するのである、此の三要素も、古來人口の稀薄なる時代、それより稍進み進んだ時代でも是等を需むるに左程困難

は感じなかつたものであるが、目下我國の如くに、一日増しに人口は殖え、物價は倍々騰貴するといふ狀態になりては、自然之に伴ふ所の生活といふものゝ程度も高まると同時に、之が困難をも感ずるやうになる、否、現在感じつゝあるのである、尤も中流以上には餘り其樣な例も無いのであるが、それ以下に於ける目下の生活難といふものは意想の外に出て居る、その證據に、近數年前までは、男子は且らく措き、女子は新たに職業に就くといふても、極少數の者が學校の教員になるといふ位が關の山であつたものだが、それより年一年と進むに從つて社會生活の狀態が變ずると共に、之が困難の度も增して來たので、或は女子が自からの地位を自覺した結果だとか、若くば女子教育の効果だとか種々に說を爲す者もありますが、兎に角女子が從來男子の活動區域を蠶食し侵入して來たのは爭ふべからざる事實である、是は如何なることを表白するのであるかといふに、云ふまでも無く生活の困難といふものが產み出した現象に外ならぬのである、

女子が男子の活動區域に侵入して之を蠶食するといふけれども、一體この言葉は、予は男子であるけれども、若し予をして女子の地位に立たしめたならば、女子を侮辱した言葉であらうかと考へる、元來天地間には、最初よりして此は男子の仕事、彼は女子の爲すべき事といふやうに區別の立つて居るものでは無く、便宜數代の習慣よりして二つに分れたとは云ふものゝ、今尙ほ男子にして機を織り若くは裁縫をする者のあるのを見ても知らるゝのである、之を以て見るときは、敢て初めより區別は無かつたものであらうといふ事が分かる、然らば女子たる者が貯金管理所の計算員となり、或は鐵道廳および各銀行の雇員等になつたからとて、强ち男子の活動區域を狹めたといふ非難を受けることは無い筈である、而かも之を非難するのは、却つて男子の估券を落すのではあるまいかと、予は常に竊かに同胞の爲め杞

人の憂を懐いて居るのである、

大部話が傍路へ外れたが、兎に角日に月に生活の困難なるが爲に、遞信省その他公私の官衙および會社等に途を求めて、それ〲該事務に服して居るので、之を彼の諸工場等に通勤するものに比ぶれば、その品位の如きも數等上にあるのであらう、併し職に賤業なしといふ側から云へば、別に甲乙は無いのであるが、暫らく或意味からいへば上品なのである而して又稍女子に適當なる職業である、

予は殊更にこゝに稍なる階級の文字を遣つたが、貯金管理所の雇員とか、又は鐵道廳の改札係とか、若くは銀行會社の計算員とかいふ者は、成程その名稱が立派であるのみならず、官署の如きは、年功と技倆とに由りては判任官といふ結構な御役人樣にさへ爲れるのであるから、まづ女子としては、印刷局や製造場の女工といふに比すれば、非常なる成功であるに相違ない、けれども顧つて女子の天分から考へて見たならば如何であらう、予は双手を擧げて祝するに躊躇する、何故かといふに、男子もさうであるが、殊に女子たる者は、決して寡居獨立すべき者では無い、必ず家庭を成し子女を教養する、他の語を以て之を云へば、即ち賢妻良母となりて、初めて女子の天分を竭す者と云はれるのである、この原則から割出して、それらの官衙または會社に勤めつゝある所の女子は、果して此天分を盡すに於て間然する所はあるまいか、少しも申し分は無からうか、予はどうも其が請合はれない、何せなれば、目下それらに勤めつゝある所の女子は、概して未婚の女子であるが、夫等が他日予が云ふ如く一家を成し子女が出來たとしたらば如何であらう、果して其でも克く家政を整理し女子を鞠育するの傍らその勤務に堪へ得るものであらうか、非常なる拔群の精力を有すると稱する女子でも、恐らくば不可能のことであらうと思ふ、否らざる者は論ずるまでも無いのであるが、さうなると一家の生計といふもの

は亦復困難の境に接せなければならぬ、と云つて餘裕のない者は、單に良人の手一つばかりを待つて居らるゝものではない、假りに餘裕があつたとしても徒らに坐食すべき筈の者では無い、

去りながら夫等官衙や會社へ勤めるのは、僅に嫁入り前即ち未婚時代で、云はゞ嫁入り準備の爲に勤めるので、それが出來さへすれば敢て要は無いのであると云へば、最早言ふべき所は無いのであるが、若しも既に主婦となつて後も、尙ほ其職に從事しやうとするのは餘程考慮を廻らさねばならぬ事であるといふのは、元來それらの官署や會社で女子を使用するのは何が爲であるかといふに、予が言ふまでも無く、

給料が安くて仕事が緻密、

であるといふ二點に外ならぬのである、一面より云へば、之は女子たる者が社會より其地位を認められたのであるといふやうな煽動的讃辭を呈せられて悅んで居るので、實は其半面に於て大いに侮辱を加へ

られて居るのである、安からう惡からうとは能く世間で云ふ諺で、その眞理はなか／＼動かすことの出來ないのであるが、仕事が緻密で給料が安いといふことは

實に矛盾の甚しきもの

である、例へば、十の力を要する仕事は、誰がしても八時間を費さねばならぬ、而かも之を女子にせしむれば、男子の如く萬が一にも過誤が無いのみならず、その出來榮が美事であるとして、男子には二十圓の給料を拂ふにも拘はらず、女子には之が半ばにも充たざる八圓乃至九圓を支給するとしたならば如何である、是等は殆んど事實である、けれども女子は敢て不滿をも訴へぬやうである、之が女子の特性なる從順の德とでもいふのであるか知らんが、之は女子よりも男子の側で少しく同情を拂ふべき點であらうと考へる、其は兎も角として、今日女子たる者が、此くの如き矛盾の中に尙ほ且つ働いて居るといふのは、畢竟生活の困難に基くの結果に外なら

ぬのであるが、然らば何故に婚嫁の前後を以て去就を決するといふやうな、根底の薄弱なる職業を撰取するのであらうか、相當の教育の無い者は止むを得ずとしても、然らざる者は尚ほ廣き世間には、必ず女子に適當な職業があらうと思ふ、醫者か、あらず、教員か、あらず、計算員か、あらず、凡て女子たる者が職業を撰擇するには、予が前に述べたる如く、女子の天分を自覺し、之を基本として行かねばならぬ、元來男女を問はず、職業といふものは無暗に途中より取換へべきものでは無い、古語にも

業は勤むるに精し

といふやうに、何事でも、例へば、裁縫でも始終手掛けて居れば巧者になると同一で、その事を專門にやりさへすれば達者にもなり、また名人にも爲れるのであるけれども、無暗に商賣替をすれば決して上手になれる者では無い、啻に上手になれないのみでは無い、その事に慣れるまでの多少の日子といふものは損になるのである、藝に身を助けらるゝ程の不仕合といふことも云ひますが之は專門外のことをいふので、總て專門の事といふものは、それを以て己が一身を立つべき資本となすべきものである、然るに婚嫁の前後を以て、之を換ふるはまだしもながら、動もすれば之を抛擲して顧みず、單に良人の手にのみ頼つて衣食しやうなどゝいふ考を起しては、啻に女子の本能を盡さぬのみか、實に二十世紀の女子にあるまじき振舞とい



はねばならぬのである、
ソコデ予は世の女子に、決して婚嫁の前後を以て其趣きを異にしたり、または家庭を成せる後に於ても、決して他の力を假らず、所謂女子に特有なる即ち物事に緻密なる性情を利用するに最も適切なる所の職業を推薦しやうと思ふ、それは

分析の業である

この分析の業に就き、或者は女子に不適當だといふけれども、予は最適當の業たるを疑はないのである、何故なれば、此分析の業は、初め之を修むる時に鑛物の定量とか分子の比重とかいふものを暗記するのに骨が折れるか知らんが、一度覺えて了へば、餘の分折の順序等は一定不變で毫も煩雑を來すものでは無い、殊に此くの如き微細の仕事は、女子の緻密なる性能と相待つて其功を全うすることは、決して予が空想や臆説では無い、

相生の松

知れる人にて、夫の君は八十三、妻の君は七十一てふ高き齢を重ねて、いよ〳〵健かなるをよろこびて

中山幸子

立ならぶときはの松のかぎりなく
　さかえ〳〵て幾代經ぬらん
高さごの松の木かげに立よりて
　ちよのことほぎいひ替すらん
いくとせか色もかはらで相生の
　松のさかえぞめでたかりける
たか砂の松に千とせをちぎりつゝ
　ともによをへて樂しかるらん
あひ生の松にちぎりをこめつゝも
　千代のさかえぞめでたかりける
朝日さす濱のまさご路あゆみつゝ
　あひ生の松にちぎりこめたり



（上）

放れ島、遠く海を隔てたる處の放れ島、私の記憶に存じて、造次にも顚沛にも忘れ難き放れ島、そこに私の只一人の娘が居る

私は今年三十九になる、別に大した財産は無いが、土地第一等の舊家と呼ばれた大路家の面目を維持すべきだけの収入はある、今でこそ世と離れて、悠々風月を樂んでは居るが、以前は官途に就いた事がある、人々から推されて下院議員に出たこともある、銀行の頭取に撰ばれたこともある、會社の重役になつたこともある、けれどもまだ悪い歴史を有たことは無い、不十分ではあらうが總ての事に成功して居る、自分の口から云ふのも可笑しいが、一個上流の紳士として恥づる處は無い心で居る

その立派な私が三十九の今日まで、妻を迎へずに獨身で居る、是には可憐な本事がある

別れてからもう十七年になる、今お話をした私の娘の母は、お耻かしいが昔の穢多で、幾百海里の波濤を隔へた、遠い〳〵放れ島の女である

そんな賤しい人から忌み嫌はれる穢多の女に、何うして私が子まで生ませたかと云ふに、それも因縁といふものであらう、まさかに初から素性をさう穢れたものとも思はず、周圍も成るべく秘密にして居つたので、たゞ私の目には心の清らかな、親切な女として映つたものである、その結婚の道行に就てはお話し申すことも出來ぬけれど、私が電燈會社の重役を勤めて居る時、幾度もその放れ島へ行たことがある、かなる蠻地にも美しい花は咲く、清く明かな月は照る、優しい可愛らしい渡り鳥は來る、戀の神の御支配にならぬ處は無い

二人の間の話は是だけて御免を蒙らう、然し皆さんに云つて置くが、穢多ではあるけれど、心は少しも穢れて居らぬ、顏の美しいやうに其心も美しい、その女の氣品は人よりもより高く、その女の心切は人よりも、より深く勝れて居た、でなければ物好きに私の愛しさうな筈が無い

その女は私に別れてから、もう十七年になる、その後といふものは絶えて一度の消息も無い、消息の無いばかりではない、その女の生死も知れぬ、女の生死の知れぬと共に、娘の生死も知れぬのである、私はもうその事を思ひ出すと、立つても居ても堪らぬのである

只女の紀念として見るのは、娘が生れた時、送つて來た一通の手紙である、こゝにあるからお見せ申すが、放れ島で育つものには似ず、勝れて手蹟が美しい、念の爲めだから讀んで聞かせやう、文章も旨い處がある

一筆申上げまゐらせ候その後は御障りも無く御暮らし遊ばされ候事と蔭ながら御歡び申上げ候今さら改めて

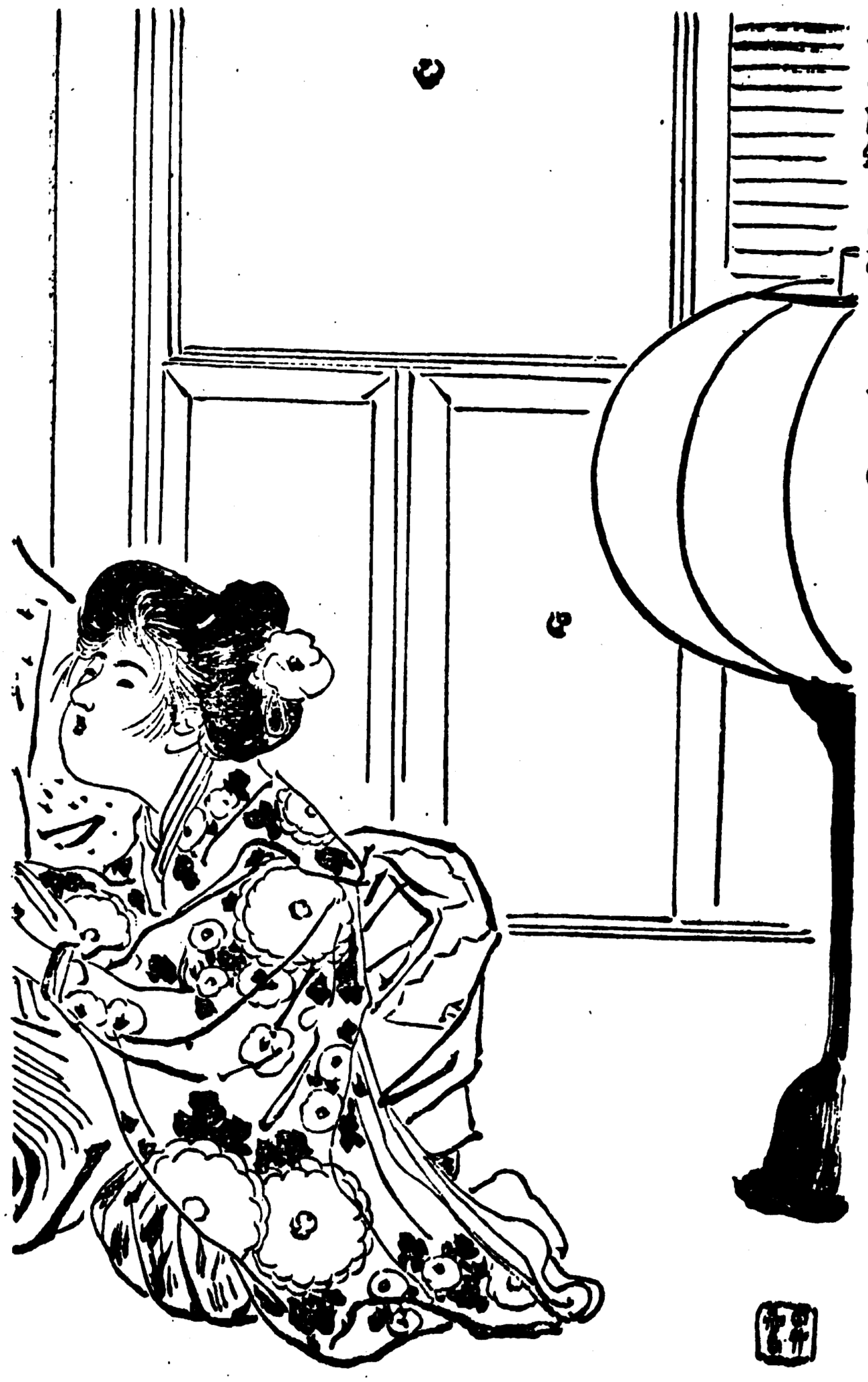
申上ぐるまでもこれなく候へ共、村長さまの御仲立にて、あなた樣のやうな御身分のある御方と、結婚いたし候よろこびは、何に譬へ候ふべきかと思ひしも束の間にて、如何なる前世の報ひにや、身は穢れたる血筋を引き候かなしさ、世上のおもはくもいかゞなりと、思ひもかけぬ御親類方の御故障、身重にまでなりし中ぞと、御恨みは申上げ候へども、あなた樣の御身の上を思ひ候へば、私ひとりの歎きは忍び申さねばならずと、心強くも思切り、お別れ申上げ候悲しさ、思出しては涙の袖を絞り申候、去ながらたとひ二月三月にても人交りの出來候を羨ましがられ、村長樣よりも懇なる御詞まで下され、村の人は申すに及ばず、私どもを賤み候人々にまで敬はれ候も、全くあなた樣の御蔭と、こればかりは嬉しく存じ〳〵

私はお蔭さまにて斯樣に嬉しく光りある身となりて、此月の始め身二ッになり〳〵、生れ候は女の兒にて、それは〳〵あなた樣に善く似ておいでなされ候素性の正しき御兒までを私どもの籍にて穢し候は口惜しく存じ候へど是は據なく私の私生兒にして村役場へも屆け〳〵、あまり美しく候ゆゑ名は菊子と號け〳〵

私の望みには一度父子の對面がしていたゞき度く候へど、そんな事を致し候てはあなた樣の御顔にも關はるべく候ゆゑ及ばずながら私の手一つにて育て假令母は賤しく候とも人には劣らぬ立派な人間に仕立て上候間是は決して〳〵御心配下されまじく候、一目にてもお目にかけたくは候へど生中此の愛らしき姿を御覽遊ばされ候ては御未練もお出なさるべく、却てお逢ひ遊ばさぬ方、双方の御爲と存じ〳〵一生涯父の顔を知らずして終り候菊子は誠に〳〵可愛さうに候へど、是とても先の世よりの因緣と諦め候へば悲しくも嘆かはしくもおはしまさず候、私の事、菊子の事、あなた樣は是切りにて御忘れなさる

べく、私と菊子とはあなた樣の事、死ぬるまでも忘れ申すまじく候
私と菊子とはあなたの御幸福を祈り候を此世のつとめと致し居り候、まだ申し上げ度き事山ほどもおはし候へどまづは筆とめあら〳〵かしこ

今讀んでも私は涙が溢れる、私の爲めを思つて、一生涯私の幸福を祈つてくれる、こんな女がありながら　私は新らしく妻を迎へるに忍びなかつた、是が今も獨身で



居る理由である、そこで私から出した返事の意味は、假令何處に育たうとも、菊子は大路安篤の娘である、彼女が十五歳の春を迎へた時、改めて父子の對面を許すであらう、と斯う書いて送つた、處がその後何んの便りも無く、人傳にも噂を聞かぬ、思ふに彼の憐れな女は私に逢はずに現世を去つたものであらう、此世を去つたではあらうけれど、私はまだ妻を迎へずに居る。私の獨身で居るのが　即ち彼等母子に對する心中である



（下）

霜の夜は次第々々に更けて行く、此間を凌いで昨夕の雨に色づいた軒端の梅は、幽に馥郁たる香りを送つて居る。風は全く歇んで、外には寒月の光り冴え、遠くに聞ゆる絃皷の響が、宛ら凍るやうに水を渡つて來る

時は恰ど十一時頃でもあらうか、私は日頃好む沙翁の小説を讀んで居た、側の火鉢には櫻炭が燃えるやうに起つて、その前に岐阜行燈がぼんやりと點つて居る

書齋は六疊であるが、書物が堆く積まれて居るので、餘地と云つては三疊あまりより無いのである、そこに悄然と座を占めたのは、何かの用を勤めてくれる小間使である

彼は四年前から雇ひ入れたので、三度の食事の給事をしてくれるのも此女である、何か面白からぬことがあつても、此少女の罪の無い笑顔に對しては、いつも必ず忘れて了ふ、私が書物でも讀んで居る時は、必ず亂書堆裡に座をしめて、茶を點れる、果物を料理する、然も一言も物を云はいで、痒い處へ手の屆くやうにして呉れるのである

實に此少女が私の爲めには彌生の花である、詠めても〳〵飽くことは無い、此少女が滿の夜の月である清しい光りで私の心を照らして呉れる

それがこの夜は何うしたのか、火鉢の前へ顔をかくして、クス〳〵泣いて居る、私は胸も張り裂けるやうな

「お前は何故そんなに泣くの、腹でも痛むのかね」

と問ふて見た、處が其答が可愛らしい

「只悲しいのでございます」
「只悲しいといふ理は無い、悲しいには悲しい原由が無くてはならん、それを云て見なよ」
私の尋ねは何うかすると理窟臭くなる、職員を商賣にして居た癖がぬけんので
「けれども私………」
彼は云ひかねる、私は聲を和しうして
「もし私を恨んで居るのでは無いのかね、お前ももう年頃になつて居るから、何處かへ轉がつて見たくなつたのかね、それならば爾うと、打明けて云つてくれんでは不可んよ、今お前に放れては困るけれど、お前の爲になることなら、何んな辛い忍耐でもする」
云ふと彼は愈よ泣いて
「いえ、勿體無い、そんな事はございません、お宅には一生涯置いて戴きたいのですけれども、他に悲しいことがございます」
「それならば其事を云つて見なよ」
「いえ、夫は云はれません」
「云へんことがあるものか、私を主人だと思へばこそ遠慮もする、親だと思へば云へるだらう」
此詞は善く〳〵彼の感を動かしたと見えて、嬉しさうに涙の間から莞爾と笑つたが
「それでは云ひますけれど、あなた何んな事があつても、お暇にはなりませんか」
「勿論暇なんぞは出さん、お前の名は菊子といふ、わしはその名を一生涯捨てることが能きん、どうか何んなりとも云つてお呉れ」

と今度は私から頼むやうに云ふ

「そんなら申します」と菊子は決心の色を見せて「お話し申す前にお聞き申さねばならん事がございます、こゝに一人の穢多の娘があり、又一人の立派な紳士があつて、もうその穢多の娘がその紳士をお慕ひ申すやうなことがあつたらその紳士は何うなさるのでございませう」

斯く云つて聞かれた時、私は實に驚とした、がさあらぬ體で

「もし其紳士が乃公であれば、直ちにその娘を養女にする」

「えゝ」と菊子は可愛らしい眼を光らせたが、少し慄ひを帶んだ聲で「それではあなたは、人々に賤まれて居る穢多の娘も、お厭ひにはならんのでございますか」

と云つて見上げた顔は、恰ど朝日を享けた櫻の花のやうで、美しい中に艶がある

「原より關はん、穢多だの乞食だのといふことは、人間の定めたことであるから、神さまから御覽になつたら、一視同仁、決してそんな區別は無いのだ、況して私は平等主義を有て居る、心に人種の懸隔は置いて居らんよ」

「旦那さまはさう被仰るけれど、夫は不可ませんわ、穢多となれば獸にも劣つたやうに人は云ひます、それを……」

「獸でも關はん、私は人種よりも人間の心の美しいのを愛する」

「それならば嬉しうござんすけれど」

「原より爾うだよ、然しお前のやうに云はれると、私は昔穢多であつた人の身を思ひ遣る、何故その人達は斯くまでも世に容れられぬのであらう、それを思ふと、實に不憫さうでならん」と云つてハラ〳〵と

涙を流して「然し、菊子、お前が爾うして念を押すところを見ると、何うもお前の身の上を異しく思ふ、もしやお前は………」
と云ひ憎さうにして
「昔穢多であつた人の娘では無いか」
「はい………」
「いや、穢多であらうが非人であらうが關はんお前が爾うして打ち明けて呉れた上は、私も懺悔をせねばならん、實は菊子、私にも穢多の娘が一人ゐる」
「えゝッ」と菊子は目を瞠つて、私の顔を見守つた
「夫が今年で十七年も逢んのぢや、穢多でも非人でも、我子となれば嬉しい、原より情愛に異りは無いお前がもし昔穢多であつた人の娘であれば、私は是から我子として可愛がる、決して悲くには及ばん」
菊子は袖を掩ふて泣き出した、私は寧ろ舐るやうにして
「もしやお前は遠い放れ島で生れたものでは無いか、よもや爾うではあるまいか、私の宅に居る間は何うか爾うとして置いて貰ひたい、すれば今日から………」
「もう何んにも云て下さいますな、わ、わ、私は………」と云つて私の手に縋りついた

◦ ◦ ◦ ◦ ◦ ◦ ◦ ◦ ◦ ◦ ◦ ◦

放れ島、遠く海を隔てたる放れ島に、今年の春大きな家が出來た、夫は內地の紳士大路安篤の家である其處には十七になる菊子といふ娘と、その母とが住んで居る、主人は月に二三回づゝも、舟に乘つて通つて居る、母子の心は恰ど磯邊の梅のやうに香つて、島中の褒められ者に爲つて居た　（完）

處世の要訣

江原素六

往昔一女が途上で基督に出逢つた時に、その三十二相揃つた神々しき基督の相好に接觸して、實に汝の相貌の尊嚴のを拜するに付けても、嘸かし汝のやうな御子樣を持つた母親は何の位喜ばしい事か、それを思ふと實に羨しい事であると感歎しますと、基督はそれを聽いて、別に尊大ぶるでも何んでもなくそれは汝の言ふ通りであると被仰られたのである、若し之が普通の人であつたならば、必ず陽には何う致しましてなど丶其人前を繕ふのである、けれども肚の中では悅んで居るに相違ないのである、それは鏡にかけて見るよりも明らかなので、是すなはち自から欺き併せて他を欺くのであるが、聖賢は決して左樣いふ事はない、汝は立派だといへば、左樣であると直ちに答へて毫も自他ともに欺くといふやうなことはしないのである。

基督は曾て神の言を聞いて之を守るの幸福なるに如かずと說かれたが、實に處世の要は斯數言にして盡してあると考へる、凡そ普通世間で幸福といひ快樂と稱する所のものは、決して完全なるものといふ事は出來ないのである、何故なれば、この所謂幸福または快樂と稱するものは習慣を生ずるので、已に習慣を生じては幸福でも快樂でも無い、例へば、常に輪奐たる三階乃至五階の煉瓦造りの家に住んで居ると、何うも習慣が付いて面白くも娛しくも無い、ソコデ時折大森邊の麥稈葺の家に住んで見たくなつて、そこへ出掛けて行く、又常に山海の珍味に飽きて居る者は、最早珍味でも御馳走でも無く、何うも鼻に就て美味いとも感じない、ソコデ偶々菠薐菜の浸しとか、又は淡泊と新漬の香の物を喜ぶといふやうに、何うも物質的の幸福や快樂は、もの丶一月か二月位で直ぐに厭忌が來るものである、

明治の初年、私の愛敬する所の一友人が、品川灣から淸水港へ廻航のために、奮迅丸といふ蒸汽船を

一艘購めるに就ては、資金が足らないから貸して呉よといふ頼みであつたから、快く之を諾して資金壹千百圓を用立て遣りました、スルト其友人は之を以て直ちに汽船を購入して、軈て品川を出帆すると、機關手の不慣のためか、或は運轉手の未熟か、若くは最早機關が古くて傷んで居たのか、僅か數哩乘出すと汽罐が破裂した爲に、氣の毒の事には數名の死傷者を出したのである、ソコデ其友人は之を修繕するかと思ひの外、一たび汽罐が破裂した爲に幾多の死傷者を出した斯船であれば誠に縁喜が悪い、殊に最初から斯ういふ事のあつたもの



を、縱ひ修復したからとて、大切な人命を托送するのであるから、斯樣な過失が付いたものは一層賣却して仕舞うといふ事に決したのである、併し私はまだその事を知らないで居ると、一友人から其事を知らせると同時に、此機を外さず貸した金を取らなければ、再び取る目途がないといふ事を言ッて寄こされたので、私も大いに夫もさうだと思ッて、家を出で品川邊まで參りますと不圖氣が付いたのである、我は苟くも武士の家に生れて武士教育を受けたものであるにも拘はらず、

在友人が悲慘に沈んで汽船を賣らうとするのに、之に向ッて悔み一ッ云はうとしないで、僅かばかりの金錢の爲に出掛けるとは、扨も〳〵淋しき心持の起ッたものである、嗚呼我ながら過ッたと氣が付きましたから、取敢へず新富町の友人の下宿を訪ねますと、先方では金の催促に來たものと思ッたか、所用にかこつけて面會を謝絶しますから、只一言面會の上で述べたい事があるので、決して督促などの爲では無いといふ事を申入れますと、直ちに居間に通されましたから、誠に御氣の毒の次第であると悔を述べますと、友人も大層に喜んだのであります、その中汽船も處分が就きましたが、私は一旦腹の中で斯金は取るまいと決心致したので、その友人から返された金で、毎日日近所の割烹店へ上ッて贅澤を致しましたが、諺に呑舟の魚といふ事を申しますが、汽船一杯を呑むのでありますから、隨分呑みでがあるのでありますが、偖斯やうに毎日入浸りになつて居りますと、最早飽が來て、爲に時々外の安料理屋へ出入をするといふやうに爲ッたのである、是を以ても人間といふものは、單に

物質的を以て幸福の生涯

は送られぬものであるといふ事が分るのである、それ故に、何か

我より以上の力に信頼

する所が無ければならぬ、彼の哲學家の多くが神經病を病み、力士が年と共に力が衰ふるやうに、兎角物質的の幸福は賴みにならぬ、全體幸不幸といふのは決して物質的のものではない、若し物質的のものであるとすれば、彼の富豪の家庭に、常に涙の乾かぬ事例などのある筈は無いのであるが、是を以ても知らるゝのである、さうかと云ッて、私は貧に安んずるのが道德の極致とはしない、去れば富その物は

幸福の補助機關

に過ぎないのである、例へば、愛兒が病氣に罹ッても、若し此富が無ッたならば ドクトルも博士も呼ぶことは出來ない、又看護婦を雇ふ事も叶はない、

また大森や熱海へも轉地療養させる事も出來ないのであるが、その時に此富があれば、縦ひ一診十五圓取られやうと、一日日當が三圓であらうと看護婦を雇ふ事も出來るのであるから、幸福の補助としては最も必要である、けれども富そのものは幸福に比しては三文の價値も無いのであるから、即ち我々は

貧富貴賤の上に超然

として、それらの爲に心を攪き紊されないやうにしなければならぬ、それには前にも云ッたやうに、神の言を聞いて守るの幸ひなるに如かずといふ如く、その神の言といふのは、基督であらうが、釋迦であらうが、はたまた孔子孟子であらうが、誰が云ッた事でも

凡て人間の守るべき眞理

を指して神の言といふのである、それを守ッてさへ行けば決して過ちはない、

先頃新聞にも出たが、初春早々高等商業學校の生徒村井某なる者は、利根川筋に於て短艇を操縱の砌り溺死したが、私共の育つ時には短艇といふものは無い、けれども矢張小舟のあつたもので、昔し武士の教育中に、山河に行くには必ず一丈以上の繩を持て行けといふ教訓があッたので、その繩は三州の寶來で出來るので、よく京へ下り上りの節は之を求めて來て土產にしたもので、私なども櫓手を行ッた時分には常に之を携へて行ッたものです、現今日本の海軍では、短艇を下す時には必ず二丈五尺の綱を付ける事になつて居る、さういふ風に用心さへすれば滅多に過ちのあるものでは無い、固より自然の力に比べては我々の力といふものは實に微々たるもので迚も比較の出來るものではない、併し夫々の用心を怠らなければ之に打勝つ事が出來るのである、今日各中學校でも、短艇の時には必ず綱を持ッて行けと注意せられてある、是は單に中學校ばかりではない孰れの學校も同樣である、故に斯用意がありさへすれば彼が如き不幸を見る事はないのである、畢竟その注意されたる守るべき教訓を無視したる結果、遂

すべからざる不幸に陷入るので、言を換へて云へば、其人間の守るべき眞理を守ると否らざるとは、一に

榮辱禍福の岐るゝ

所である。前年郡岡の中學校に教鞭を執らるゝ中村安太郎氏は、非常に銃獵が好で出掛ける所より、その嚴父は常に網を持ッて行く事を勸められたが、安太郎氏は毎時も馬耳東風に聞流して過して居たが、或年京都の愛宕邊へ狩に趣くとき、嚴父は强て勸めて網を持たしめられたので、安太郎氏も云ふがまゝに持ッて行かれ、諸所方々獵ッて行くうち、圖らずも陷穽へ墮ちたので、大いに獨り穽の中で煩悶して何うしたものであらうかと工夫を凝して見たが、別に好い企ても付かない、兎角する中網の事を思ひ出したので、悉皆身支度を解いて網にて括り、その一端を腰に縛り、辛うじて上に出で、而して銃や衣服等を引上げ、初めて嚴父の教の有難味を感じたといふ實話を物語られた事がある、斯く古人や老人等は我々に向ッて爲になる事を教へらるゝのである

が、兎角それを守らうとはしない、甚だ宜しくないのである、故に世の中を渡るには、必ず

良心を刺戟する言辭

または道徳上に規定せられた事を嚴格に守るといふことは、立派に世を送る所の口訣である、

本年になッてからも、彼の競馬のために三人までも身を誤ッたものがある、是等は守るべき人間の眞理を守らぬからである、又彼の高木兼寛氏の統率せらるゝ芝の慈惠醫院の生徒が、先頃停學を命ぜられたといふ事は、是また諸新聞に依ッて傳へられた事だが、元來彼の學校は普通世間の學校とは餘程校風が異ッて居るので、最早中學校程度を卒へて、高等學校または大學、若くは各種の專門學校へ入學しやうとするものは、既に一人前として立派な能力を有ッて居るものである、十分に物の辨別力は備はッて居るのである、故に御校の規則を堅く守らすべく保證人云々などいふ、馬鹿らしき形式を逐ふには及ばないといふ所よりして、決して彼の學校では保證人

といふものを設けないで、凡て生徒の良心に訴へて入校させるのである、鹿兒島の第一中學でも之に倣ッたさうだが、仙臺の高等工業學校でもさうしたといふ話であるが、何れも成績は宜いとの事である、ソコデ先頃停學を命せられたる幾多の生徒は、間もなく改悛の狀が顯はれたから通學を許されたが、縱ひ朝に停學を命せられても、實際よく自身から之は惡かッたと悔い改めさへすれば、夕べには其禁を解かるゝのである、丁度彼の倫理講堂に講演のある時、某一學生は每に人に托して名札を覆して貰ふのが癖で、その日も例によッて例の如くしやうとすると、丁度その時に頼まれたのが私の學校の生徒で、その生徒は年は若いが堅實な信者である所より、强て某學生を伴うて講堂に入らしむると、その日に彼の點檢があッたので、その學生は非常に一方の學生を德として言ふやう、若し彼の日他人に頼んだならば、必ず停學の厄に逢ふのであッたらうが、幸にも善い人に頼んだ爲に其禍を免かるゝ事が出來たのであると、深く自から肝に銘じたので、今日では守るべきを守るといふやうになッた、

私は常に村上直義主義を固守して居る、それは彼の關ケ原の役に、大坂軍は野に山に見渡す限り雲霞の如く軍兵を以て埋めて居るので、從ッて兵氣も頗る揚ッて居るに引換へ、德川方は甚だ振はないので、井伊本多酒井榊原の四天王も大いに氣を揉んで、早く家康公の出陣あるやうにと首を伸して待ッて居ると、村上直義は馬に鞭ッて行ッて來たから、主君は何時御出陣かと尋ねますと、主君は御病氣に付御出陣相成らぬとの答であるから、四天王は顏の色も蒼ざめ、开は困ッた事の生じたるものかな、見らるゝ通り我軍は大坂勢に壓せられて、殆んど士氣沮喪の有樣であるに、若し此上御出陣是なしとありては、迚も必勝所では無い、必ず一戰にして敗るゝは必定である、就ては枉て村上直義に、主君は間もなく御出陣あるべしと傳へてくれと懇々四天王から賴みますと、よし〳〵と諾ひ、乃て兵陣に臨む咄嗟の間

に考へますには、成程四天王は何れも一方の勇將で偉いには相違ないが、併し主君には及ぶまい、主君は何か主君の御考へあればこそ、態と予をして病氣云々を傳へしめらるゝに相違あるまい、と斯樣に考へたから、有のまゝに申し傳へますると、四天王の驚きは一方でない、如何したものであらうかと首を惱まして居ると、福島正則は傍に在りてハタと手を打ち、今日將軍は病と稱して御出陣なきは、畢竟我等が心事を疑はるゝが爲である、よしその儀ならば我等にも覺悟あり、イザ花々しく打ッて出で、腕の續く限り刀の折るゝまで働かんものと意を決し、命を軍督に傳へると、頓に士氣が昂ッて來て、遂に大垣を陷入れ大捷を得たのである、

隨分世の中には種々の學者や論者があッて、それは〳〵何に角と論評せらるゝので、その著書等を見れば隨分感心するやうな事も澤山ある、けれども古への聖賢等に比べては、何うも偉いとは思はれない、從ッて其議論等も見劣りがするやうである、故に幾ら世間から彼の此のと批評せられても、一たび之は人間の守るべき眞理であると確信した事は、決して世の有耶無耶の事には耳を傾けないで、何處までも村上直義主義で押通す考が無くてはならぬ、

概ね今日學者や論客が兎や角と論評する事も、その本を洗へば多くは古人の遺物で、左程耳新らしい說は無いので、云はゞ蒸し返しに過ぎない、尤も科學の方面は別問題であるが、吾人が踐むべき道德上の問題は、先づ之は作すべからずと云ふ事は之を避け、之は爲さゞるべからずといふ事は必ず之を爲すといふやうにしなければならぬ、之を除いて外に處世の要訣などいふものがあるべき筈のものでは無い

重寶な記臆法

松田信次

何事に限らず物事を記臆して置く即ち覺えておくといふ事は至極重寶なもので、換言すれば記臆とい

ふものは吾人に取つて一種の智識の倉庫のごときものであります、而してこの記臆といふものが一方には智識を增して行くものであります、小兒の時に學びたる事又は經驗したる事は、みな將來の智識の基ともなり、また小兒の時に知り得たる所より、將來種々の說をも考へ出すことなどもあるものである、すべて學びたる事經驗したる事は、たゞ記臆にのみ止まらないで、時としてはそを考へ出して、再び此の如き事をせんと欲するがごとき念を引起すものである、すなはち思ひだして事をなすといふ事は、實に重大なる利益の存するものであつて、その事たるや、年を經るとも更に忘る丶といふ事はなくして、實に少なからざる一身の



利益となるものである、小兒が勉學する有様を見るのに、その試驗の時に近づくに及べば、熱心に學を勉めて、試驗の時には大層能く爲し得たりとするも、其時の去れば直ちに忘る丶事のあるものである、故にラスキンといふ人の言ひしことに、近頃小兒の有様を見るに、小兒が學を勉むるは、試驗を能く通過する爲にして、自ら知らん

とするにあらず、故に試驗は能く爲したりとも、少しも知得たる所なしと云はれたが、例へば醫師の如きものは、患者を取扱ふ時には、能く注意して學理を照應すべき事をすれども、他の時に於ては斯る學理は別に考へずとも良い事であらう、けれども小兒等が學を勉めるのは、一時の試驗の爲では無くして、

永遠にまで智識を蓄ふる

爲の初めであれば、小兒をして試驗のために學を勉めさせ、るといふ事は宜しくない、

記憶の性質は今更喋々するまではない、一體吾人は如何にして記憶といふものをなすか、又記憶したる事を理解すること、即ち思出すといふことは、如何なる力によりて爲し得らるゝのであるかといふに、數年前蓄音機といふ不思議なる機械が發明せられた、それは皆樣御承知の通り、人の言ひし言葉をそのまゝ、其人の言ひたる音の如くに幾度も繰返さるゝのである、この器械の働きは即ち記憶と呼ばるゝ腦の働きであつて、たゞ腦が爲すべき働きをば器械を假りて爲すまでの事である、而して心といふものは種々の事に就て智識を取り、また腦の神經組織がその智識を繰返し、思出さする作用をなすものと合點すれば良いのである、

然らば何故に某事實を記憶することが腦の働きであるか、物事を思出すといふ事は永久に續くものであらうか、何故に腦は數多の限りなき事柄を記憶するに適するのであらうかといふやうな事は、直ちに吾人の胸に浮んで來るものであるが、幵は全く種々の經驗より來るもので、すべての注意を以て爲したること、見たるものは記憶となりて

永久胸中に保存

せらるゝものである、即ち何物によらず注意する時は、それが直ちに記憶せらるゝといふことである、例へば、斯く〳〵の音とか感情とかを心に強く感じたといふ事は、是即ち腦に印象して記憶に遺るといふ事になるのである、故に小兒をして記憶力を強からしめやうとするには、物事に能く注意することを

敎へ、且つすべてのことを能く認むるやうにしさへすれば、自然に記臆力を増して行くものである、而して成長の後も、小兒の時に記臆したることゝいふものは、絶えず思ひ出されて、また永久にまで殘るものである、而して小兒といふ者は、凡て新事實に出會すときは、根ほり齒ほり聞き糺すもので、是はその新事實を記臆するの楷梯であるから、其時父兄たるものは面倒臭いとして之を斥けず、丁寧にその程度に應じて之が解釋を與へて、小兒をして滿足せしむるやうに努めねばならぬのである、

肥滿して困る婦人の爲に

ドクトル　鈴木清義

日本では是まで多く如何なるものを稱して美人と稱したかといふに、俗諺に所謂、起てば芍藥坐れば牡丹、歩く姿は百合の花とか云つて、平たく言へば

　細つそりとした體格

であつて、目はパッチリ櫻色といふやうな者を稱して美人のスタイルと唱へ來つたので、從つて餘り肥え太つた娘さん達などは、非常に其を氣にかけ、如何したならば瘦せる事が出來やうかと、朝夕それのみを苦に病んで、よく新聞や雜誌などの衞生顧問とか、或は婦人の衞生とかいふ欄の所へ質問を出さるゝのであるが、最早文明の今日と爲つては、各學校等に於ても體育を奬勵せらるゝ位であるから、まさか昔のやうな細つそりとした柳腰を望まれる氣遣ひは無い筈であるが、事實は却つて今尙ほ我國婦女子の社會には、依然として其を

　理想的美人のスタイル

として居るやうに見受けらるゝ、歐米では我婦女子の社會で理想的美人のスタイルとして居るやうな體格の者は、寧ろ病的のものとして喜ばないのである。

尤も處變れば品變るとやら、彼と我とは凡て人情風俗等を異にして居るのであるから、さう何も斯も一樣に云ふ事は出來ないけれども、何方かと云へば、どうも其細つそりとした體格のものには肺結核に侵さるゝ者が多い傾きがある、左れば何方かと云へば、先づ肥つて居る方が安全である、一體處女の時代は脂肪の多いものであるから、どうしても太り勝ちのもので、また敢て當世風を主張する譯では無いが、肥つてポッチヤリとして居る方が見好いのであるが同じ太ると云つても、歩くにも股が摺れる、大義であるといふやうに太つたのも困るもので、若い娘さんや孃さん達が苦にするのも御尤であると考へる、

斯く極端に太るのは、我々專門の側から云へば一種の病氣と看做すのである、尤も此の病氣は或は太り或は痩せるといふやうに新陳代謝を爲るものであつて痼疾性のものでは無い、名けて脂胖病といふのであるが、之が原因に就ては種々あるのであるが、その中最も多いのは

遺傳より來る

もので、その遺傳も、父方のものよりは母方の遺傳を承け繼ぐことが多いのである、世間に父母や祖父祖母は云ふに及ばず、その息子も娘も、皆孰れも丸々と肥え太つて居るといふやうな家庭は能く見るのであるが、併し母親が太つて居るからと云つて、必ずしも生れた兒女までが肥えて居ると限つたものでは無い、たゞ肥えた人の腹に出來た兒女は、どうも肥滿する傾きを持つて生れて來るといふに過ぎないのである、卑近な例が、肥料を澤山に施し、且つ手入れの屆いた植物は、栗にせよ柿にせよ、孰れも美事な果實を結ぶと同じやうなものである、

既にその兒女たるものは、肥滿すべき傾向を有つて生れて來るばかりでは無く、その育てらるべき一家の生活狀態は同じであり、また食物飲料までが同一である、殊に兒女たる者は生れてから、暫らくの間は重に母親の手一つで育てられるものであるかち、食物の嗜好は云ふまでも無く

總ての生活が母親と同じやうになるので、ツマリ母方に似て肥えるのである、それ故に、幼少の時から食物や習慣等に十分の注意を拂はねばならぬのである、

この脂肪病は、必ず遺傳で無くとも、澱粉質に富んだ粉類を澤山に食べたり、又は糖分の澤山に入つたものを多食したり、殊に酒類を餘計に用うると、どうも斯の病に罹り易いのである、併し酒も飲まず甘い物や澱粉類を澤山に食べないでも、若も食物を澤山に食べて運動しないと、自然食物の消化が惡くて、溜飲などゝいふ諸種の胃病等に罹る、左樣すると胃腸の中は勿論、血管中のものが十分に新陳代謝する事が出來ないので、知らず〱脂肪病に陷るのである、それ故に、食物を適度に取つて、盛んに働く人には肥滿者は尠ないけれども、やれ何が滋養になるとか、之が爲に好いなどゝ、金錢に飽かして多量の食物を取り、さうして別に働くでも無く、毎日浮羅〱〱して居る人には肥滿者が多い、故に比較的男子よりも婦人に肥滿者の多いのである、尤も食物の量から云へば、婦人は男子程に多く取りはしないが、立働くといふ點になると、どうしても

婦人は男子よりも尠ないのみならず、飲食物の中でも、酒を用ゐる婦女子は極尠ないのであるが、甘い物になると、如何も婦人の方が男子よりも餘計に好まるゝのである、即ち薩摩芋と南瓜とか云ふやうに、是等は昔から婦女子の大好物と云ひ傳へられて居る、全體芋や南瓜といふやうなものは、非常に澱粉質に富んで居るので、隨つて肥滿を助くるものである、人種の上から云へば、

土耳其人は一番肥えて居るといふものは、元來土耳其人は遊惰であつて、どうも働くことが嫌ひであるから、從つて食物の消化が惡くして脂肪病に罹るのである、また獨逸の北の海岸に住んで居る人種は、非常に氣候が寒いので、冬になると閉籠つて外へ出ないから、自然運動が足り

ないのみならず、その冬の寒さを凌ぐために多く脂肪質の物を食するから、勢肥滿を免がれないのである、今は自分の本國といふものは無いが、世界到る處の猶太人は、何れを見ても能く肥え太つて居るが、是は彼等が富豪で、毎時も酒を飲み、別に爲す事も無く浮羅〳〵して居るから、それで肥滿者が多いのである、

同じ婦人の中でも、若い者よりは比較的年取つた人に肥滿者の多いのは何故であるかといふに、一つは運動不足の爲もあらうが、それよりモット近い原因は、最早四十五六歳から乃至五十歳ぐらゐの婦人になると、月のものが上つて卵巣の働きが止まるので、自然新陳代謝に影響を及ぼして肥えるのである、又他の病氣の爲に肥える婦人もある、例へば、心臟病とか肺氣腫等に罹ると、身體を動かすのも餘り好く無い、のみならず如何も氣が鬱して來る、さうかと云つて運動すれば息が切れるから、まづ成るべくは運動しないで家の内に引込んで居る、ソコデ退屈に耐へられないといふので、男ならば酒を飲むとか、女子ならば何か口淋しいといふやうな事から、菓子か何かを取る、結局運動しないで過食するといふ事になるので、自然この病氣に罹るのである、

この脂肪症は三期に分けられてあつて、第一は羨望期と云つて、マア好いお體格です事と人から羨まるゝやうに肉が附くので、第二は滑稽期といふのも少し誤弊があるやうだが、隨分肥つておいでゝ餘りお格好は宜いとは云へませんと言はるゝ時期、第三は憐憫期とでも云はうか、天邊からマア御氣の毒で御座いますと云はるゝ、斯う三期に分けられてあるが、何故に左樣肥えたのであらうかといふに、元來脂肪なるものは、我々の身體に必要なるものである事は言ふを竢たないのであるが、例へば、水や火は吾人が日常に缺くべからざる物であるとは云ひながら、一朝之が餘ると、生命も財產も共に失ふ事があるやうに、物も適度を超えては宜くないので、それと同じく脂肪が如何に人體に必要であると云つて

も、餘り之が多過ぎて內臟機關の周圍に餘計附着するやうになると、實にそれは危險千萬である、殊に心臟の周圍に澤山着くと、心臟は十分に自己の働きを爲る事が出來なくなる、といふものは、脂肪といふ餘計の荷物を澤山に脊負はせられるから、心臟の草臥は非常なもので、何時とはなしに搏動は微弱になり、脈搏は不正を來たし、動悸はますます激しくなつて來て呼吸まで困難になる、モウさうなると顏の色は蒼ざめて、重い心臟病と極つて了ふのである、若しまた是が消化器に附着すると、胃や腸の作用が十分に出來ないから、胃腸病に罹るのである、



まだ其ばかりでは無い脂肪病が本で、肺病になつたり、股や腋の下に痒疹の發する人もあり、または股摩れのする人もある、殊に近來大部流行する糖尿病といふ病氣は、重に肥滿した人に非常に關係の深い病氣なれば、餘り身體の肥え過ぎた人は、時々醫師の許へ行つて健康診斷を受けらるゝが好い、この病に罹る事は先づ此位に切り上げて、今度は之を治すことに移らう、

その肥滿したものは、如何にせば之を治すことが出來るかと云ふに、戯言でも何でも無いが、最も有効なる事は斷食である、即ち飲食物を一切取らぬといふ事にするので、斯うすれば如何に肥滿した者でも、之を續ける中には乾度瘦せる事は疑もない事で、瘦せるといふ事だけは目的を達せらるゝが、それでは單に脂肪が瘦せるばかりで無く、それと同時に大切な筋肉までが瘦せる、筋肉が瘦せるに從つて、掛け換への無い生命までが瘦せる事となるので、生命を瘦せさせて了つては、結局瘦せるも太るも無いのであるから、どうも此の斷食は危險千萬の方法と云はねばならぬ、故に

止む無くんば飲食を節する

といふのであるが、是も却々困難な事で、

往々牛乳療法を用うる

といふ人もあるが、それは何うするかといふに、それは一日に牛乳を一升ほどづゝ飲ませるので、それも初めの中だけで、追々に日を經るに從つて量を減

じて、瘦せるといふ効能の見えるまで爲るのであるが、之も餘程險呑な方法で、素人が直ぐに行ふべき仕方では無い、然らば如何なる方法を用うべきかといふに、バンチング氏、エブスタイン氏、エールテル氏等の療法が至極好いので、また世間にも有名なるものである、けれども是等の療法とても、素人の方が直ちに取つて行ふべきものでは無い、何處までも專門家の處へ行つて身體を診察して貰ひ、さうして後、各々の身體に應じて適當の飲食物を撰擇して貰はなければならぬのである、

併しながら專門家に乏しい所や、又は左程までゝ無い者が

平常に注意すべき點

は何であるかといふに、第一は食物である、その要件は

多く食べない

といふ事です、兎角口當りでも好いと、モウ一箸などゝいふ事は誰しも有り勝ちで、それを節するとい

ふ事は却々困難なものである、一體食物を過ごすといふ事は、通常の人でも好くない事であるが、殊に肥滿したる人には第一の禁物である、次に甘い砂糖の類は斷じて用ゐてはならぬ、また麵麭とか芋とかいふやうな澱粉質の物も宜くなければ、同じ果物の類でも餘り甘味の勝つたものは避けるが宜い、それから縱ひ如何なる事があらうとも、酒は一滴たりとも口にしてはならぬ、尤も此の酒の事は婦人に用は無いものゝやうであるけれども、萬一を慮つて注意を促がしておく、

食物の類は先其としても、爰に最も必要なる事は、

身體の運動である

誰とて病人で無い限りは、多少とも家の中でも步くであらうが、其樣な事では之を治す事は出來るもので無い、縱ひ用があらうが無からうが、通常の人より一層運動しなければ不可ぬ、それには只浮羅〳〵步きばかりでも厭きるであらうから、テニスでもサイクルでも、進んでは乘馬でも、兎に角盛んに筋肉を働かせるが好い、左樣すれば厭とも血液の循環は好くなるので、自然新陳代謝を十分に爲せる事が出來て目的を達した上に、身體の健康は以前に倍するやうになるのである、

最後に云つて置く事がある、兎角肥滿した人は朝寢が好きでならぬ、之は十人が十人といふ譯でも無いが、先づ概して左樣である、是は尤も心得違ひの甚しいものであるから、先づ通常の人よりは一層早く起きて冷水摩擦を遣るが宜い、もしまだ朝は肌寒いといふなら、初めは微温湯を用ゐて、漸次に冷水を以て擦摩する事に身體を慣らさねば、何時までも肥滿を治する時期は無い、

世間並では成功せぬ

山田美與子

私などはまだ〳〵成功などゝいふ事は出來ないので、今尙は日々に世智辛い世の中と鬪つて居るので

御座いますから、迚も御話をする資格はないので、却つて皆様方の教を乞はなければなら無いので御座いますが、兎に角世の中といふものは良くしたものでありまして、少しどうか都合が付いて來ると信用も出來てくるものでありますが、さて其都合が少しなりとも付いて來るといふまでには却々骨の折れるもので、その苦しさ辛さと云つたら、實際その場に方つて來たもので御座いませんければ、單にお咄位では解るものではありませぬ、申すまでも無く、

富は屋を潤すとか聞及びますが、その富が出來さへすれば信用が增して來ると同時に、人品も揚つて來ますし、人より尊敬もされ、また禮節も整つて來ることは勿論、衣食も充つて來れば、快樂を廣うする事が出來るものでありますから、誰しも是に向つて要求の念を懷かない者は無いので御座いますが、偖世の中の人が之を獲やうと思つて十二分の研究を盡し、また十二分の用意もなさるのでありますが、それで時として

之を捉へ損ふ方が多いやうにお見受け申しますが、それは何が爲で御座いませうか、私の考へまするには、世間多くのお方々は、此の富を得るに付ての智識は、私風情に比べますれば百層倍も卓越えて居らるゝのでありますが、

唯一つの實行をなさらぬのが玉に疵ではあるまいかと存じます、斯う申しては失禮で御座いますが、實行と申すことは、それも事柄にも由りますけれども、まづ自分の身代を作りますに就ての實行は左程六ケしいものでは御座いません、誰しも出來ることで、それは何人にも生れ落ちるから天然に備はつて居る資格なので御座います

昔し西洋に一人の富豪が御座いまして、或人より金持になる秘傳を教へて呉と申されますと、その富翁は後とも云はず、即座に答へて曰はるゝやう、金を溜める事は最と易いことで、少しも難事ではない、先づこの通りであると言ひながら、傍らの新聞紙を取りて之を六つに折りたゝみ、切りて三十六片とな

し、一枚ごとに金千圓と書し、鄭重に之を揃へ、恭々しくその人の前に出し、御覧の通り貴君は直ちに金三萬六千圓の金持となられたのであるから、歸宅の上は丁寧に金庫の中へ蓄へて置かるゝが善い、もし是で不足とあらば、この通りに幾らでも所望だけ造らるゝが宜しい、左すれば貴君はそれだけの金持となられたのであると申されましたが、聞く人は何だか狐にでも魅まれたやうに、サッパリその意が分らないのみならず、新聞紙を切りて財產だとは、如何にも人を馬鹿にした仕打で、斯樣なものは幾らあつたとて通用もしなければ使はれもせぬ、其樣な教へを請ふのではないと申されますと、富翁は容を更めて言ふ樣、抑も御身は金錢を使ふものと見做すのは第一の過ちで、凡そ金錢を溜めるといふ程の者が、之を使ふなどいふ觀念は微塵もあるべき筈のものでは無い、我に巨萬の資產があつたとても、更に之を使ふ必要が無ければ、即ちこの紙屑も同然であるから、貴君は若しも金を得やうと思ふならば、金錢をこの紙屑と一つに見て、更に之に對して一分の情をも動かさぬが宜しいと申されますと、その人は成程と合點する所があつたと云ふ事でありますが、總て富を作るには金錢に情實を加へてはならないので、言換へますれば金を金として取扱はないので御座います、左樣かと申して無汰に使へといふのではないから、此を考へ違ひしては不可ませぬ、

一體貯蓄と申しますものは、餘程己に打勝つといふ心と、如何なる辛いことにも耐へ忍ぶといふ力を有つて、何れも百折不撓の精神でなければ、容易に實行の出來るものではありませぬ、よしや自分一人は行る積りでも、兎角世の中の口といふものは喧しいもので御座いますから、それを押切つて行つて往かうといふには餘程の辛抱が大切であります、或は見る物聞くものにつけ、若くは食ふもの着るものにしても、自分の居廻りは凡て己の慾望を誘ふ料となつて居る今の世の風習の中に居りましては、豫て良い事とは知りながらも、

見す〳〵習慣の奴隷となつて了ふものが多いのでありますから、是には堅い方法を立て、且らくは此方法の犠牲になる心得で無ければ迚も貯蓄は出來ませぬ、而して貯蓄は一個人でするよりも、家庭全體で氣を揃へて爲る方が効力が多いので御座います、申すまでもなく、家庭といふものは人間生活の根本でありますからして、大小に拘はらず、日々の經費といふものが却々少なくはありませぬのですから、その經費の中から工夫して金を剩すといふ事は、家の爲にも亦國の爲にも大いなる利益となるのであります、故に一家の主婦たる人は、此に十分の注意を加へなければならないのであります、

隨分人樣によりましては貯蓄に左程重きを置かないで、人間は何でも現在が肝要で、ツマリ永久といふことは現在の續きであるから、現在を犧牲にしてまでも永久を計るのは愚かな仕方であると、斯う申さるゝ方も御座いますが、斯樣な御方に貯蓄の御話をいたして御賛成を得るまでには却々容易な事ではありませぬが、中には分つた御方で、その心掛は十分にありながらも、或事情のためや又は習慣上の爲に是を實行して行くことの出來ない方が多いやうで御座います、例へば、月々五六十圓づゝの收入のある家は、云はゞ當今中流の生活と云はなければならないので御座いますが、その中で月々幾ら宛かの貯蓄をなさるゝ方は、**マア十人に一人も無い**と云つても能い位で、ソコデその方々に向つて、何故に貯蓄をなさらぬかと御聞き申せば、孰れも口を揃へて、どうも生活が一杯で、迚も貯蓄をするといふ餘裕は無いとの仰せで御座います、一體貯蓄と申しますものは**生活の餘裕をするものでは**御座いませぬ、成るべく生計を切詰めてするのが本統で、左樣かと申して食べる物をも食べないでするのではありませぬ、固より如何なる生計だか

らど申して、別段に餘裕といふもの丶決して有る筈のものではないが　その無い中から絞り出すのが餘裕で、その餘裕を貯蓄するのが眞の貯蓄と申すもので御座います、これに就て某奥樣の所へ親戚の方が參られて、四方八方の話の事から生活向の事に及びまして、失禮ながら貴婦のお家では、モウ餘程御金が出來ましたでせう、少と地處か家屋でも御求めになつては如何で御座いますと申されますと、その奥樣の答に、どう致しまして私共の生計で貯蓄などの出來るもので御座いますか、毎時も月々一杯で、兎もすれば引足らぬ事が御座いま



すとの事で、親戚の方は驚いて、でも貴婦の御家では月々二百圓以上づゝも收入がありますのに、それで御金が出來ないとは如何なる次第で御座いませう　私共では御承知の如く、貴家方の半分も收入は無いのでありますが、それで家族も相應に多い方ながら、どうにか斯うにか違つて行きますが、貴婦の所では如何して左樣御掛りになるので御座いませうと尋ねますると、御覽の通り其樣に贅澤は致しませんが、毎月の物入は定つてそれだけづゝ掛るので御座いますから、どうも致し方は御座いませぬ、

マア有りのまゝの所が、第一良人の小使、車屋に拂ふ金、下女や書生も居ります、小兒も二人、老人にも相當の待遇は致さなければなりませぬ、彼此してその方に三四十圓は急度掛ります、それから月々の雜用がどうしても七十圓は缺げませぬ、また四季折々の衣裳、これとても唯世間並にするだけで、少しも餘計な奢りを致すのでは御座いませぬ、尤も偶には氣保養も致さなければなりませず、それに交際上または體面上これも世間並で御座いますから詮方なしに醫者を迎へる事もあり、器物の新調もすれば寄附にも出し、義務貯金にも出し、家賃は月々三十圓拂はなければならず、サア斯う勘定して見ますれば殘る所は御座いませんではありませぬかと答へらるるので、成程聞いて見れば御無理は無いのでありますが、併し斯樣な事では迚も金の溜るものでは御座いませぬ、百圓二百圓取つても殘る所は無い筈ですけれども、それは全く考への無い遣方と申すもので、ホンの今日立派な暮しをして居るとはいふもの丶、

その日暮しの貧乏人と少しも異つた事は無いのであります、流行の衣裳を着て手車に乘つて交際場裏を切つて廻はされても、毫も車夫や土方と撰ぶ所は無いので、一家の主婦たる者が其では致し方が無いと申すものでは御座いますまいか、私の考へますには、昔から何處の家庭にも世間並といふ言葉を用ゐられますが、是が甚だ宜しくないと存じます、一體世間並といふ言葉は獨立心のないそして見識のない事を表はしたもので、善い事であらうが惡い事であらうが、總て世間の趣に從ふといふ譯で、少しも自分に見識といふものを立てない俗人の事で御座います、これも體裁上、あれも附合上イヤ衛生上など丶區々たる世間の說に雷同するやうな事では、生涯貯金は愚か、一家一分の繰廻しもして行けるものではありませぬ、簡單に申しますれば、且那の交際費は幾らかゝります、奥さんの髮結錢が幾らかゝります、また臺所で砂糖や鰹節は月にどの位入ります、下女はどういふ風に御使ひになります

か、また御客は如何いふ風に賄ひますか、八百屋や魚屋の買方はどんな鹽梅か、それから體裁とか體面とか有仰る車夫の抱へ料、夏冬の衣裳から下駄や傘や、奥の間で用うる茶や菓子はどの位の品で、これが月に何程位かゝりますか、寢卷の汚れた時にはどうして仕替へますか、或は敷物や毛布の類は新調の節に何程かゝるか、それからまた他家から到來物のあつた節に如何いふ風に所置せらるゝか、他家への進物は如何な風に求めらるゝか、家族何人の頭の上から足の爪先まで、一々調べ、その人々の身の上に、月々どの位の金が掛るかといふ事まで十分に考へて見ると、成程それは却々大した額に上るものであります、けれどもその種々な入費を一々吟味して見て、その内から絞れるだけ絞つて見れば、二百圓の入費の中で、三十圓や五十圓のものを絞り出すのは造作も無い事でありますが、たゞ無暗に彼も據ろなし是も餘儀ないと一々に理窟を附ければ、それは際限もなく金は消えて散るので御座います、でありますから、貯金をしやうといふには、決して生活費の餘裕を當てにしてはなりませぬ、その餘裕の無い中から切詰めて絞り出したので無ければ眞の貯蓄となるものでは御座いませぬ、ツマリ前に申した如く情實に搦まれては金の殘る筈のものでは無いので御座います、

　それで私が是まで實行して參りました一端を申し上げますれば、先づ一週間に二度づゝ結ふ髮を、月に三度に減じますれば、一回が五錢づゝとしても、四十五錢のものが僅か十五錢で濟みます、官營の卷煙草十錢の敷島を一日に二袋づゝ吸ふと致しますれば之が月に六圓かゝりますが、刻みなれば大抵月に百匁あれば澤山でありますから、四十匁一袋五十錢としても月に一圓二十五錢で事が足るので、斯く私の髮で三十錢、良人の煙草で四圓三十五錢、毎月消えて行く品物の中から、是だけの金が偶然にも浮いて來るのであります、何の僅な髮結錢煙草錢など、月に積つて物の五圓にも足りない、何も夫程までに

吝にするにも及ぶまいと有仰る方も御座いませうが決して左樣では御座いませぬ。是は只一例を御咄したまでゞ、一事は萬事で他の事も斯樣に心掛けて參りますれば、その額は却々少くはないので、例へば、是までは體裁を造つて、往復とも呼上げて乘つた車も、以後は辻車に飛乘りをするといふ風にし、若し電車まで遠くなければ、まづ其所までは歩くといふやうにすれば、これから浮いて出る金ばかりも大した額に上るので、此く彼方からも此方からも浮いて來るといふやうになれば、却々五圓や八圓の端た金ではありません、微細に渉つて氣を附けますと、月に何十圓といふ金高になるので、之を銀行へ十年も積めば、その終りには一大資本となつて、地所も買へれば家も建てられるのであります、斯ういふ譯で經濟の初めは、極々僅かな湯錢髮結錢といふやうなものから積つて參るので御座いますから、その行り初めには少し辛いか知らないけれども、自分で是ではならぬと奮發して將來の習慣を破り少しの不自由を忍んでさへ行けば、百圓の生計は五六十圓で濟む事になるのでありますから、私に欺されたと思つて一つ實行して御覧なさい、極りが惡いの體裁が良くないのと見えばつてばかり居ては、生涯浮ぶ瀬は無く始終苦しみ通しに苦しんで居らなければなりませぬ、大抵の家では之が貯蓄の分だからといふ餘裕のあるものでは御座いませんから、私の申し上げたやうに、成るべく切り詰めて絞り出すやうに爲さるのが肝腎で御座います、

頭髮と顔との釣合

今井美代志

色の白いのは七難隱すと云つて、婦人に取つて色の白いのは一德であるが、偖生れつき色の黒いものは如何とも仕難いので、父母を恨んで見ても初まらない、併し色の白い者には兎角劍相がある、けれど

も色の黒い者の方が比較的愛嬌に富んで居るといふから、まづ差引勘定は出會ふのみならず、色が黒いといつても、さう苦にしたものでは無い、何故なれば、化粧品といふものがあるから、これで

人工的の扮色

さへすれば、十分それを補ふことが出來るのである色合は先づ其として措いて、顔の形も

十人十色といふ如く

圓形の者もあれば瓜實の者もあり、中凹の者もあれば出額の者もあるといふやうに千差萬別で、あの姉妹は瓜二つで善く似て居ると云つても、よく／＼之を檢ぶれば、その異つた所は一處や二處ではない、けれども時としては他人の空似とさへ云ふ事があるから、况して眞の姉妹であつて見れば、異つた處よりは似た處が澤山あるに相違ないが、その瓜二つといふやうに似た姉妹でも、同じ頭髪でも、似附く者もあれば又似附かないものもある、といふやうに、この髪形といふ者は、その結ひ方で、

人柄を上品にも下品にもするものであるから、餘程その格好を撰ばなければならぬ、イヤ、諸嬢は晝夜この事に苦心せられつゝあるのであるから、特に注意は要らないやうなものではあるが、兎もすれば流行だからと云つて、自分の顔形や頭顱の形や、または生際の厚薄等にも關はずに結はるゝ方があります、この程も私が途上で見たのでありますが、年の頃十五六才と覺しき、顔は何方かといふと細面の、色の白い品の良い、服装も卑しからぬ令嬢であつたが、その髪を見ると所謂當時流行の二百三高地も良いけれども、その廂の出し工合が、鍋の蓋なればまだ優しいのであるけれども丸で釜の蓋を載せたといふやうな鹽梅で、折角の顔形も奥の方へ引込んで了つて、引立たない所ではない、縹緻を壊して仕舞ふのである、されば此髪の形どいふものは、他人にも見て貰はなければならないけれども、

自分は他人よりもより以上

自分を善く知つて居るのであるから、よく姿見の前で自分みづから研究しなければ不可ぬ、

如何に髪結が上手でも、髪結は朝から晩まで其人に附切りのものでは無いから、縦んば日髪を結ふにしても自分ほどは良く解らない、のみならず、型の中へ詰るものではなし、ホンの手先で目分量にする事であるから、急度毎時も同じやうといふ譯には行かないのが本統である、それにしても先方は商賣人であるから如才は無い、格好良くは結つてくれる、けれども夫は本人の望みに依つて結ふだけの事で、果して其が似合ふか似合はないかは關しないのである、それはどうしても自分が前から研究して置かなければならぬ、これに就て或髪結の談話を二つ三つ咄して見やう、

すべて髪を結ふには、日本髪でも又は束髪の類でもさうであるが、尤も大切なる部分といつたら、

髷と鬢と髱と額髪

とで、この中で髷は日本髪に取りて大切な部分であるが、その他は孰れにも通じて肝要な部分であつて、

先づ引括めて云へば、恰好を上手に取るのは、鬢の取りやう一つで、これは髪結泣かせといふ位で、實に困難であるとは云ふもの丶、大凡鬢の出し方は、耳朶が少し出た位で、鬢尻の詰つた前の脹れたのが誰にも似合つて、しかも上品に見える、凡て髪の周圍は豊肥としたのが良いから、鬢を搔上げるにも、中鬢にかいて、鬢尻は丸くしないで、斜に搔きあげるが宜い、この搔きやう一つで恰好が善くも惡るくもなるのであるから、尤も注意を要するのである、

次に髱は詰つたよりは出た方が宜いので、殊に猪首の者は髱を出さなければ不可ぬ、一體髱をつめると、着物の衿を後へ落さずに首へ巻附くやうに着ますから、誠に釣合が惡い、肥滿つた者などは猶更である、兎角髱尻の尖つたのは下品のものであるが、之は櫛を入れるとか、又は毛筋立でフックリと出すやうにさへすれば、生際の惡い者でも、急度衿足が隠れて良く見せるやうになるのである、

次に額髪は、餘り廣く取り過ぎると、鬢の格好を崩すから、成るべく前の方へ大きくして急に窄めると品の良い形になる、のみならず、毛の分目も隠すが、この分目の筋が見えるのは下品なものである、大抵誰でも、額髪と髷との間を狹くするのが宜いやうに思ふけれども、これは横から見て格好が惡い、此所が狹いと櫛を寢せて挿せない、どうも櫛を立て挿すのは上品に見えない、とは云ふもの丶、是も一様には云はれない、例へば、高髷とか島田とかいふ髪は、其所を詰めなければ見立てがないから、自然櫛も立て挿すやうになるのである、

右は髪の格好に就ての通則ともいふべきものであるが、尚ほ顔と髪との關係を細説すれば、丸顔と長顔では自然結ひ方が違ふので、また左様なければ釣合が取れないのである、ソコデ

丸い顔のものは

鬢の廻りや髱の格好は前に述べた所と左程變りは無いのであるが、尤も目立つて異ふ所は額髪で、この額髪は島田でも、丸髷でも又は銀杏返しでも唐人髷でも總て之を立て、さうしてフックリと脹らせる加減にしなければ不可ぬ、一體額髪の潰れたといふものは人柄い見劣りがするものであるから、毎日撫で付ける時にも、特に額髪の立つて居るやうにしなければならぬ、之に反して

細長の顔のものは

前の丸い顔立ちのものとは全く反對に額髪を取らなければならぬのみならず、これは態と潰れる加減にするのである、若も左もないと、面長の顔が一層長くなつて見えるのであるから、この邊は最も注意をしなければならぬ、

元來この髪の格好には、普通商賣人風と堅氣風と稱する二種類あるが、サテその商賣人風といふ中にも、專ら粋を生命とするものもあれば、或は從來の慣例によつて特殊な結方をして居るものもある、孰れにしても良家の子女の學ぶべきものでは無いが、動もすれば之に慣はんとする傾きがあるけれども、

断じて學ぶべきものではあるまいと思ふ、何故といふに、それを眞似るときは、成程粹ではあらうが、人格に重みといふものが無くなつて、何處となく輕佻に見えるものであるから　先づ良家の子女は眞似をせぬが良い、それから堅氣風といふ中にも、商家または月給取り、若くは銀行會社員といふやうに、前の商賣人風といふよりは一層範圍が廣いのであつて、却々それを一々此所で紹介することは出來ないのであるが、また之を紹介しないまでも諸孃は實見せられつゝある事であるから、之が詳細は省くとして、此所には孰れも皆自己の職業と身分と地位とを省みて、必ず分に過ぎたやうな髪の結び方をせぬが宜いといふ事を告げて置きたい、云ふまでゞもないが、上流社會の奥樣や令孃が、鳶職や大工の女房や娘の結ふやうな髪形をして居るのは、何んとなく野卑に見えるし、之に反して、商家や左官の女房達や娘さん達が、上流の方のやうな髪を結つて澄して居るのも、餘り見善くないのみならず、何處となく傲慢らしく見える者であるから、おの〳〵分に從ひ地位に應じて結はるゝが良い、而して髪を結ふにしても前來より縷々述べたるが如く、よく自分で自分の顔の形、生際の工合と厚薄、頭髪の毛の多少、身體の肥瘠と高低、その他揉上げ衿足等、種々の點を綜合し研究して、而して各部の釣合を取るやうにしたならば、必ず今日のやうに二百三高地とか、または開き過ぎた蕈だなどゝいふ冷嘲を招ぐ氣遣ひはないのであるから、何處までも自分が自分を研究して、自分に似合ふやう、場合によつては流行の魁となるやうに心懸けられたいものである、

黄白に嫁する勿れ

八木末吉

人は容姿より唯心と昔からいひ傳へられて居るが實にこの俚諺は簡單にして能く人世の機微を穿つて居るので、どうか何時までも此眞理を社會に保存し

て行きたいものであるが、社會が文明に進むと共に、孰れの國を問はず、等しく物質的の慾望が高まり、從つて精神的の慾望もまた高まるのであるが、或方面に向ふと却つて精神的の慾望は物質的の慾望に壓せらるゝの傾きがある、之に就ては種々の原因もあらうが、社會の複雜になるに從つて

生活難が四方八面より急迫して來る、之もその原因の一に數へることが出來るであらうと思ふ、この生活難の爲に、歐米のやうな生活程度の高い處では、却々自分一人口さへも過して行くに容易でないから、何も獨身生活をしたくは無い、所謂スキートホームを形造りたいけれども、一時俄工面をして妻を迎へ家庭を作つて見ても、之を持續けることが覺束ないから、止むを得ず獨身生活に甘んじて居るといふ始末である、

まだ修養時代の青年の者は且らく措き、既に夫等の時代の經過したものは、男女に拘はらず必ず家庭を形造らなければならぬので、この家庭を作るといふことは決して無意味に[illegible]すべきものでは無い、男女相合して家庭を作ると



ふ事は、眞誠に男女の身の上に取つて、各自社會に出でたる本分を盡すべき

先天的の默契である、

この先天的の默契を履んでこそ、即ち吾人が社會に出でたる本務を竭すことが出來るのである、併し社會の某事情のために制せられて之を實踐することが出來ないのは、啻に其人の不幸のみでは無くして、延て其國家の不祥事であるけれども、遠き將來はイザ知らず、目下生存競爭の激しき、優勝劣敗の潮流の旺んなる今日に於ては、是また人爲を以て如何ともすべからざるものと斷念するの外は無いのである

而かも我國は之を歐米の各國に比すれば、單に生活の程度が低いばかりでなく、男女の間に於ける情誼も異なるので、まづ十が七八までは相和して家庭を作るのであるが、尤も中には朝に之を作りて夕べに之を壞るなど丶いふ例外なものもあるが、大抵は一たび之を形造りて各本務を完遂しやうと勵みつ丶あるので、その人々の幸福は勿論、國家もまた大いに意を强うすべきである、

然るに其半面に於て、吾人は聞くも忌はしき離婚沙汰を耳にするのであるが、是はまた何故であらう女子たる者が一たび人の妻になつたからには、第一に希ふものは何であるといふに、

良人の限りなき愛と圓滿なる家庭の平和

とであるに違ひない、如何に美服を纏ひ、幾多の金銀珠玉を蓄へましても、もし良人の愛が得られなかつたならば、婦人の胸中は如何ばかり落寞悲愁の思ひに掻き亂されることでありませう、實に女子が唯一の幸福とし、最大の慰藉とするものは、愛を措いて他に無いのである、離婚といふことは、換言すれば、ツマリ此愛が消失したことを證據立てるのであるから、この運命に接着した女子は、如何にわれと吾が身を嘆くであらうか、それには何か理由が無くてはならぬ事と考へる、かく云へば、或は婦人の側からは男子の冷酷無情を飽くまでも責めなければならぬと云はる丶であらう、まこと男子は女子に比す

れば、愛の力が足りないのかも知れない、古へより女子は愛を以て生命として居るに引換へ、男子は愛を人生の一部分に見て居る傾きがあるのである、

さはいへ方今の女子中には、それも後より生活難といふ豺狼が迫ると同時に、虚榮心といふ狐狸が前に居て魅するとの爲か、全く女子の生命たるべき愛を注ぐに黄白の多少によりて厚薄を生ずるのであるが、是等は素より凡ての希望と精力とをまでも捧げられて成就したる神聖なる戀愛で無いからである、苟も此戀愛にして完うせられぬとならば、寧ろ生きながらへる甲斐もないとまでに全力を傾注せられたものであるならば、決して前述のやうな悲運に接する氣遣ひは無い筈である、約言すれば、破鏡の悲愁は最初彼が黄白に嫁するからである、

更めて云ふまでも無く神聖なる戀愛は黄白の上にあるものでは無い、反言すれば、黄白の上に嫁するものは必ず愛を二三にするものなれば、斯くの如き女子は生涯蜜の如き戀愛を味はふことは出來るものでない、縱ひ家庭を作りたりとても、此くの如き女子にありては沙上の樓閣視して居るに相違ない、假りに左樣でないとしても、黄白の在る處は是わがスヰートホームとして居ることは爭ふべからざる事實で、自然良人の愛の衰ふるのも無理は無い、言はゞ先づ初めよりして自ら欺いて居るからである、

一體如何なる男子とても、優しき妻の愛情を浴びては、必ずこれに對する温かき心を懷き、互ひに相竢つて圓滿なる家庭を構成するものである、けれども此際男子は、單へに家庭の愛にのみ引かされて、それが爲に社會的の活動を中止する事は出來ない、否、愛を得た上は、更に他の或物を得やうとして大いなる活動を試みなければ止まない、これ即ち男子が社會に貢献する事業である、既に男子の精力が家庭以外の事業に集注した後には、もはや結婚當時のやうな春の野の芳香に醉うたやうな、若々しい愛情

を妻に向つて注いでは居られないと思ふ、然るに妻は、さも良人の愛情が冷減したかのやうに心得て、ひとり悲愁に沈む女子もあるのである、それは大いに見當違ひの話で、無情など丶恨む所は毫も無いのである、

人の妻たるものは、家庭の主宰たると同時に、良人の補佐者、慰藉者でなければならぬのであるが、輙もすれば、春の野のかげろふのやうな、極めて感情的の愛ばかりを望んで、殆んど其他を顧りみない者が少なくない、殊に黄白に嫁した婦人には此弊が多い、例へば、自ら要求する所の衣服および装飾品等は、毎時も唯々諾々さる丶ときは、萬斛の愛を注ぐけれども、もし一の要求の容れられない時は、忽ち變じて柳眉を逆立て、碌に口も利かないといふやうな事は屢次見聞するところの適例である、のみならず、良人が事業の爲に資を投じ、又は或事情の爲に失敗を招ぐやうな事でもあれば、恰も自己の資財を削減浪費さる丶かのやうに口穢く罵る者さへある、而して少しも良人の事業を補佐しやうとしない、また良人を慰めて之が挽回の策を講じやうなど丶激勵することもしない、たゞ成るべく自己が要求する物質的の慾望を滿足せしむる事にのみ汲々として居るこれ皆黄白に嫁するからである、

世に賢妻と稱し良母と唱へらる丶者は、大層珍らしいやうに思ふけれども、何も左程珍とするには足らないのである、といふものは、その賢妻といひ良母と稱するは敢て人に異なりたる言行のあつたものではない、唯よく女子の天分を盡した迄の事で、他の者が多くその軌道を外れて居るから良くないだけで、たゞ其と比較したまでの事である、尤も當時の女子は昔しの婦人と異つて、學問も出來る、道理も分つて居る、口も利ける、遊藝も達者である、押出しも善いといふやうに諸拍子揃つて居る、ソコデ慾望はといふと、無暗に物質的の慾望のみが嵩じて居て、精神的のものは有れども甚だ野卑である、之に反して昔時の婦人は、無形なる精神的の修養が勝つ

て居たから、容易に物質的の欲望に眩惑するものが少なかつた、であるからして、今日の如く所謂破鏡沙汰は頻出しなかつたのであるが、それといふも初めより黄白に嫁するといふ事を無くして、専ら前に掲げたる、人は容姿より唯心といふ

その心と心とを以て結合して行つたからであらうと考へる、既にその心と心とが結合した以上は、決して萬代その愛の衰へるものでもなければ、又消え失せるものでも無い、之あればこそ、圓滿にして平和なる家庭を保ち、而して常に幸福を齎し來るのである、

人は決心が大切です

増田鏡子

私も最早本年は六十五歳で、斯うやつて悴や嫁の世話になつて居りますが、御覧の通り達者で御座いますから、何か若い者の手助けと思ひますが、如何も年の爲で御座いますか、思ふやうには身體が利きません、たゞ僅に二人の孫の友達となつて居ります位、それに若い者も、私が何か致さうとすると、若しも過ちでもあつては爲らぬと申して何も致させませんから、私も言ふがまゝに日を送つて居ります、これも老ては子に從ふの了簡でございますが、併し勿體ない事と存じて居ります、

ハイ私の生家は、舊川越、後に上州の前橋へ封を移されました松平樣の家臣で、極々微祿のもので、家は代々御鷹匠を勤めて居りましたものでありますが、舊藩主樣が前橋へ御移りになりますに就て、手前ども家臣の者も一同、御供をすることゝなりまして前橋へ引移りましたのは、丁度私が二十二歳の折の事で、當時手前の家族は祖父母および兩親と、私の兄とで都合六人暮しでございました、なれども身分の輕い者でございますから、迚も豊かところでは御座いません、それに頂戴いたした屋敷は、凡そ五六寸以上もあらうといふ砂地でございますから、迚

も汁の實一つ作ることも出來ないので御座います、それでありますから家内は却々困難なのでございますけれども、その當時は十七萬石の太守様さへ御假普請といふ始末でございますから、私風情が不足などを申す場合では無いので御座います、兎に角是までは充らぬながらも御扶持を頂いて居つたので、私共は其餘澤を蒙つて居るもので御座いますから、別に是と申すことも御座いませんでしたが、此所へ移りました翌年から、そろ／＼

世の荒波は私を逐うて來たので御座います、と申しますのは、不圖したことより母が病ひの床に就たので御座います、それも初めの中は感冒位に想つて居りましたものが、日に増し重つてまゐりますので、醫師よ藥と、手を換へ科を交へて看護に盡しましたけれども、丁度四月程で亡くなつて了ひました、愚痴なやうで御座いますが、それも方今のやうに醫術が開けて居りましたならば或は一命を取り止めたことであらうと存じます、何

に致せ、その當時はオランダ流の醫術があるとは聞きましたもの丶、まだ前橋のやうな片田舍には其術が傳はりませんから據ろございません、泣く／＼死出の送りをなしましたもの丶、それよりは一人の兄と共に涙の袖に乾く暇もないのでございます、然るに其前後より致しまして、異國の黒船が參つた抔と申して、何となく世の中は騷々しいので、御藩主も御鷹狩どころでは御座いません、況して御譜代の事で御座いますから、御上よりの仰もある事とて、藩中擧つて毎日のやうに調練を勵まされて、イザと云へば直ぐにも出發すると言ふやうな鹽梅で、何となく心も心ならず、そは／＼と送るとは無しに亡母の一周忌も過しますと、折から或人の仲立で縁談を申し込まれ、私は尚は暫時家にありて父母の手助を致さうと存じましたが、種々

祖父母や父の仰せもありますので、是も祖父様等の御心持を慰さむる一端ともならうかと存じて、嫁いで見ますと、成程

畫に媒介者が申しました通り、多少の田畑を所持して居る郷士の家で、私の良人となるべき者は、その頃少しばかり眼の見えるといふので、只今なれば小學校、その頃の寺小屋師匠を致して居つたには相違ございせんけれども、今更亡き良人の缺欠を云ふでもありませんが、慚も申さねば分りませんから少々お話いたしますれば、夙く父を喪ひまして、母の手一つで甘く育てました所より、實は二十歳前後に非常な放蕩を致され、母御は其を苦に患て病を起し、幾もなく亡き數の人となられましたので、最早誰も頭の壓へ方が無いといふので、固より

坐して食へば山も空し

とかいふ諺の如く、僅かの有金を遣ひ果し、丁度その頃、

日の寄る處に玉がよる

といふやうに、同じ遊び仲間の者の中に、一人の腹黒き者が御座いまして、その者の爲に唆のかされ、片端より田畑を質入れといたし皆これを遊興費に蕩盡して終ひましたので、殆んど



收入の道といふものが無いので御座います、
　よしんば寺子屋を致して見ました所が、此節のやうに月謝が取れるでも無く、また授業料が入るでも御座いませんから、その苦しさと申したら實に必死で御座います、併し一旦生家を出で、此家の閾を跨いで入つたからには、即ち
　此家は吾が死場所
であると存じまして、何んとか家政を回復いたしたいものだと存じましたが、何分是まで親の許にのみ居りましたのみならず、昔武士の家は只氣位ばかり高くいたして、他の方々とお附合を致しませんから、頓と世渡りの途とか、又は口過ぎの方などゝいふものゝ事は心得ませんので、特り胸の中で考を廻らして見ましたものゝ、偖好い工夫も附きません、と申して此儘では自分等の生命にも關はると申すのは、實にお耻かしい次第で御座いますけれども、その頃五十錢のお米を買ふ事が出來ないので、止むを得ず十錢の挽割麥と十五錢のお米とを買ひ、さうして之を交ぜまして御飯に炊き、副食は生味噌か鹽に限つたので御座います、併し是とても長く續く譯では御座いませんので、何と致したものであらうかと、それのみ心配で、臥床へ入りましても眼を合はされないので御座います、斯うなると人間殊に女子ほど意氣地の無いものは御座いませんとは云ふものゝ、生命との掛合になりましては、また餘程智惠の出るもので、御承知の如く、前橋といふ地方は生糸の盛んに出來る處で御座いまして、却々女の稼ぎの激しいので、從つて收入も澤山あるので御座いますが、何分私は是まで絲といふものを挽いた事は御座いませんが、人樣の爲さる事であれば、自分とて滿足の身體を有つて居るからには出來ない事はあるまいと存じまして、近所の心易い御家内に御相談いたしますと、それは容易こと、遣るが宜いとの御勸めに基づきまして、早速御世話を願つて取り掛りますと、慣れぬ事は致し方の無いもので、何うも絲の目方の減れますので、思ふやうな賃錢が取れないのみならず、時

々御主人の家よりお小言を頂くといふ仕末、それに繭と申しますものは灰汁の強いもので、手は爛れて見る影も無いやうになるので御座います、去りながら何も辛抱が大事と、一二月我慢を致して遣りますと、稍これに慣れて參りましたが、この生絲の賃挽と申しますものは、實は眞夏三月位で盛りを過ぎますので、それより後は賃銀も易くなるので、時としては炭代にも當らぬといふ次第であります、然るに丁度私が折角慣れたと思ひますと、最早秋口になつて賃銀は下つて來る、繭を買ふには資本がなし、こゝに又一頓挫を來したのでございます、

けれども生活には休みが御座いませんので、何とか活路を求めねばならぬと苦心いたしましたが、矢張り好い處も浮びませんでしたが、不圖思ひ付きましたのは、丁度住家の後ろに三反歩ばかりの眞竹の藪が御座いますので、

あれを桑畑にと

思ひつきましたと云ふものは、今でもさうで御座いますが、殊にその頃は養蠶の開けます最中で、何處でも盛んに桑を仕立てるといふ事を聞き込みましたので、良人に向ひて之が開墾の事を勸めましたが、サテ之を開墾いたすに就ても、人手を借るにしても、之に對して拂ふべき賃錢の出場處が無いので御座いますから、如何とも仕方が無い、といふて此儘に捨て置くのは殘念であると存じまして、良人に授業の傍ら手傳ふやうに勸め、先づ

自分で手を下して遣ると決心

を致したので御座います、能く世間で、腹の中から乞食は無いと申しますやうに、大工といひ左官といひ、又は大臣參議さんでも、腹の中から極つて居るものでは御座いません、皆學んでなるので、縱ひ今日にしてもお百姓の家に生れたからと云つて、腹の中から鋤や鍬を持つ事を覺えて居るのでは御座いません、矢張大きく成るに從つて覺えるので御座います、それ故に私も是まで其等を手にした事は御座いませんけれども、一たびさう決心致しましてからは、

是非とも之を仕遂げたいと存じましたもの丶、サテその開墾に要する道具を求める事が出來ませんので、是また大に當惑致しましたが、兎に角先方に一つの望みが立ちましたので、平生最も昵近に致して往來する所の御家内に縋りて若干の金を拜借し、之にて道具を整へ、明日とも云はず、

其日より開墾に着手いたし、竹を剪り枝を拂ひ、次で片端より土を起し、竹の根を掘り、丁度半歳ほど掛りまして之を開墾いたし、前に剪り取りたる竹や枝を賣りて桑樹の苗を求め來り、その途の方に樣子を伺つて之を植付けましたが、苗木の事でありますから、その歳と又その翌歳とは尙だ之を金に易へることは出來ないので、漸く三年目より幾らかの收入を見ることが出來るやうになりましたが、サテ此岸に達しますまでの生活の困難といふものは、今考へましても克く遣つて來たと思ひます、兎に角これで少しは每年の收入も見込が立ちましたとは云ふもの丶、この桑と申しますものは、チヨツト相場のやうなもので、肥料を入れ手數をかけて一生懸命に培養いたしましても、その年の養蠶の模樣で、殆んど一文にも成らないと云ふ事があるので御座います、ソコデ若しもさういふ事があつても、全然無駄骨のないやう、一は所得を見たいと云ふ考へから、每年少しづつの養蠶をいたし、その取れた繭は自分で生絲に製して市るといふ工合に致しましたので、辛うじて三度の御飯も樂に戴けるやうになりますと、間も無くソコヒと申す眼病に罹りましたので、最早これで芽が止まるのかと思ひまするると、坐ろに心悲しくて堪らないので御座います、併し手の届くだけはと存じ、神や佛に祈誓を致して、傍ら御醫者樣にも掛りましたが、何分驗が見えませんので落膽して居りますと、神佛の御導きか、八里ほど隔りました處に名醫があるとの人の知らせに、早速良人に伴はれて參りますと、僅か四五日經ちますと、茫乎と物の形が見え、三週間で全然癒りましたが、その時の喜びは御察し下さい、

少し話が後へ戻りますが、私が此家へ嫁しました時は、良人も隨分亂暴で、遊興費の爲に所々の雨戸までも賣つて了つたといふ貧乏な有様でありますから、盜賊は自由勝手に入り次第といふ風で、實に險呑な譯で、尤も這入りましても別に盜られるやうなものは無いので御座いますが、それでも夜分に戸締りが無く、家の周圍が障子一重といふのでは不安心なもので御座います、けれども糊口に急がしいので、却々雨戸までは手が屆きません、漸く嫁しましてから七年目で雨戸を入れました始末で御座います、之に就て一つの御笑ひ話が御座います、丁度令息が四歳の秋、煎餅一枚では少しお寒いといふ頃、一夜二人の盜賊が這入りましたので、家の締りが御覽のやうであるから、別に蓄へとても無いが、之は日頃丹精して貯めたものであると申して

天保錢の二差

を出しますと、賊も戸締りの無いのに呆れたものか、但しは令息の寢顔を見て、坐ろに自分等の子供の事でも思ひ出したものか、之は坊にやると申して其一差を置いて參つたので御座います、此く貧苦の中からも、何うか忰は一人前の者に仕立てたいと存じまして、初め小學校から夫々の學校へ入れまして、辛つと卒業させましたが、令息が小中學の時代の苦しさと申しましたら、それは〳〵お話より酷い位のもので御座います、自分の田畑はありながら、年貢一つ見る事が出來ないのみならず、之が利子は拂はなければならぬといひ、それより急は日々の糊口は凌いで出なければならぬといひ、斯んな艱苦は復とあるまいと存じますが、諺にも、身を棄てこそ浮ぶ瀬もあれとか申すやうに、人間は

何事でも決心が大切

で御座います、私などは前にも申上げます通り、舊弊時代の人間で、僅かに女大學位を教はりましたのみで、別に學問の道といふものも心得ませんが、此世の中を渉つて參りますには決心一つで御座います、若しも私が前に腰折れを致しますれば、その田

地田畑を取戻すことも叶ひませんばかりでは無い、恐らくは今頃自分の死場所に魔誤ついて居らなければなるまいと存じます、お陰で今では若い者の世話にも成ることが出來て、斯んな嬉しい事は御座いません、之と申すも一は天子様の御恩と、今一つは先祖代々の御惠みに由ることでおらうと思つて、朝夕御禮を申して居ります、頓だ貧乏話をいたしまして御聞き苦しう御座いましてせう、何うかそこは老媼の囈語と御免しを願ひます、

附記す、鏡子女史は、躬良人に事へて貞、子に對して慈なることは、以上女史が實話によりて知り得る所なれども、尚ほ其隱れたる一二の美德偉行を聞くに、女史が尚ほその鄕里に在りし時、一夜盜人二名刀を擧げて入り來る、此時女史は後片付けのため庖厨にありけるが、肅然として毫しも迫らず、應答頗ぶる嚴格明晰なりしかば、盜人大に驚き堂に上らんとして進まず、此に於て女史は徐ろに數金を持ち來りて之に與へ、且つ諄々として

人道を說きしかば、盜人みな首を伏して去りたりと云ふ、以て女史が性行の一斑を知るべし、女史は又下に對して頗る慈愛に富むが故に、家庭に仕ふる奴婢は勿論、日々出入する所の傭人等に至るまで、恰も赤子の慈母を慕ふが如く、僅も女史の姿の見えざる時は、爭うて跡を尋ね行き、その影を認むるや嘻々たりしと云ふ、斯は女史自から語らざりしが、坐に女史と舊交の一女性ありて、予の爲に親しく物語られしを以て、此に附記して人の美を濟さんと欲するのみ(杳丘)

家庭の勘定日

森　直　勝

家庭の勘定日と世間の勘完日といつて、別に是ぞで法律で規定せられてあるでも無ければ、また誰が拵へて置いたでも無いから、今こゝに家庭の勘定日などゝいふ標題を掲げたならば、定めし諸孃は訝し

く思はるゝでありませう、けれども之は家庭の經濟上甚だ大切なことであるから、自分が氣の附いた事の一つ二つをお話して見やうと思ふ、

この勘定日といふてとに付ては、前陳の如く別に規定はないが、先づ我國今日までの慣例に依れば、最も悠長なのが年に二回、即ち盆と暮、方今の七月と十二月の兩度に總勘定をするのである、併し今日では餘り多くないが、地方は商賣の慣例で今尚ほ行つて居るのもある、それから是も商賣や地方の習慣によるのであるが、四月勘定三月勘定若くは二月勘定といふやうに、四月勘定なれば一年に三回、三月勘定なれば年に四回、二月勘定となれば年に六回となるのである、けれども現今我國に於て最も廣く行はるゝものは一月勘定といつて、



毎月の末に勘定することが慣用せられて居る、尤も商家などでは、その日その日の收支を其晩に小計算して記帳するのであるが、各顧客に對するものは、大抵その月の末に至つて勘定書を出して精算するのである、商家などは其で宜からう、また左樣しなくては括りが附かないかも知れない、左れば彼の銀行や會社などでは上半期、下半期と稱して、

年に二回大決算をするけれども、家庭の勘定は成るべく速かに爲る方が宜いと思ふのである、何故なれば、兎角物といふものは日柄が經つと忘れまいと思つても忘れ勝のもので、一つでも半分でも忘れては精算が合はない、その勘定が合はなければ何も役に立たないのみならず、家庭の事は些細ながら日々のことであつて、誠に眼に見えないやうな買物でも、

塵も積れば山とやら

何時とは無しに支拂ひが嵩むのであるが、それが勘定と勘定との時日が長いと、知らぬ間に(何も知らぬ譯ではないが)積らせて了つて、サア月末に至つて喫驚するのである、然るに之が時日を短縮して置けば、是から此間に幾ら〳〵掛つたといふ事を一目瞭然と知るばかりでは無く、もし其中に止むを得ざる臨時の支出があるならば、其を除きたる殘り部分は、前月に比して若干の増減があつたかといふ事までを知り、若し支出が多ければ今月は注意して支出を節するの參考とも爲るのであるが、もし之を二月乃至半歳といふやうな長日月に渡ること〻すると、その間に取返しの附かないやうな穴を開けること〻なるのであるから、成るべくは時日を短縮する方が善いので、それには歐米の風に慣つて

一週間を程度とする

ことが善いやうに思はれる、之に就きては時間の觀念に富み、規律を守るに忠實なる歐米人の家庭にては、如何にその一週間を處理するかといふ事を左に掲げて參考に供するから、賢明なる諸姉は宜しく之を取捨せらる〻が良い、

實は日曜日から書くのが順序であるが、知らる〻通り日曜日は、宗敎上の關係からとは云へ、彼等が安息日と稱するが如く休憩の日であるから、便宜上之を後に廻して月曜日から說くこと〻する、

「月曜日」この日は室内の掃除を終つてから、窓や扉の硝子を拭く日である、この硝子拭は一週に二度する家庭と、一度だけの家庭とあるが、その方法は、アルコールを布片に浸し、最初これで裏表を

擦り、次に乾きたる布巾で十分に拭ひ去つて、少しも斑や曇のないやうにする、これと靴磨とは婢僕の役で、主婦はまた前日即ち安息日に外出した家内中の晴衣を整理するのである、

「火曜日」遠國の友や旅先の知己に送るべき書信を認め、主婦は午後から最も親しい友や、此日面會日と定められたる知人の許を訪問に出掛ける、その他には日記以外の記簿を整理するので、庖廚の必要品や食料の不足な物を買ひ調へるには、此日の午前中に主婦まで申し出でねばならぬのである、

「水曜日」寢具の上被を取換る日である、元來寢具は、各自に起床の際裏返して其温みを冷し、雇人等は自ら整理しなければならぬが、その他は主婦が一切を整理するので毎週此日に、其上被を取換へ、垢染みぬ中に洗濯屋へ廻して清潔にさせる、時に、自分の家で婢僕などに洗濯させる向もないでは無い、倘ほ主婦は午後から、小供の學業成蹟を見るため、學校や保姆、家庭敎師などから習つたことを目の前で復習させる、音樂敎師を雇つて居る家庭では、大抵この日に或時間を定めて其稽古をするのである、

「木曜日」この日を面會日と定めて、訪問者に應接する、そして最も親しい人々を晩餐に招き、或はオペラや音樂會に同伴し、倘ほ大抵は此日を撰んで舞蹈の會を開く、隨つて室内や卓子、椅子などの整理は、前日より此日の午前中にかけて、婢僕の最も注意して仕なければならぬ仕事である、

「金曜日」室内の掃除を終り、塵埃の靜つたころ、鹽水で雜巾を絞つて絨氈を拭き淸める、斯うすると汚れた絨氈も一見新らしいもの丶やうに、模樣まで鮮かに見えて誠に心地の善いものである、主婦は此日良人の書齋を掃除する役目で、却々忙しいのである、

「土曜日」この日主婦は、洗濯屋が持つて來た衣類その他に目を通し、釦の離れかゝつたのや、既に取れて糸ばかりなるを繕ひ、また明日の日曜を休む

ために必要な仕事をそれ〴〵整理し、パンも燒いて置けば、菓子も拵へて置く、尚ほ洗ひ物は深い籠に入れて、洗濯屋が取りに來れば直ぐに渡せるやうにして、玄關と臺所の掃除は別して丁寧にして置く、今日も小買物を落ちなくして置いて、主婦は雇人等の給料を初め、その他の勘定までを濟ませ、且つ日曜日の朝までは差支へのないやうに萬事の用意をして、平日よりは一時間位遲寢く室に入るのである、

『日曜日』例日よりは僅か一時間程も遲く朝餐を始め畢つて家族の祈禱と聖書の研究がある、これは主人の勤務で、最後の主の祈りだけを家族一同で唱和し、それから教會に行つて、讃美歌を唄ひ、說教を聽いて來る、そして午餐はディンナーであるから、午前中は外出を許されぬが、午後から夜にかけては、主人も雇人もなく、上下を通じて皆が自由の身體で、隨意の行動を取るのである、

まづ一週間の日課は大約此くの如くであるが、こゝに面白きは、その日課以外に、冬季煖爐を用うる時になると、之に焚く薪は、毎日運動のために主人が自ら割るので、焚付の外は雇人等に薪割りはさせぬ、而して主婦は毎土曜日に婢僕を連れて、次の週間に要する食料品の買入れに市場へ出掛けるのみならず、日常三食の献立は勿論、招待日の御馳走などは、毎週主婦自らこれを取り定めて、月曜日の朝か或は土曜日の夜、傭人等に示して置く、とまづ斯ういふ風に凡てを裁り盛りして置くのであるから、決して其場になつて魔誤つくといふやうな事はない、この中には大いに吾人の學ぶべき點が少なくないと思はれる、殊に召使ひの給料から、家庭日々の支拂に至るまで、此く一週間ごとに爲るといふ事は、最も善い事と考へる、

前にもチョット云つたが、どうも日數を經るといふと、忘れまいと思つても忘れる事がある、然るに斯く一週間ごとに爲る事になれば、少し位忘れた事でも直ぐに考へ出されるものである、且つ一週間で

とに勘定を爲るといふ事になれば、之が收支を精算するにも手間が取れぬ、即ち時間上の經濟となるのであるから、一家の主宰たる婦人は、若し初め一週間ごとで五月蠅かつたならば、せめては十日ごと位、即ち月に三回位として實行せられたいものである、

赤點

小原保

人間の思想といふものは、個人社會の差別なく不易のものではない、進歩か退歩かの方向に常に移動して居る、時代に因つて異る、土地に因つて變化して居る、四圍の情况に因つて差別があつて一致せぬ事がある、而して新舊思想の衝突は常に絶ゆる時がない、殊に文明の過渡時代に在つては、斯の紛擾が激甚を極めて居る、一面から見れば、世の紛爭の大半は思想の衝突の種々なる變形であつて、大なるものは革命となり、内亂となり、個人間にありて微々として人の耳目に觸れざるものに至つては、文明の進歩に伴つて益々複雜となる、親子の爭、嫁姑の不和も斯の衝突の半面と見て可なるものである、で之を分析論議するも、あまり趣味の無いことであるから、英國の文學者イスラヰル、ザングウエル、の著赤點の概要を紹介しやうと思ふ、家庭と學校との思想の衝突が其犧牲となつた少女を、如何に若しめたか、文盲の婦女子と新文明との衝突に際して、其少女が如何なることを爲したるかを述べたものである、

去る年の冬であつた、丁度過般の東京に於けるが如く痘瘡の流行猖獗を極めた際に、倫敦市の猶太人區に趣味のある逸話があつたことを通信者は注意しなかつたが、事件の起つた學校に取つては重大な事件で、未だ記臆に殘つて居る、而して又この事件の花形役者が盃石はね子といふ十二歳になる可憐の少女

であつたといふことを知る者が甚だ稀である、
　話が溯るが、はね子の境遇から述べなければ面白味がないと思ふ、元來盆石氏といふのは獨逸の族姓であるから、其祖先は大陸から移住した猶太族である、ではね子といふ變挺な名も獨逸でははな子といふのゝ訛であるが、當時の倫敦と雖も下町あたりの小學の先生になど外國語に精通した人物に乏しいので、學校の帳簿などは皆はね子で通つて居る、加之はね子は十二才にもなつて、此民族の特徴たる目の廻りの黑輪が猶ほ殘存して居るといつた樣な陰氣な娘であるから、今更この娘の名は艶麗な花と關係を有するなど、先生達の外國語素養の詮議立てして餘計な罪つくりは無くもがなである、とは言ふものゝはね子とて憎氣の無い娘である、大きな眼は愛くるしく、いかにも從順な性質を持つて居る、是に拘らず舊思想の母親は、何故か末子に愛情が薄く、一概にはね子を學校へ里子にやつた樣にのみ思つて常につらく當る、

「妾等の若い時は一に信神、二に兩親、學校などは三番目であつたのに、今じや何も彼も逆になつて、一に赤點、兩親などは末の末で、神樣などは度外視だよ、しようがない、赤點が何が有りがたいんだよ、」
といふのが盆石夫人の口癖である、學校の慣例として赤點は生徒の精勤證として出席簿に記るされる、朝の九時を一分でも遲れたが最後、無慘や黑點がつけられる、十時二十分前迄に出席せぬと容捨なく缺席となる、はね子の組でこれを司るのは、血色の惡い眼鏡の授業生であつて、
　赤點と共にはね子が心配の種子となり、母親が苦情の源となつたのは、學校に備付けてある旗であつた、盆石夫人は是の二者を思ひ起す毎に
「赤點と旗ばつかりだ、賞牌も賞與も何も出しやしない、けちな學校！、」
とつぶやく、
　斯の旗は新機軸である、盆石夫人の若い頃は勿論他家に婚嫁したはね子の兄姉たちの時代にも揭げら

れた事が無かつたのだ、夫人は兵助も、お樂も、武二も、辯三、お愛、お吉も何れも同じ學校に上つて學者になつて賞與をいたゞいて、しかも信神深く、赤點だの、旗だのといふ狂氣染たものに關係しなかつたとこぼして居る、

盆石夫人の心中では漠然ながら、斯る不都合極まる新制度は、新來の外國人が學校内にまで侵入して來た結果と信じて居る、夫人は自らの家族を善良なる舊家と誇つて居るから、英國の舊家風は大陸を放逐されて浮浪して來る露西亜、波蘭、羅馬尼亞あたりの未開の猶太遊民のために壓服されるのであるといふ風な、守舊攘夷的な思想を以つて居る、米國だつたら學童排斥の急先鋒となるべき婦人であるのだ



英國人民には旗や赤點など玩具じみた小兒らしいものが、何の要があるか、夫人は自分が立派な英國民であると思つて居る、

然し北斯の旗たるや、學校内に在つては精勵勤勉の優勝旗である、其性質を分析して見れば、全級の赤點が凝りて以てこの紫紅色地の旗と成るのである、即ち一週間の赤點の總數優秀なる組が、翌週中この旗の赫灼たる名譽を擔ふの光榮を有するのだ、旗は敎室の樫匡絹地に彩色濃厚な、しかも鐵棕色に

煤ぼけた地圖の掛かつて居る壁上に吊される、一度この旗が掲げらるれば、其級の意氣浩然として活氣を生じ、課業の勵みも亦格別である、宛かも疲勞し果てたる軍隊が勇壯なる軍樂につれて、軍規を恢復するの觀がある、又この榮譽を保持せんがために、一種の敵愾心が起つて、遲刻しまい、欠席しまいと稚き少女達の神經を緊張せしむること非常なものである、然し不運にして遲刻欠席多くして、他の勇猛にして、幸福なる級に奪取せらるゝ樣なことが有れば、失望の極陰冷虛然たる教室の戶口を出でゝ、悄然たる目に見送らるゝ有樣宛として先日の金色燦爛たる紫紅旗が、一朝にして葬旗と變じたるかとも怪しまれる、故にこの旗の維持を危うする樣な、遲刻者こそ憫然なものである、暗然として教室に入る時多數の少女等の前額を蔽ふ嫌惡の雲に比較せば、出席簿上の黑點などは猶ほ羽毛の輕きである、況んや缺席者に至つては、顰蹙の中心となる恐ろしさに、却つて其期間を永からしむる事珍らしくない、甞て一度はね子の組が優勝旗獲得の名譽を得たのは、勤勉の結果といはんよりも、寧ろ他級の生徒の多數を遲刻せしめたる倫敦名物の一に數へらるゝ、濃厚なる黃霧の庇護といつてもよいのであつた、

はね子には常に黑點が附き纏つて居る、宛も半欄中の惡者黑半といふ有樣、それで目の周圍の黑輪が具體的の黑點であるほどの病身らしい娘であるから見る目もいたいたしいほど、自分の怠慢を心に悔んで居る、然し彼女の境遇を察すれば憫憐なもので、彼女が學校に對して怠慢な時は、一方に於て勞働の德を行つて居るのである、はね子の席の空虛なる時他の懶惰な生徒のやうに遊んで居るのでは無い、彼女の母親が學校の課業以上に重要であると認めてゐる家事に使役せられて居るのである、若しも彼女が大人であつたら、盤石家の家憲は一に家事、二に工場、教育などは例外であるかと不平の反問を發したかも知れない、實に家庭に於けるはね子は雜用婦である、臺所の調理、洗濯掃除さては階上の工場にて

職人に病氣欠勤の者があつたり、多忙を極めたりする事あれば、學校時間と否とに頓着なく、洋服の釦孔製作に使はれる、可愛相に家業の役婦となり、裁縫店へ品物の運搬婦ともなり、母親が取引上は勿論物見遊山に他出する毎に、留守番を仰せつかる、涙を以て歎願しても、番犬の役を免れる事が出來ない「お前などは阿母さんの寶石が盜まれてもよい、學校の旗の方が大切だと思つて居るのだらう、不心得者め。」など丶云ひ殘して出て行く、

而已ならず、盆石夫人は絶えず新らしき孫兒を得る、其度毎にはね子には目の廻る多忙が伴つて來る左の如き簡單な端書が來ては、彼女を困らせる、

　男子出生、はね子御遣はし被下度願上候
　　なつかしき御母上樣　　　武二拜

あはれ松子は落命仕り候、傷心せるお吉のためにはね子御遣はしのほど願上參らせ候、
　　母上樣御許に　　　從順なる娘より

又時として

　はね子至急御歸し被下度候　　　母より
　　お吉との

などいふのが此方から飛ぶこともある、其上にもはね子の責任を數へたならまだ〳〵ある、總領の兄の子なる藤造の監督である、遊戲、散歩以外にも、曾て狡猾にも希伯來語で印刷した廣告に誘惑せられて異宗の、而も區内にては蛇蝎の如く憎惡せられて居る、メシモデムなる團體の夜學校に行つた事が知れたので、家族は藤造をば獅子の口を逃れたる小羊と思つて、其復讐を恐るゝあまり、牧犬の役目がはね子の頭上に落下して來た、

如此百事多端なる際にも、彼女は家事をば成べく夜間にして、晝間は學校に上らんと務めて居る、從順なるはね子は、時に或は辨疏こそすれ、母親に反抗する事などはなく、却つて女といふ者は生き身を二つにしても家事には盡さなければならぬと感じて居る、然し少女の身に取つて、學校と家事の兩方面を完全にやるといふのは非常なる難事業と言はね

ばならぬ、學校の課業の豫習のためには、夜も他の家人の寢後にやらなければならぬ、朝は朝とて勝手向の仕事が山程ある、赤點を得る爲には車輪に立廻つても及ばぬとがある、時として朝飯の食卓に就くに、九時に十分前位なことがあつて、母親が掬んでくれる熱茶が如何に彼女を困らしたかは想像以外であると思ふ、目をかすめては流し下にすべつて、茶椀の半分丈け冷水と交換して來るといふ苦しい手品をやるをも屢で、若しこの權謀が不可能なれば、湯傷を忍ばねばならぬ、かくて猶ほ學校道具の小嚢を抱えて雨雪を突き、濃霧日光を冒して馳け付けるのが大抵では無い、而して赤點に遲れて胸つまらせることも往々で、全級の忿怒の眼光に畏縮する時は心臟が針で縫はるゝ思ひである、然し如此時間には、不正確なるに拘らず、未だ優等賞こそ得ないが彼女の成績常に佳良であるのが、却つて仇となつて級中の嫉視の中心となつた、

暫くして盤石家にしては、未曾有に靜穏無爲なる時が到來した、自然はね子は登校も正確になつて、再び彼の赫灼たる優勝旗が乾燥なる室内に燦然として光輪を放たんかと思はれた、然るに不思議な障害が惹起して、希望をば水泡に歸せしめたといふのは、前週の末に他に轉校した一少女が、木曜日に至つて復校して來たことである、全級の生徒が一聲に

「先生入れてはいけません

と叫喚する、はね子さへ、

「品子さんお歸りよ！

と斷乎として勸告したのである、少女等は品子の休校期間を缺席と見做されんことを惧れたのであるがそれが現實となつて、品子が赤點總數の六個を減じた爲に、不幸なる哉優勝旗は他級のものとなつた、然れ共一度敵壘に肉迫したる勇氣は、新たなる希望と興奮を與へ再び次週の木曜日が回り來つて、彼等を淹悶がらしめた、今度の障碍は以前に増して慘酷なものであつた、丁度其日ははね子も何れも擧つて赤點に合格したので、少さき胸がほつと安心した刹

那、神聖なる平和は盆石夫人に因つて破られた、授業中の教師を無視して、突如として無遠慮に現はれた夫人は、芝居がゝつた指示しをして、娘の名を呼んだ、時に、はね子の顏は衆目の燒點となつて、一個の大なる赤點と變じた、羞耻と苦痛との涙が、目の黒輪を溢れて輝いた、若しも彼女が連れ戻られて猶ほ二時間の授業を受けなければ、彼女の今日の出席が消滅する恐れがある、全級の膝衣少女等囂然として沸騰したけれ共、教師の

「靜穩になさい

といふ命令の下に靜まり返つた、はね子も亦其席に畏まつて居ると又

「はね子！お前は髻を取つて引張られなければ承知せんのかい」

と遊んで居る兒でも叱るやうに呼び出したので、教師も最早腹にすゑ兼ねて、無斷で教室に入る事の無禮を淑やかにたしなめてやつたら、それが却つて盆石夫人をして益々傍若無人にいきまかせたに過ぎなかつた、

「ハイ、はね子は今日家を逃げ出して來たので御座いますよ、先生貴女も他人の兒を預かつていらつしやるなら、ちッとは妾等の家のことも考へていたゞかなきやしようが無いじやありませんか、妾等は皆昨夜親戚に婚禮がありましたのでね、音樂だ踊だで疲れきつて歸つたのが、今朝の四時じやありませんか、ですからはね子が居なくなつちや家の始末がつきやしませんのですよ、僞と思召すなら、まあ妾の家に來て御らんなさいまし、辨三も寢て居ますよ、眠りが足りぬつてんですもの、一週十五圓も取るものが疲れて寢る位はあたりまいですわ、……さあはね子！、學校では親々に從へと教へてくれるのじやないかい？、

憐むべしはね子は漠然胸の中に兩親といふものは、是程までも其子を辱かしめ得るものかなど考へて、もう堪へられなくなつた、首垂れて無言で起つた戸口の方へ進んで、室外に出るや流なす涙に咽んだの

である、

斯樣なことのあつた後、其罰でもあるまいが母親が脛を挫折して數週間病床に呻吟せねばならぬ身となつた、其爲には學校では亦はね子の級は優勝旗獲得の希望が永久に封じ込れた觀を呈した、看護と家事とに追はれてはね子は登校の時を見出すことが出來ない、こんな難局は感動し易い少女をして、益々陰鬱に陷らしめ、日夜悄然として居て、身體が疲勞すると共に、神經が過敏になる、漸く睡眠すれば不祥な黑點の行列が目の前に現はれる、それが刻一刻と增大して角のある虫となつて身の周りを匍ひまはる、或時は黑い旗に身を捲かれて窒息するやうに思ふこともある舍監が恐ろしき刑罰を宣言しながら彷徨するのを見ることもある、小さい胸が張裂けぬのが不思議と言つてもよい、

漸くにして難關も通過して戀しい學校に身を免るゝの時が來た、如何許りか同級生が怒つて居るかと豫想して來たに拘はらず、安心した樣な大息のもれるのが聞えて意外に思つたも無理がない、兩極端は一致して彼女の缺席があまりに永かつたので、其顏を見た嬉しさに、非難の聲が却つて歡迎の聲と化したのである、はね子は亦後悔感奮して、再び優勝旗獲得の希望が少女等の胸中に閃めいた、然れども他の級とて劣らず精勵するので、第五級が殆んど一ケ月間執念くも之を持續したのであつた、

俄然として新奇にして憎惡すべき分子が此競爭に突入して來た、突如として區の東端に襲來した痘瘡が八方に蠶食の手を擴げたので、此際赤點も黑點も賞牌も賞與も一の富鬮に過ぎぬものとなつた、茲に至つて第五級の名譽も忽ちにして地に落ちねばならぬかもしれぬ、或少女は感染のため、或者は恐惶せる兩親の抑止に遇ひ、全校騷然として大地震の襲來の如き有樣なる間に、はね子の級のみは凜然たる決心に感奮したのでもあるか、一人の落伍もなく、步武整然として他に超絕して居つた、

一方に流行益猖獗を極め、猶太區の回敎會堂にては特別なる加持を開始するといふ有樣である、

（未完）

料理及製菓の實驗談

富田豐春

花見もち

もち米の粉百目、白砂糖百目、山芋の皮を剝ぎて八十目の割合にて、まづ芋の皮を剝ぎ、目方を極め大根卸にておろし擂盆にて能くすり、砂糖を加へて尙よくすり、もち米の粉を入て煉り、之を二分に割け、各紅と、綠色とに色付け、それを白木綿の布を敷いて蒸籠の中へ流し込み、箸にてかき廻し、二色を適宜の模樣におし、凡四十分間程蒸して、細き團子の串やうな物にて突きさし、蒸け加減を試驗し、串にねばり氣のつかぬなれば、それで出來上り、蒸籠より出し、冷まして庖丁すべし、

鯨もち

米の粉壹升、白砂糖二合、小豆餡壹升、葛粉二合の分量で、蒸すのであるが、先づ第一に小豆を煮て普通の餡を製す、甘味の强さは惡しく、さつぱりした風味にすべし、尤も白砂糖を用ゆべし、右の餡が出來上りたれば暫く冷し置き、葛粉を少量の水にて解し、前述の分量に餡と能まぜ合せ、別に前記の米の粉と、砂糖を少量の熱湯にて煉り、普通團子を製する位になし、蒸籠に白木綿の布を敷き、其中へ平らに入れ、前に拵へ置し餡を入れ尙平らにして、凡壹時間蒸すべし、出來上りたれば、蒸籠より取出し餡の方を上にして冷まし置き、適宜に庖丁す、

千鳥もち

米の粉五合、もち米粉五合、白砂糖六十目、水一合の割合にて能く煉り、蒸籠へ白木綿の布を敷き、其中へ平らになし、別に大角豆の皮の切ぬやうにゆで、砂糖にて煮、右を前の平らになしたる上へ、まばらに並べ、凡四十分位蒸すべし、冷して庖丁す、

なめもの

米麴壹枚、麥麴壹枚、大豆三合、水五合、鹽四合古生姜少量の割合、前記の大豆を一日間、五合の水に漬置き能く煮、生姜の皮を剝ぎ、細く切り、大豆

の湯汁にて、前の品々交せ合せ、瓶に漬込み、凡三十日經過なして食すべし、

簡易支那料理

しゆまい（茶菓子と酒の肴と兩用）

メリケン粉を水にて煉り、極薄くせんべい位に棒でのし、豚の赤肉ばかり庖丁で叩き、細くなし、前のせんべいの中へ少し入れて包み、メリケン粉の皮を、恰も花のやうにして、蒸籠で蒸す、食する時は醤油かソースで食すべし、



わんたん（雲呑）

前述の如くメリケン粉を水にて煉り、極く薄くのばし、巾一寸、長さ二寸位に切り、豚の肉を細く叩きたるを、眞中へ入れて、細長く包み、湯出て笊に揚げ、別にスープを拵へ置き、小形の丼へ十五位入れスープを入る

酢ぶた

豚の赤肉を蒸籠で蒸し、それを金串にさして、兩面を燒き、酢に浸し置き、引出して極く薄く庖丁す、

涙なき父母

梶山杳丘

昔からの諺にも、鬼の眼にも涙といふことのあるものを、去るにても世は澆季になりたりと云ふべきか、予は今こゝに斯涙なき父母の顛末を讀者の前に物語らんとするに方り、その亡き數に入りし愛兒のことに想ひ到れば、轉た筆端が鈍つて暗涙を拭ふに遑がないのである、

事の起りは咋明治四十年九月の一日、往來の途絶えた眞夜中の頃、本郷區は湯島に名高き天神の境内に、夏の夕べの涼み又は漫ろ歩きの人の足休めにと彼方此方に設けられたる、その裏手に方る共同椅子の上に、生れて僅か二ヶ月にも滿たない、花のやうな愛らしき可憐の嬰兒が捨てられてあつた、その側には二三の玩具と一二枚の衣類とを添へてあるのみか、水莖の跡鄙しからぬ

一本の添手紙

があつた、その手跡より推せば、そのかみ相當に中等以上の教育を享けた者であることは多く言ふまでもない、そは左の文言に依りても察せらるゝのである、即ち

神と仰がん御方に、此女子を安じて御願申上ます、博愛慈悲ふかきところにつながりて、幸ひに天命を全うすることが出來ますれば、親子の幸福之に過ることは御座いません、書んとすれば身はおのゝき心亂れて申上られません、あゝ我等は不幸の者、夫は病軀たよるべき處のない者、棄てざれば此身立たず、此身立たざれば斯の兒育たず何卒〳〵夫の宿痾本復の成るまで御救ひ給はれ妾が一生の御願ひ、神と仰ぎて此御願ひ致します病氣全治致し、養育料の用意成りますれば、何時なりとも、本名を申上、御貰ひに必ず〳〵參上致します心底、返す〳〵も妾の心中を愍察爲し給はれば、仕合限り御座いません、此女子は去月出生にて、名を一枝子と命じありますれば、何處まで

も此名を附し下さる樣、身體には一、二個處見覺えを定めてあります、又後日一枝子の母としておゝ、くり物など致した時は、よろしく御受取りなされて下さい、萬々一此の子病死等の事がありました節は、必ず／＼東京萬朝報にて死亡したとの事を記載して下され候樣、右かさね／＼わつかましき御願に候得共、血涙を呑んでの御願、幾重にも御同情垂れ給はんこそ、伏て御願ひ上ます、

次に、これは私の筆跡ですから、そへ置き下さい

一枝子の

母　拜

明治四十年九月一日

養育院御中

右は原文のまゝで、一字一句も改めたものではない之に由つて見るときは、斯の一枝子の母たる者は、その兩親が貴重の金錢と時間とを費して敎育を受けしめた事は、誰しも直ぐ合點の行くことであらうと思ふ、然るに其可憐なる嬰兒の母たる某女は、右の文中にもある如く、その連添うて杖とも柱とも賴む

べき良人が、長の病氣の爲め藥餌療養の代に追はれて、殆んど家産を蕩盡したかのやうに察せらるゝとは云ふものゝ、隨分廣い世間には、賴るべき親類縁者も無く、夫は長の病氣で足腰も起たず、その病苦を被うてやりたいにも煎餅蒲團一枚の外には何も無いといふ、實に聞くさへ酸鼻の極みなるに、搗てゝ加へて子女の三四人もあるといふ寒酸の境遇に沈んで居ても、尙ほよく藥餌看護に懈りなきのみか、その子女にまで哺んで行くといふ節婦の實例は、決して是まで尠なく無いのである、しかも斯の一枝子の母女某は、その嬰兒に命名の樣子から推しても、まだ澤山に小兒が有るとしも覺えぬに、餘りといへば其勝手の程も

棄てざれば此身立たず

とは、これ誰に向つて言ふ辭であらうか、定めし母女某は世の博愛慈悲の方々をさすのであらうが、去りとは世の博愛慈悲の方々こそ迷惑の次第と云はねばならぬ、所謂世の博愛家慈善家は、汝に向つて今

日の運命を強ひたものでは無い、その今日あるは汝が豫期したのであらう、縦ひ豫期しないまでも、天は斯の運命を汝の頭上に下して、汝が克巳心を試驗せらるゝのに、汝は遂に其試驗に落第して、延て世の博愛家又は慈善家を煩はすに至ッたのである、故に汝は血涙を呑んで云々と言ふけれども、恐らく其は某女の空涙と一般、否らざれば徒らに涙を催ほして世を欺くの猾女であらう、話は少しく横道へ外れたが、實に世の博愛慈善家と呼ばるゝ者も、此一枝子の母女某のやうな者が續出せられては、此上の迷惑は無からうと察せらるゝ必ず世の博愛慈善家は、敢て神と仰がれなくとも宜いから、此一枝子の兩親の如き涙なき者が出ないことを切に望まるゝことであらうと考へる、



併しこの可憐なる嬰兒に接して、その鬼の如き両

親を除くの外は、誰か之を見捨てゝ置きませうぞ、一枝子は幸ひにして慈愛深き神田今川小路の小笠原某なる紳士に發見せられ、それ〴〵の手續を經て東京養育院に收容せられ、同院では其手紙の如く一枝子と名づけ、姓は湯島の梅に因みて梅園とつけ、倘ほ哺乳中のことであるから、是を埼玉縣吉澤某方へ里子として養育のことを托したから、こゝに一枝子は危き一樣の生命を繋ぎ得ることゝなつたのである此く自分が腹を痛めない他人の子でも、乳を哺みて朝夕顔を見て笑を洩すやうになりましては、却々に捨て難いのが人情である、であるからして梅園一枝子の兩親も、その間日夜心の鬼の責苦に堪へなかつたものと見え、蔭ながら之を謝せんが爲に、昨年十二月十五日、綿入二枚と毛糸頭巾一個、外に二三の玩具を封じて之を小包郵便として東京養育院へ送りし時、更に左の手紙を添へて遣つたのである、文に曰く、

　御めぐみ深き御方々樣の手に養はるゝこと百有餘日、其間乳兒の御厄介が如何ばかりか寸時も思ひ忘られぬは、御高き心と御情けある方々樣の御恩と、一枝のゆく末で御座います、誠に天地容れざる罪を犯し、今更ら何とも申上られません、左りながら子を思ふ心の暗に迷ふ身は、何卒御推量給はれかし、就ては心ばかりの思ひ出に、妾が涙ながらに物せし、この古衣一重をさし送り申上ますれば、何卒〳〵御受取り被下度願上候、何れ時節參りますれば、かならず〳〵參りまする故、何卒〳〵それまでの御養育給はる樣、伏て御願ひ申上候かしこ、

　十二月十五日　　一枝の母より

東京市小石川養育院御中

との書狀で、その文中にもある如く、實に天地も容れざる大罪たることは、母女某も今更らながら自覺したのであるが、何故に斯の可憐なる一枝子を其手より離す瞬間に氣が附かなかつたらうか、若しも其時に此心が起ッたならば、暗々此くの如き大罪を犯

すまいものを、最早今となっては取返しは附かぬのみならず、そのいとし可愛の一枝子は、今春一月五日より脳病に罹りたれば、養育院に於ては種々醫療に手を盡したけれども、同月十二日敢なく永の眠に就たといふことで、萬朝報も名を指されて見れば後へも退けず、特に紙面を割愛して記載せられたが、今日に至るも尚ほ斯涙なき父母の蹤跡は判然しないけれども天網恢々早晩かは斯の罪を償ふの時機が到ることゝ察するが、母女某も嘸かし今に寝覺めの好くないことであらう、死して自巳の言ふ通り、既に天地も容れざる大罪を犯したのであるから、最早終生再びその天眞爛熳たる天使の

眠れるが如き童顔

に接して名殘りを惜むことも出來ないから、獨り其報を抱いて涙を灑ぐより外は無いのであるが、之と言ふも畢竟は精神の修養の至らぬに基くので、それで無くとも女子といふ者は、槪して意志の薄弱なる者であるにも拘はらず、時としては前後をも顧みずして前項の如き常軌を失した振舞に及ぶ事が尠なくないのであるから、常に克く不撓不屈の精神を養成するに勤めねばならぬ、

新式菓子製造法

梅田嬌菓

隱元餡

原料調合率△隱元漉粉一百匁△上等粗目糖五十五匁

先づ隱元豆を二合程水洗して鍋へ投て清水を三合注入れ、釜蓋を被せて七輪烈火に掛け暫時沸煮し、豆が上面へ浮揚りなば清水を少々加へて煮沸し吹上りなば火から下し別鉢へ笊を當て移しあげ煮汁を絞去り豆を以前の鍋へ戻し清水を三合注ぎ再び七輪火に掛けて煮沸し其吹上るを待つて下ろし前同樣笊にあけて煮汁を捨て鍋へ入れ前同樣の清水を加へ火に掛けて煮沸し今度沸騰して吹溢出る樣なりたれば稍火力

を減して弱徐と煮覆して充分柔かく崩れる樣にしてから、桶へ汲取入れ清水を少々づゝ加へて稍熱氣を冷し次に別鉢へ清水を三分の一位注ぎ入れ其上に毛篩子を當て前の煮豆汁を少々づゝ注ぎ入れては平手で能く擦潰し漉出し入れるやうにして豆汁を悉漉過して糟皮を取除け、漉液は能く沈澱せしめて上液を靜に流しわけ更に清水を仕換るやうにして三四回行ひ悪汁を充分取除けてから木綿袋へ漉汁を移し入れ袋口を寄せ合して確と麻緒で括り附け、壓搾器か兩手で袋端を確と握り締めて水氣を能く絞去り其漉粉一百匁に對し、粗目糖五十五匁加合する調合率を以て多少を論せず兩品の量方を計り先づ粗目糖の全額を銅鍋か琺瑯塗鍋へ投し漉粉を全部の半分程入れて七輪火に掛け杓子で間斷なく攪まはしつゝ煮溶かし雜と沸騰してから、殘額の砂糖を加へ尚一層注意して攪拌し鍋底へ燋着せしめぬ樣に絶えず煉交せ合して堅目に煮詰て程度を見計つて下ろし、乾いた鉢へ掬ひ取入れ熱氣を發散して後風通しの宜しい室內へ入れ貯へつゝお使ひなさい

注意隱元豆の漉粉は粘力強く夫れが爲め煉合して餡を拵らへる際は兎角鍋底へ燋着き易きもの故必ず油斷なく攪拌して煉煮るやうに心掛るべし、尚京阪にて隱元豆をとうろく豆と云ふ

隱元羊羹

原料調合率△白寒天一本△清水一合五勺ほど△上等粗目糖、七十匁△隱元餡一百八十匁

是は先づ乾物商で細長い白寒天一本求めて溫湯中へ投れ柔かく漬水膨し其含水を能く握り絞り、細かく千切つて琺瑯塗鍋へ投し清水を一合五勺注ぎこんで七輪烈火に掛け充分煮溶かし暫時沸騰せしめ其中へ上等粗目糖を七十匁入れ時々杓子で攪拌しつゝ糖塊を悉融解し其煮上がるを待つて下ろし別鉢へ毛篩子を當て煮汁を濾過し塵芥糟を取除け漉液を以前の鍋へ戻しわけて再び火に掛け、六七分時間煮沸してから隱元餡を一百八十匁入れ杓子で徐々と間斷なく攪まはし交せ鍋底へ燋着せしめぬやうに注意して煉混

せ合して濃く煮詰て程良い加減を掬ひ垂しつゝ見計りて火から下ろし直に深さ一寸横縦六寸位の漆塗重箱内を濡布で撫つけ濕して其中へ煉液を流しこみ風通しの宜しい平坦な場處へ半日間以上靜に列らべおいて充分冷し凝結して後其儘貯藏しつゝお用ゐの際は重箱の内縁に清水を少々注ぎ入れ濕し羹肌を離して平板上へ裏返して移し出し庖丁を濡布に撫つけ持づて幅一寸長さ二寸位づゝに押切にて斷ち離し其切口を斜に附合して菓子皿へ體裁よく盛列らべてお入れなさい

注意隱元餡の拵らへ法は前に述べてあります

隱元甘納豆

原料調合率△隱元豆五合△上等粗目糖二百五十匁△清水一合二勺、別に白砂糖五十匁

是は先づ乾物商で良質の白隱元豆を五合求めて水洗ひしてお釜か土鍋類の如き厚き鍋へ投れ清水を六七合注ぎこんで上蓋を被せ炭火か燃火か何れにても火に當て煮沸し豆が上へ浮上がりなば更に清水三杯程入れて蓋を載せて煮沸し吹上がりなば笊に汲出して煮汁を去りて以前のお釜へ戻し入れ更に清水七合ほど注ぎこんで釜蓋を載せて煮沸し今度吹覆れるやうに沸騰したれば稍火力を減らして弱徐と茹覆し豆腹の亀裂せぬやうに注意して柔かく程良く煮やして笊へ掬ひ揚げ煮汁を流し去り尙其煮豆上から冷水を三四杯注ぎかけて熱氣を冷し置き次に前に書いてある分量の上等粗目糖二百五十匁と清水一合二勺とを注ぎこんで七輪烈火に掛け時々杓子で攪拌しつゝ糖塊を融解し暫時煮沸し稍濃く煮詰て其中へ煮豆を入れ杓子で攪拌しつゝ熱して豆の體内に吸收する水氣を吐出さしめて下ろし別鉢へ笊を當て注ぎわけ豆と煮汁を別々に切離して其水ばかりを以前の鍋へ戻しあけて火に掛け、十五分時間內外沸騰せしめ煮蜜の泡沫が細かく整つて吹上がるやうに濃く煮詰りなば再び豆を入れて間斷なく掻きまはしつゝ寸緒煮沸して下ろし、其儘一兩日間蜜漬し置き能く豆内に蜜を吸收らしめて後、其鍋を七輪火に掛け、萬遍な

く杓子で攪拌しつゝ雜と熱して下ろし例の如く別鉢へ笊を當て移しあけ煮蜜と豆を分離して蜜ばかりを以前の鍋へ戻し入れ、火に載せて暫時煮沸し稍濃く煮詰てから分離した豆を投れ杓子で攪拌しつゝ雜と煮立て下ろし前同樣笊にあげ、煮蜜絞取つて再び鍋へ戻し、七輪火にて稍沸騰せしめ煮蜜の泡粒が細かく整つて吹上がるやうに濃く煮詰まりなば試みに煮蜜を少許掬ひ取り水中に浸し見計り、忽ちピンと堅く冷め凝集る位の加減に煮詰て其中へ豆を入れ攪拌しつゝ雜と熱して下ろし前同樣笊にあげて



煮蜜を絞り、更に塊ない白砂糖五十匁を鉢中へ入れ其砂糖内へ豆を投れ、杓子にて徐と攪拌しながら周圍に萬遍なく糖衣を滲しつけ、暫時風に曝し充分熱氣を發散し乾かし少も濕氣のない硝子壜中へ移しあけ蓋を被ぶせ冷やかな室内へ入れ貯へつゝお用ゐなさい

注意隱元煮豆は水中へ投れ餘り烈火で煮過したり又杓子で間斷なく搔まはしつゝ熱するやうにせぬと豆、、しまり石の如く堅くなり、咀嚼の出來ぬやうにまります



佐々木信綱先生選

藤

天

相模　渡邊君代子

雨細き山下堤行く傘に
　ふれてこぼるゝ白藤の花

（評）つくりかざらざる自然の妙ありてこたびの中の白眉

地

美濃　多田琴代子

花瓶に白藤さしてまつ宵に
　君はきまさず細き雨ふる

（評）春の雨の音もさびしかるべし

人

常陸　岡田萬子

岩燕ぬれて飛びかふ大瀧の
　崖にかゝれる藤なみの花

（評）上句よし四句は今すこしと思へど

秀逸

東京　鵜澤菫子

美くしう孔雀の鳥屋に藤の花
　こぼるゝ夕君思ふかな

美濃　杉山靜子

藤浪の花にふる雨むらさきの
　雫にぬれてつはくらめ飛ふ

東京　奈良八重子

そり橋を渡る人なくほろ〱と
　藤の花ちる薄月夜哉

岩代　岸野菊子

池殿や小簾まき上る緋の袖に
　散りこそかゝれ白藤の花

千葉　益子操子

山門のかたへの小屋のくさぶきを
おほひてさきぬ白藤の花

相模　藤原下枝子

落たぎつ岩にあたりて雨とふる
しぶきにゆらぐ藤波の花

横須賀　高橋つね子

谷一つへたてゝ白とむらさきの
藤の花さく雨の中かな

東京　秋田登志子

水面吹く風暖に六尺の
緋鯉おどりて藤の花散る

横須賀　柏原みな子

池の面に浮む緋鯉に姉妹
麩を投げてやる藤棚の下

横須賀　渡邊比佐子

藤の花こぼるゝ雨の夕ぐれを
濡れてつきたる母の文かな

秋田　長谷川薫子

藤の花うつろふ池の水の上に
みえかくれしてひごひ遊へる

美濃　多田瑞枝子

藤なみの花に匂へるむらさきの
み衣もゆらぐ行春の風

美濃　多田さとる子

紫のしづくしたゝる藤なみの
花のこかげの朝心地よき

近江　石王かづ子

たそかれや山路をいそぐ茶つみ子の
籠にうつくしき藤の花房

埼玉　香取うめ子

捨床几藤咲く庭の其所此所に
茶などもてくる人美しき

飛驒　南みね子

鳩の啼く宮居のほとり春更けて

藤の花房長く地にたる

清國 福田つる子

ほろ〳〵藤の花散る奥庭の
み池の浪に灯うつくしき

石見 山根直子

藤棚の下の小池に麩をなぐる
少女の袖に花びらのちる

東京 能村けい子

ましろなる少女のぬかにかゝりけり
紫匂ふふぢなみの花

甲

朧月にしのひ車のよろ見えて藤の花ふるあれ住居かな ○ 東京 平塚白百合子

むらさきの雲かと見れば夏山の松にかゝれる藤波の花 ○ 攝津 磯村直子

朝明の露のいろにもまがふかないけの藤波さけるこのごろ ○ 名古屋 不破きみ子

枯ちはてしやかたの門に白藤のさひしうゆれぬ雨の夕を ○ 下野 井上菊子

舟のたびふとのりあひし繪たくみの少女とめてぬ藤なみの花 ○ 美濃 芳翠敏子

御獵場の小鮎淺瀬をゆきかひて岸べ美くしふち浪の花 ○ 岐阜 饒島游子

姉がちさちきこはな摘ひけりかざゝ藤の房ながうして ○ 神奈川 飯田白露子

水あまるつゝ井のもとの松が枝に色もすゝしく藤咲きにけり ○ 東京 諏訪花子

しら藤に銀の雨ふる朝川に君と別れし日を思ふかな ○ 岩代 岸野豐子

山門をとざせるまゝに春たけて藤花みだるゝ名古の大寺 ○ 岩代 岸野せい子

水の里松にかゝるを我せこと舟してめでぬむらさきの藤 ○ 岩代 岸野常子

ふちなみの濃き紫のまつはりて老木の松も若やぎにけり ○ 東京 倉重千惠子

さき匂ふ藤の一枝折り取りて少女がかざす春の暮かな ○ 東京 倉重茂子

新しき寺院のまとの硝子越し風にゆらきて藤の花見ゆ ○ 千葉 金子つる子

立とまり見かへる人に歌乞はむ佗居の軒の藤浪の花 ○ 越後 岩本芳子

咲きかくす岡への藤のむらさきに松のみどりは色なかりけり ○ 山口 村上操子

紫の藤波かゝる大宮の杉の木立の露をつく哉 ○ 岐阜 山田はぎ子

一しほの色こそまされ老松のみどりにかゝる白藤の花 ○ 神戸 足立ゑい子

まつはりし松のみさほにならひつゝいく春かけてにほへふち浪 ○ 長野 岡田千穗子

薫風の花の盛りを見ることに床しき春を思ひ出らん
○　長野　北澤千枝子

紫の雲にまがへる藤棚の下にやすらふ少女子のむれ
○　伯耆　錦織千代子

ふぢ浪のにほひみちたる池殿にうたあそびするつほれ七人
○　宮城　山城さち子

咲きかゝる瀧津岩根の藤浪に風さへ匂ふ花の色かな
○　美濃　酒向椿子

やせ馬を引きて我家へたどる道のかたへに咲きし藤白き哉
○　上野　吉田靜子

薫風に面なふらせてあちこちと藤棚下に徘徊する人
○　東京　牧千春子

繁りあふ青葉の中に藤の花春の名殘りのゆかりとゞめて
○　神戸　川村千代子

ぬるゝともたをりてゆかん家つとになぎさの岩にかゝる藤なみ

乙

○　日向　江夏わかゑ子

古寺の苔むす松に藤さきてちとせのまつも色かほるなり
○　京都　山添たみ子

美くしと仰ぐうなゐ見なつかしみ優しう垂るゝ白藤の花
○　攝津　磯村さだ子

春日山ときはの松にやとしめて花ふさ長くさけるふぢなみ
○　清國　富成梓子

紫の雲かとばかりさくふぢの花さしかざせあまつ少女子
○　名古屋　不破けい子

行きて見んたとしもやがて龜井戸のいけの鏡にうつる藤波
○　東京　高橋珍子

山鳩のなく聲すなる奥山にけたかくさけりしら藤の花

○　美濃　長濱由佐美子

美くしく藤さく池に繪の具とく水くみて見ぬ妹が繪たくみ
○　美濃　杉山藤枝子

松風のたことの房とむらさきの藤の花見る保津の山越
○　東京　土田八重子

春夏の岸をへだてし藤波はいづくにつかん花のこゝろぞ
○　東京　淺海あや子

藤さける峠の茶屋に駕引が重藤の肩を按摩する猿
○　秋田　石川よりゑ

鬼餅かたくめる岩に咲く藤は色も一としほ優れてぞ見ゆ
○　名古屋　木下鶴子

梓弓はるかにみゆる山もとのかき根の藤は今さかりなり
○　神戸　今西久子

池水も匂ふばかりに藤波の花咲く頃の住吉の里
○　神戸　今西操子

姉上はお歌作りぬ我もまた書きてや見ん藤棚の下
○　千葉　吉松圃子

淡月夜箏の音洩るゝ嵯峨野家の待戸にちりぬ白藤の花
○　長野　藤原すみ江子

しろかれの露ちりばめし藤の花むらさき匂ふ房うるはしき
○　東京　松原岸子

むらさきの色さへふかく匂ふなり松にかゝれるほりのふぢなみ
○　兵庫　古東靜子

さらぬたにゆかしきものを藤の花友とわかれし昔たづれて
○　兵庫　古東すみ子

池面にさゝなみゆるぎてうつろふるゆかり色こき藤波の花
○　後志　山本しづか子

筆とめてしばしおもへる我が顔にまとかなり來る軒の白藤
○　松山　田村多豆子

下にのみたるゝを見れば藤の花咲おからぬや心なるらむ
○ 松山 上原のぶ子
やせて這ふかつらに見ればゆたかなる 花にや藤のこゝろつくせる
○ 埼玉 横田秋子
詣て來る龜戸の宮の池の橋千代をかけても匂ふ藤波
○ 埼玉 横田やな子
春と夏二季をかけて咲にほふ老木の松の藤なみの花
○ 東京 松村登志子
紫の雲と見るまでかゝりけりけに名所の藤波の花
○ 美濃 山田幸子
三千の少女集めて琴を引く宮老いたり白藤の家
○ 岐阜 後藤英子
峠茶屋夕寐時を一群のきこりくゞりぬ藤波の棚
○ 岐阜 吉田まさ子
おのづから咲き分られし二種の藤のかけ行く山奥の道
○ 岐阜 櫻井とら子
稲葉山ありし昔のしのばるゝ石垣くちて白藤咲ける
○ 美濃 平岡げん子
散る散らぬ云ひあらそひに袖ふりて風送り見ぬ白ふちの花
○ 岐阜 長濱蘭子
緣日やはしき妹子と朧夜に買ひてもとりぬ鉢植のふぢ
○ 美濃 服部せき子
おもしろき男松の枝におもしろくかゝりて咲けり藤なみの花
○ 千葉 秋月廣江子
亡き君とともに語りし其かみにさも似し宵を藤の花ちる
○ 神戸 足立あさ子
君がすむ池の藤なみ春を經て千とせの松も越えんとそする
○ 名古屋 山根しげ子
玉垣やしめかけ渡す神杉に雲かとあふく藤浪の花

美濃 松田直子
降りつゞく里の五月雨晴れ初めて夕日の影に君見ます藤
○ 美濃 松田高子
雨煙る藤根の橋にたゝずみて故人をしのぶ若き歌人
○ 美濃 松田留子
山少女牡丹染めたる裾折りて渡る素足にからむ藤かげ
○ 美濃 松田信子
藤わかは露らみどりてあけぼのゝ吹くとし知れぬ風にゆるきぬ
○ 美濃 多田花子
紫の山藤さしぬ花瓶に花は萎みぬ春雨の宵
○ 美濃 多田すみ子
ぶち濱のほのかに薫る下蔭にうたゝれ人は香に醉ひしや
○ 美濃 多田しづ枝子
春雨のはれまを薫る白藤のしづくに染し行春の月
○ 東京 中村千代子
打仰ぐみそらの雲とみるまでに梢に高くかゝる藤なみ
○ 神奈川 服部幸子
山城や加茂の川邊の朝月夜紫にほふ藤の初花
○ 伯耆 錦織よし子
つまくりの數珠の組房風にゆれて散る白藤や尼君のそで
○ 伯耆 錦織賜子
春の日のながき名殘を身一つに散りゆくかけを波にのこして
○ 美濃 加藤里子
來る年も又來る年もつはくらの塒らとなりぬ白藤の家
○ 神戸 清水しつ子
池の面にたるゝ白藤たけながし手折るを得れば家つとにせん
○ 神戸 高橋町子
木もくさりゆかみし棚につるまとひいろも床しき紫の糸
○ 神戸 奥村君子

手をこめてかたく造りし藤の棚さかるおもさに柱ゆかめり

○　旭川　佐藤央子

ゑはかきにかきて送らんわかせこかめてしゆかりの藤なみの花

○　飛騨　中村華子

雨森ほす庭あたゝかく山藤の紫濃き山添のさと

○　静岡　田代糸子

池水にゆかりの色の浪たつは梢にかゝるふちにそありける

○　静岡　小栗すて子

ふちなみの花はいつしか盛りにてくれゆく春をしらせかほなる

○　相模　中村穎子

花散りてかたみ懐しき木の間よりむらさき匂ふ藤なみの花

新樹

天　秋田　長谷川薫子

初夏や若葉の門に送りいでゝ
　騎馬なる兄を雄々しと思ひぬ

（評）新樹の緑と馬上の若き士官とよく調和せり

地　岩代　岸野登代子

はつ夏やしろき絹裁つ君と居て
　新樹の丘の人畫き見ぬ

（評）畫題さながら新緑の畫圖を見るが如し

人　秋田　長谷川はな子

欄に凭れは向ひの岸の若葉風
　水渡りきてわか袂ふく

（評）湯の宿の初夏の様目の前にうかぶ心地す

秀逸

清國　富成梓子

くらへこし若木のかへでいつしかに
　立よるはかりみづ枝さしそふ

東京　鵜澤貞子

夕月はしづかに出てぬ山の上の
　若葉そよぎの薫する中に

東京　高橋珍子

鉢植のかへでの枝も若葉して
　すゞしくなりぬ文つくゑの上

長野　藤原すみえ子

うつくしき緑の雨の晴れ間ゆも
　しづく薫する森の若葉や

常陸　岡田萬子

山鳩の聲もしめりてくぬぎ原
若葉凉しく朝雨のふる
千葉　吉松園子

昭の薫りあらたなる若葉影
小鳥が夢の香もこもるらむ
美濃　杉山靜子

家三五青葉若葉にうつもれて
ひるなほ暗き山本の村
東京　淺地あや子

噴水のしふきにぬるゝ巖の上の
新樹にうつる茶屋のともしひ
東京　松原岑子

ほとゝぎすきなかむ程も近からし
みやまはなべて若綠しぬ
相模　藤原下枝子

蠶飼ふ家の灯火ちら〳〵と
青葉かくれに見ゆる宵かな
横須賀　柏原みな子

青葉若葉茂れる中の鯉のぼり
風に流るゝ五月晴かな
横須賀　渡邊比佐子

開墾の村畑つゞき家低く
若葉の影の鯉のぼりかな
美濃　服部せき子

遠き山近き小川ももやはれて
朝月きよし青葉若葉に
名古屋　山根しげ子

朝風に若葉波よるひろ庭の
空にひれふる鯉のぼりかな
長野　岡田千穗子

おしなへて畑の桑のしげゝれば
ことしもまゆやゆたかなるらむ
伯耆　錦織よし子

小羊の一むれゆきて森のかげ
みつ枝またゆく夕日さすなり
伯耆　錦織さち子

平三里青葉若葉の目もはるに
峠の茶屋に馬の嘶く

伯耆　錦織千代子

袖にちる露新らしき心地して
青葉若葉の風の涼しさ

横濱　鈴木まつ子

青葉せし木々のこかけに來て見れは
よはひものふる心地こそすれ

飛騨　中村はな子

山鳩の鳴く音淋しく聞こゆ哉
青葉にくらき山添の里

甲

○　東京　平塚白百合子

綠して京の山にゆれわたる青葉の中にのほり縦見ゆ

○　攝津　磯村さだ子

花の頃とひし山邊の友が家も青葉がくれに見えずなりにき

○　攝津　磯村直子

神垣のめくりの若葉しげりあひてまつれる神のいとぞかしこし

○　名古屋　不破きみ子

しけりあふ木々の若葉にゆふ月の影おもしろき夏座敷かな

○　下野　井上倚子

花さきし森は新樹の茂り合ひてあめふる宵をふくろふのなく

○　岐阜　鵜島滋子

かへるでの若葉しけりて病む窓に影あらはなる夕づく日かな

○　岩代　岸野常子

はてしなき新樹の路は夏姫の居まさむ宮にかよふとぞ思ふ

○　岩代　岸野菊子

さみどりの大木ぞしげる古廟道ま晝しづかにしらぬ鳥なく

○　東京　小林春子

我庭の楓の若葉茂りあひてひるもすゞしき窓の内かな

○　神戸　今西操子

朝晴れの大空きよき青葉山梢をわたる風の涼しさ

○　神戸　瀬野千鳥子

きのふまで木枯吹きし此森も若葉のかけとなりにけるかな

○　秋田　石川より子

水晶のとけいでにしか水白き甲斐の大峡若葉しにけり

○　千葉　秋月廣江子

花の日を人と別れし思ひ出のさくらの若木若葉しげりけり

○　松山　田村多豆子

とく遲く花には咲きし山櫻わかばはおなじ緑なりけり

○　埼玉　横田秋子

山畑のこがひいとなむ時や來ぬ桑つむうたのしげくなりゆく

○　横須賀　高橋つれ子

諸共に心の中を語り合ふ風の涼しき若葉かけ哉

○　岐阜　山田はき子

かしましき花の小茶屋も閉されて青葉にねむる初夏の山

○　美濃　山田幸子

鳴の家は若葉に消えて朝夕を昇る煙に只知られぬる

○　美濃　櫻井とら子

咲きそめし嵐の山の花かけにはつ旅らしき妹背見るかな

○うぶすなの神主簀たゞ一人若葉の宮に鳩飼ひてあり　美濃　長濱蘭子

○花ちりし庭の面こそ淋しけれ青葉しげりて月も洩さず　神戸　足立あさ子

○夏木立まだ覺醒れぬ朝靄をもろくも風のこぼしつるかな　神戸　足立ゑい子

○柏木の若葉にこもる神の山祠は見えず鈴の音聞こゆ　相模　渡邊君代子

○棺棹の音して動く朝の家を若葉がくれに見ろ暇かな　埼玉　尾形久代子

○夏の神は御手さし伸へて我が庭の木立さみどり何時か染めけむ　埼玉　香取うめ子

○我せこが接木の杏若芽ふきて花うるはしき實もちけり　長野　北澤千枝子

○うるはしとめでにし花は散りはてゝ青葉にかはる夏は來にけり　東京　中村千代子

○ところゞゞ藁屋根黒く新墾の山畑見えて木の芽ふくかな　神戸　服部幸子

○なつかしき新樹のかをるふみのまどいづくともなく琴の音ぞする　東京　能村けい子

○木々は皆緑りしにけりさにぬりのおはしま高く白鳩のとふ　飛驒　南　峰子

○月花をめでしはなれの窓の外に若葉のかげもすゞしかりけり　石見　山根直子

○三年前植ゑにし人は歸り來ず若桃咲きて物思はしむる　旭川　佐藤央子

○野も山もおなし緑りにしげりあひてきのふの春の名ごりだになし　東京　小栗すて子

○　東京　田代いと子

○窓にいる月のかげさへみどりにて若葉にこもる庭のおもかな　相模　中島ろゐ子

○さつき山そほふる雨に色そへて青葉すゞしき夏木立哉　岐阜　竹内久子

○花の色もうつればうつる心とて青葉若葉の影なつかしき　岐阜　酒向椿子

○青葉する里の山々ながめつゝ野川下れば藤の花の咲く　京都　山添たゞ子

乙

○はにかみのわが顔映す水鏡薫る新樹の風にほゝ笑む　名古屋　不破けい子

○山の端は見渡す限り若葉せりいつしか花の下ふりの宿　美濃　芳野　數子

○枯草は若草うみぬ枯葉みな若葉生みたり春風の村　岩代　岸野せい子

○片庇まぢかに木々のうすみどり涼しうせまる温泉の山の家　東京　奈良八重子

○大曠野一本榎若葉して旅人いこへと枝はりて立つ　東京　土田八重子

○あつぎせし花の衣をぬきかへる涼しき夏のうすみどり葉に　名古屋　木下鶴子

○花ちりて人もこずゑの若葉こそいろなつかしくなりにけるかな　東京　諏訪花子

○葉櫻のかげに釣床箱庭を子等集ふまでみどりしてけり　美濃　長濱田佐美子

○若葉風にほふやしろの朝まだき神秘めきたる白鳩のなく　美濃　杉山藤枝子

○春くれて新樹香高きふみどのゝ窓ほの暗く細き雨ふる

○東京 倉重千慧子

あはれ世を忍が岡に庵して繁る若葉のまつにたのしむ

○東京 倉重薫子

酒くみて嵐まつなり夕舟に月や若木の花を守らん

○千葉 益子操子

青葉しげる木かげはなれま椽に出て兄の君が月に笛ふく

○兵庫 古東靜子

花ちりて誰かとふらん我宿にひとり時めく若かへでかな

○兵庫 古東すみ子

野に山に春のみ神のいでまして新樹の影に小鳥なくなり

○越後 岩本芳子

岡越の路はすゞしくなりにけりなら葉柏のしげり合ひつゝ

○後志 山本しづか子

こその秋ふみ迷ひにし森なりきみつえさしたるあれのながへは

○山口 村上操子

よしの山花のしら雲かけきえてみどりにしげる夏木立かな

○松山 上原のぶ子

花といひ紅葉と愛し春秋をひとつみとりの夏木立かな

○埼玉 横田やな子

みつ枝さす片山里も此ころは花より後の一とげしきなる

○東京 松村とし子

春雨のはれてまばゆき庭の樹は梢々にわかばもえけり

○近江 抽木音羽子

花なりし春は行きしがきのふけふめだちて見ゆる木々の綠り葉

○東京 秋田とし子

朝日さす新樹若葉の露清き園に白衣の神官遊ぶ見ゆ

○岐阜 吉田まさ子

萌え出し高雄の山に雨晴れておぼろにくるゝ春のくれかな

○美濃 平岡かん子

村長の娘とつきぬ花散りぬ嵯峨の夕ぐれ只若葉風

○美濃 多田瑞枝子

なつかしき新樹のかげの君が家うすれて見えぬ雨の夕ぐれ

○美濃 多田さとる

なつかしき若葉のかげの樂の音ははたとやみしよたそがれの森

○神戸 後藤ふじ子

みどりなす庭の若葉がしげりあひ夏このましき蔭もあるかな

○伯耆 錦織たま子

衣更へてそゞろありきのみつ枝かけ秋にかろき青葉ふく風

○美濃 加藤里子

しにましゝなつかしき母青山の若葉の影に墓祭りする

○神戸 奥村君子

山里のみどりのかげにたゝずみて沖うち眺む景色長閑さよ

○清國 福田つる子

夜の雨に岡邊の若葉色まして葉がけにのこる花もなきかな

○上野 吉田靜子

葉櫻の緑したゝる坂道を鼻唄高く馬子下りゆく

○東京 牧千春子

一としきり村雨はれて新緑の葉末にやどる月かげあはし

○神戸 川村千代子

山かつの家居もわかず椋の木のわかばのおくにけむりたつみゆ

○神戸 しみづ子

白々と新樹もて成る此の机もとは深山に茂る宅木よ





鹽井雨江先生選

天

凶夢、（秋の日記の一節）　東京　鵜澤貞子

そは一夜の夢なりき。

何處と知らず、清らの川流れて、岸邊には今を盛りと咲きみちたる櫻花、風なきにハラハラと散り亂れて、水の上にさまざまの美しき形をあらはしては流るゝなり。一葉の舟に君とわれとあり。棹さすにあらねど、春風輕く舟をおして、靜かに清流をすべりゆく。二人はたゞ、温かに樂しく、世は永久に春なれと、微笑みゐたりしが……………

……………。流れは次第に急になりて、やがては舟は飛ぶが如くに走り、あたりも薄暗く、鬼石怪岩そびえたち、水は青暗として凄まじく渦まくなり。眼前に黑きもののあらはれしが、あなや岩なりと見るまもおそし、恐しき響して舟はくだけぬ。しつかとばかり君にすがりしと思ひしは、舟板の一片にて、われは水上にたゞよひ居るなり。……

……さても、君やいづこに。力限りにわれは呼ばはりぬ。よばはりし聲に、自から驚きさむれば、あゝ夢なりし、夢なりし―。山村秋夜寂然として更けたり、耳をすませば蟲聲唧々として雨の如し。我れしばし、我れ胸をいだいて、思はずなきぬ。

（雨評）筆のあつさりとしたるところに味ひあり。徒らにくどき筆にまさる數等。

地

日記　大阪　木村春江子

「……綠濃かなる若草に、童は何を求むらん。ゆかりの色の分かぬ身は、咲き匂ふ菫をよそに、土筆のみ籠に集むる愛らしさよ。ふと仰ぎし童の髮長く、春日にややけし、すもゝ色の頰したるが、黑白際だちて涼しき瞳に、懷しげなる色を浮べて、姉樣よと呼びぬ。近より來つ、猶よくみまもり居しが、いよゝ頰を赤めて、たちまち椿の蔭さして

走り行きけり。可愛き様や、誰か家のいとし子ぞ、愛らしき瞳よ、艶かなりし髪よ、われは少女にしても見まほしと思ひつゝ、赤き椿の蔭をのぞきぬ……………」

くり返すのは古き日記の一節である。俗事に追はれて、野をも山をも探る暇なき私は、うら若き過去の日記を操返しては、追懐の情に満足をして居るので……過去八年間の日記、全部を大別して二部とし、最初五年分を「筆の雫」と名づけた。單純なりし當時の胸に宿りし印象は、無邪氣な筆に寫されて、花も實もなき節迄も、猶うら若き思のあふれて、何となう懐かしい。殘りの三部、名は涙恨錄、さすらひの三年、雨につけ風につけ偲ばるゝ古里の事ども、日として涙の文字を綴らぬ事はないので、操返すはそれよ涙の種のみである。今年よりのは、まだ名づけてない。友とては只一人、それも雲山遠き東の空にあつて、折々行きかふ玉章のほか、夢ならでは逢ふことの出來ない身。終日たれこめて俗事に逐はれてのみをる近頃は、日々變化なき起居動作を、秩序的に記すのに過ぎない。かくて、去年よりは今年、今年よりは來年と、次第に淋しいおとなびた日記となるのであらう。其かはり家事に關した實益は、まゝ見出す事はあるけれども、私は、も一度、うら若きはなやかな日記をつゞつて見たい。この心もて、今も猶筆の雫を愛讀するのである。

庭の桃は今が盛である。只一人の懐かしい友と手をたづさへて、菫つむべく土筆取るべく、一日は心のまゝにあくがれる事が出來たならば……されど三年さすらひのいたみし胸にはたして今も猶はなやかな日記をつゞり得るであらうか。

（雨評）　殊に前段の筆には申し分があるが、趣向の一寸面白きを愛す。

人

面かげ

千葉　秋月廣江子

變るにつけ變らぬにつけ嬉しいのは故都で、まして旅から旅へ六七年もさまよつてゐた私は、この平和な景色に何事も忘られて、只わけもない昔の心に、追想から追想へ、まるで昨日のわたしとは別人の様………

今朝おいで下さつたお友達の誰れ彼れ、見ちがふ計りお姿は變つても、お心のかはらぬ嬉しさ故山ならではとほゝえまるゝのである。夕方には千代さまおいで下さるとか。丸髷姿に、はや赤ちやんさへおはすとは、お十八にてはお早い事。どんなにお變りなされたやら……おや、大山小山つて歌つてるのは、武ちやんか。私どもゝよくうたつたのだが……ほゝえみつゝ門に出た。

晴れ渡つた空は、一片の雲もなく、國境の連山は一層高く聳えてゐる。まーあの白髪山の、今も美しいこと。相變らずこの村の晴雨計となつてゐるのであらー。

白髪山にもやわげぬ内は、ほんとの上天氣になりまーねーと、よく水車小屋の爺はいつたつけ。おゝあの爺は死んださうな。

こゝからはよく見えないけれど、あの籔のあちらが水車小屋で、十一二の頃は、よく其邊へ土筆をぬきにいつては、爺やの昔話なんか、きいたものである。其の頃、爺は三十年もこの小屋に住んでると言つてたが、どーした事か、妻もなければ子もなく兄弟とてない様子であつた。

「爺や、こんな處にひとり居て、淋しかないの」ときくと、一寸私の顔を見て「なーに、孃樣、悟つてみれば、世の中は廣いでな」と、意勢よくいつた。私は其の時、意味はわからなかつたけれど、どこやら淋しみのある其聲が、今でも胸ふかく刻まれて、故郷？の思ひ出る度毎に、其面影の浮ばぬ事はなかつた。

七年後の今日、最早かの水車小屋の主ではなくなつた、人の話には、生前こよなき友であつた水車小屋も、半朽ちて形もないとやら。あゝ、それは哀れな彼の半生をうつしてゐるのであらう。

かの爺は死んだのか。世の中は廣いといつた彼れは、いづこへいつたであらう。おゝ、やはりかの小屋のあたりに迷つてゐるのではあるまいか。と思ふと、何となく昔なつかしい思ひが、ひし〳〵せまつて、しばしはそこに立すくんだ。

（雨評）情に雖になほ足りないところはあるが、先づ歸鄉のなつかしい面顔は見えた。

秀逸

◎◎みち潮　愛知　橘多賀子

静かな日の午後、
空は鮮かな桔梗色の帷を垂れて、綿のやうな白雲も、風なき空を動かねば、影は浪なき海面に映つて、見渡すかたは、汐干の濱の沖遠う、現れし褐色の洲、冬枯の茶畑でも見るかのやうな粗朶の林――その間を、ちらほらと白帆の影や、さては、貝拾ふ人影の虫の如く小さきが、動ひて居る。
閑け行く日射に、宿の軒端の紅梅が散つて、椿の花もしきりに零れる。松青く沙白けれど、花に乏しき小島の春は、いとも淋しう。花に狂へる蝶もなくて、静に暮れ行くのである。
寫生の筆を机に止めて、私は茫然と空を眺めた。もう先に浮んだ白雲は、淡乎と溶け初めて、幽に流れては、夢でも罩めたかのやうに、鮮やか桔梗色の帷を、淡き〳〵春のおぼろに包んで仕舞ふ。と、この夢のやうな空に、浪打つて、濱名の湖を海につなぐ今切の白波は、今やよせくる潮に躍つて、一しほの叫びを上げた。
突然おーいと呼ぶ聲が聞えた。ハッとして沖を見ると、それは貝拾ふ女の群の、洲上に立つて、舟を呼ぶ聲。もう滿潮近き海は、波白う動き初めて、岸打つひゞきも、何となく勇ましい。
あゝ、みち潮、どんなに壯快であるよ。萬波ひとしく聲を上げて、遠雷のやうに轄轤とひゞきながら、岸を潰した洪水のやうに溢れては、十重に二十重に島を圍んで、寄せては返す浪がしらの、或はやさしく眞砂を洗ひ、或は猛く汀に躍つて、轉ぶが如く引退き、亦折重なつて大きく小さく、白泡吹いて岸を嚙んで來る。
貝拾ふ人はもう舟にのりつくし、手籠を重く艫に積んだ舟は、岸を望んで、矢のやうに漕ぎ歸る、洲はいつか波の底に隱れて、粗朶の林ももう見えない。眼路に浮ぶ方は、浪白く、雲白く、海の紺碧は葡萄色にうつつた空を浸して、水や空、空や水なる景色である。
潮は暮れ行く日につれて、やゝに勢をそへて來た、昨日盤を捉へた磯も、今朝貝殻に歌かきし岩も、

今は波間に葬られたのであらう。青藻の香を含んだ風が、柔に海面を吹き通して居る。

（評）詞句美に筆よく活き。立派なる寫生文なれど、さて此の頭新しともいひがたくて。

◯◎「摘艸」　横須賀　渡邊比佐子

朝から嬉しい風の吹くいゝ天氣、舞鶴の様な紫の雲が、小濱山の頂にフワリと浮んで、鼓の音でもしたなら踊るであらう。キーチヨンチヨンと機る梭の音がする、チーチヤクチヤと小鳥が囀る。若草萠ゆる野邊を無造作に摺つて小川の一條がくるりと曲つて、廣くもないが直徑二里の祇園原が、目の前を匍匐うてゐる。若し小濱山が無かつたなら、遠く富士の裾野にまで、眼は遊ぶであらう。

單調なるは趣味に乏しく、興味に富貴なるものに常に變り易いと、自然の配合は巧みなもので、僅に裾野を遮つて隔てた此原も、月や流れの眺めは言はずもがな、黄鳥の初音をケキヨと、裏の窓に聞いて、大和の藥賣が門を覗く頃は、名さへうれしい櫻川邊の摘草で、緑りの露深さは、里の童が哀れ鎌に驚れ、嬉しく蝶々の夢を結ぶ黄金色おり白銀色おりて、また、御隣りの花ちやんや御向ふの雪枝さんに可愛がらるゝは、紅や紫に咲いたので、毎日摘みに行く。

菫や、たんぽゝや、蓮花草などの、其れが右に左りに前に後に交つた祇園堂から、路を右に曲つて左に折れると、紙漉く草屋が三軒あつて、其の先は全くの原ばかりで、菜の花は黄色く、小川の流れはあくまで白い。

「晴れの衣裳で花嫁通る…………」

つぎあてた赤い縞の筒袖に、水色の三尺をしめて、手網曳く先のをの子が唄ふ。

「下着見たがる春の風…………」

同じ筒袖に姉樣冠をした紅い脚胖の女子が、つゝける。色の白い笑顔に、草籠負つて、後から行く、柔しい聲は、凉しい聲と絡まつて、土橋を渡るまで、二度繰り返された。咲いた草花は、彼地此地と自然の彩を散らしてゐる。

（貴女一盃摘んで）と自分が聞くと、（いゝへ未だよ川たがね、この花は何んでしよう）と八重子さ

んは、籠から海棠の小さい花を出して、見せる。(さうね、何んでしよう)と今度は自分が問い返した。(私にもわつてよ)と妹の君ちやんは、柔かい手を籠の上に覗かしてゐる。

「花と蝶々の戀路を割いて………」

三人は言ひ合した樣に、顏を見合せる。

「……わどけない娘が菫摘む……」

牛の聲長く余韻を曳いて、朗かな謠は、彼の花影から流れて來る。

(あれ、橋際の美代作さんよ、いゝ聲ね)と八重子さんがいふ。(あら、さうぢやないわ、新田の幾兄さんよ……)と妹が言ふ。(ホヽヽヤツパり同じじやなくて?)と共に笑ひこけた。

夕日を孕んだ涼しい風は、そよ〳〵と草野を徘徊ふ。チラ〳〵とつかれ果てた胡蝶が、あやふく舞ふて來る。紅緒艸履や黄金の草靴で踏み亂した路傍に、なやんで居た陽炎は、何時しか消えて、草のみ取殘されてゐる。

梭の音も微に、牛の聲も遠い、三人は踵を返して最前の紙漉く家の側まで來ると、春の日はもう低く怨めしさうに暮れやうとして居る。

(雨評) 文才はゆかしく見ゆるが、未だ垢ぬけのしないところををしむ。

◎運命　信濃　松澤まつ子

『はしたない女だとおさげすみ成さらずに聞いて下さいな、ネ、秋子樣、こんなお話をするのも、よく〳〵思ひ余つたからですわ。』つて、雨の晴間に、裏の枝折戸から、そつと訪はれての友が物語り。『それは、何も私が居ないからですけれど、母樣も余りなと存じますわ。玉枝樣(夫の妹)をお進めして東京の女學校に入れたのも、當人の爲めを思つてゞはなくて、邪魔になるから出らしたかの樣に僻まれ申したり、母樣の御不機嫌を見るが辛さの良人が外出勝をも私の故に遊ばしたり。それも未だ宜しいのですけど、二言目には、お嬢樣育だから家風に合はないつて、悪いところは仰つて下さらずに、眞綿で首をしめるやうな遊ばし方。私いつそ此兒が無かつたならと、さもしい心も起るのですよ。』と、堪へきれないで一と雫。けれど〳〵、そんな事になつたなら、里の兩親はどんな

に歎くでせう。雨にも風にも私の身の上を案じて、「何處までも女らしくせよ。少々許りの學問したからつて、決して當世のハイカラ女流に染みるな」つて、勿體ない御心配ひを、如何して空しくされませうか。といつて、あの母樣の御膝下に…………………。あゝ父母樣の御歎きを見なかつたなら。せめて此子が無かつたなら。』と、無心に笑む兒を抱きしめて、『運命の神つて、こんなに人の子を弄ぶのでせうか。去年の春輿入れした時に、「あなたはお仕合せネ」祝つて下すたあなたが、私はお羨ましく存じますわ。ネ、秋子樣、如何したらいゝでせう。こんなお話するのは、あなたばかり』つて。『あゝ露子樣、あなたの切ないお胸はようくお察し申ましたの。けれど、とても泣かねばならぬ運命ならば、涙の片袖を分けて下さる夫君の傍で、お泣き遊ばせ。ネ、露子樣、霜雪を凌いでこそ、梅は、氣高い香をはなつではありませぬか。母樣とても情をお知り遊ばすもの。あなたただに眞心を以つてお仕へ遊ばさば、やがてきつとお悟り遊ばしますわ。覆水盆にかへらずとやら、夢、短氣な事は遊ばさずに、何も暫くの御辛抱が肝要でございますわ。未だ世の經驗もない私が、こんなをこがましい事を申し上ぐるのも、皆あなたを思ふからですの。ネ、お聞き分け下さいな。』つて手を取れば、「え」と涙の顏を上げられた露子樣、淋しい面のどこやら、希望の光がみとめられたのである。『秋子樣、いろ〳〵御親切にあり難うございます。いつまでも冷い世の中ではありますまいから、私忍びますわ。私一人だに耐忍すれば、誰の歎きも見ないのですもの』。かすかに笑つて襟かき合せ、『長居しては、母樣に濟みませんから、これで失禮いたしますのよ。』『もうお歸り遊ばすの、ずいぶん御機嫌よう。そこまでお見送り致しますわ。』

思ひなしか、めつきり窶れた背に、むづかる兒を賺し〳〵、暫し小止むだ五月雨の又降り出した里川堤を、傘さしてとぼ〳〵歸る友が後姿、いつまでもと見送る折柄、濡れつゝ名乘るほとゝぎすの、血を吐くやうな一聲、二聲、友の行方へ鳴き過ぎるのである。

（雨評）情はきこえたが、新しいところが無い。會話もなほ申し分がある。

◎長閑なる日　神奈川　服部幸子

（富士の雪白酒）と書いた旗がちら〳〵する出茶屋の前の橋を渡ると、もー一面の菜種畑、左の方は道に添うてさゝ川が靜かに流れてゐる。眞白な蝶々が二つ三つ、もつれながら土橋を越えて、菜の花影にかくれた。

隣りの村まで一里余りの青麥畑、其間々に黄色く交つて見ゆるは、菜種の花である。

この畑に狹まれた九尺ばかりの道があつて、長井の村外れまでは、馬車も通ふ。荷馱馬も人も、日に何度となく通つて居る。

後を見ると、酒屋の土藏の白壁が桃の木の間にほんのり見えて、梭の音も眠むさうに何所からか聞へる。幕を曳いた樣な薄霞が庚申堂の兩袖からなびいて居る。

微に少さく、入谷川には白帆の三ッ四ッ春風を孕んで、丸い小山がくれに南の方へ消えた。

春の日は今、香貫山の右の方から出てゝ、笑ふ光りわたゝかう投くれば、不知の森影より、小鳥の囀りが囂しくころげて來る。

今まで畑打つて居た翁も、鍬を休めて、得意の顔をニコ〳〵させながら、煙草をくゆらして居る、そして煙りの行方を眺めて居る。

暖い風はそよ〳〵と目の前を匍匐うて、牛の聲はいと長く霞を潜つて、微に聞える。草刈唄も面白く、其れに和して來る。最前の馬車は、奇な喇叭の音をたてゝ、もー歸つて來た。

（雨評）これも景色が見ゆるが、なほ銑鉄を缺くところもありまた新しくもあらぬををしむ。

〇つくゑ　中越の里　那津子

余の此世に費帶してより、深山幽谷にて自然の恩に浴しながら、峨岩を飾り、巓崖を踏み、或は詩人歌人の詠吟の材料となり、或は畫人の帖の中に入るなど、天然の美景として賞せられしが、直徑も、高さも、定期に至り、大木又老木として、樹木の上位を占め、驕り居たりしに、忽ち起る斧の音、丁々として耳底に響くと思ふ一刹那、幹は横ざまに打倒れ、四肢はがれ、或る時は杣下に運び、其の上に四分程の厚さに挽かれ、次に指物師のわざによりて机と命名せられたり。因つて、倩々考ふるに、余の境遇に大なる變動を與へたること實に甚だしといふべし。懷古の念に堪えざれば、

いにしへのたにまの榮、思ひ出でゝ
人にかしづく　今日のかなしさ。

落花枝にかへらずとかや、今は悔ゆとも詮方なしと打なげくに、目覺時計の鳴るに漸く我に歸りて、以爲らく、讃琴の台となるも余、揺籃の台となるも余、栽縱のさゝへとなるも余にして、數々ありて枚擧に遑あらず、如何なる人も机上にて事をなさゞれば、理、頭腦に徹透せぬとかや、また、机前にある人は、常に高尙優美且勉勵なるものなりとかや、兎に角貴き位置にあるを論を俟たず、更に思ひかへしぬ、種類によりて上下の遠ひこそあれ、このさち深きに因みて思ひめぐらせば、最前怨みしは余が靑眼鏡の然らしめたるなり。隱れての艱難の種子今生へたるなり。されば丁々としたる斧の音、其のときこそはうらみたれ、千歲の幸のもとゐを開き、猶と思ひしは却て文明の大利を與ふるなり、敵とみしは僻目なりしか、世に敵あるため出世せし例著し、古人また曰はく、「敵を愛せよ」と云へり、然れば、嗚呼、吾もまた今日あるを大幸とや言はむ。

「春に花なきものは
秋に實なし」

、、、〇墓詣り

東京　林常子

花曇りの打續いた此頃に、今日は珍らしくも空は一面拭うた樣に澄み渡り、それに日曜なので、妾は母の墓詣りすべく門を出たのは丁度十時頃。西へ、東へと花を便りに群れ行く喜しげな都の人を避けながら、獨りショールに肩をすぼめて、いそいそと淋しい野道を辿つた。

自分が久しく病の床に親しんだ中、誰一人慰めの花一つ手向けて吳れる人も無く、寂れたる荒れ野中に唯宿無し鳥の止り場として横ろいとしの母上の墓を見ては、有繫に下に眠り給ふ母上に申し譯け無くて、急き、さゝげき花と線香を、心許りに供へて、跪き、思はず手を合はして、目を閉ぢると、暖く懷しい母上のお顏が、ありありと浮び出て、物言ひ給ふ如きお姿！、偖ては、戀しい昔、母上の姿を愛み給うて、夢の樣に又現の樣に、雨の日雪の日暖き懷に抱き入れ給ひし事ども、眼前にちらつくので、今迄雨風の吹くに任せた自分の不孝が、痛く身に浸み渡つて、石も溶けん許りの熱い涙が我知らずほろりと、袖にこぼれた。

細々と、絶えなんとしては又續く線香の烟りは上を蔽ふ櫻の香と打ち交り、妙な霞となつて、自分の胸は暫くの間それに溶かされたやうに、恍惚として追懷の情に堪へなかつたが、不圖、ひやり自分の頰が苔蒸す墓に觸れた時、その寒さ！、その冷さ！、母上の冷い手に觸はられた樣な心地がして！、自分の心に大なる刺戟を與へて吳れた樣な氣がして！。

消く墓を洗つてから、家に歸つた後も、自分の胸の騷は一層高かつた。

、、、〇西山の花見に行て

松山　田村多豆子

西山の姥櫻、今さかりなりと聞て、いと心のうき立ぬるを、一日二日は、おさへてありしを、けふはなにをおきてもと、一人二人のしたしき友を誘ひて、わり籠携へて行見るに、實に人のうはさに違はず、枝もたわゝに咲みちたる氣色、えもいはずあてにうるはしうなむ、山内神社、大寶寺、と見めぐりて、寶積坊にいたれば、去年の火災もしらぬ顏に、咲匂へるいとをかし、

山寺のさくらは去年のもゆる火を今ものこして色さやかなり、

と口すさめば、又一人が、

世の中をはなれて匂ふ山さくらなと人なみにおもひなすらむ、

といへば、人々わらひこほゝるも、またいと興ありてなむ、

〇即事

東京　平塚白百合子

桃の節句もいつしかすぎて、山は紫のかすみにはた白き花雲に、野は彩の色うつくしうかざられて、おのづから心落ちゐぬ此の頃、そゞろ心地に門邊にいづれば、誰かは流しけむ、はたとり落しけん、菫の小さき花束に、三つ四つたんぽゝまじりたるが流れたり。すくはんと肉色絹のハンカチ水に入るれば、小さき小紋さして、目高は藻のかげに走る。水はつめたからぬ程の心地よう。しばしをさなき昔にかへりて、水いたづらに餘念なき折しも、ゆるう水をつたうて棹あげのうた、何となう春につかはしく奥深う。川邊つたひにゆけば、きづきあげたる高樓ゝ、白木のにほひ高うして、廿人ばかりの若き男が、ゑひたる面わにこゑふりたてゝうたふ歌の、こゝろはしらずとも、何となう引入らるゝ思ひに、うつゝともなくみそらあふげば、高くゆひたる御幣に、春風のわづか見えて、ゆる〳〵と鳶の輪をゑがきつゝとびまはれる、のどかなる春のさまにこそ。

〇妹を送る

下野　井上侚子

日頃の希望を許されての嬉しげな妹の笑顔をみれば、妾も嬉しさに堪られぬ。年は二七の春淺い身でありながら、家戀しはらからこひしと思ふ樣子もなく、今別れて鳥が鳴く東の空に行く身にてありながらかひ〳〵しく行李を調へて居る妹、何と氣強いことだらう。

父は門迄、妾は半里ばかりある停車場へ送るべく、草やはらかな川添の細道を、妹と並らんで行く。停車場には町の義兄が商用を兼て送るべく待ちて居る筈。[illegible]の御世話は是非私にと頼つた、乳母やは、上野にまちくたびれて居るだらう。いとしい妹と今限りいく月か相見ることが出來ぬかと思ふと泣きたいやうな氣がする。妹は平氣で、靴の先で愛らしい花をける。妾は妹のリボンのゆがみを直しながら、(着いたらはがきをお出し、數日すぎたら乳母やと寫眞を撮つておよこし、そして紀念としてその時を忘れないでおいで。)と云ふと、妹は無言に妾を見上げたばかり。彼の時子さんが、勉強が過ぎため腦で仆れたヿをふと思ひだして、云はふとしてためらつたが、思ひきつて、(勉強おしよ)體を、丈夫にね)と、肩に手をそへていふと、勢よく、(よく遊びよく勉強します、ねいさんお體を丈夫にね)と、洋傘の總をいぢりながら。妾はこの一ことに何とも云へぬ程嬉しかつた。もう町の商會の旗がみゆるほどなく停車場についた、汽車がきてゐる。兄さんは切符迄かつて待つて居られた。さよならを言ひ換して、兄さんと妹はプラツトホームを行く。後姿を見送つて、妾は急いで半丁もくると發車汽笛、今日は耳にはげしく響いて、妾は一寸立ちとまつた。家には父の姿のかへりを待たるゝのであらう。

〇春

名古屋　小西ふさ子

いつにかはらぬ眺めは、春の景色にこそ。瑠璃色に澄み渡りし空に、一羽の鳶いとも長閑に飛びまはり、太陽はほか〳〵と、暖き光を下界に浴せかくるなり。見渡す限り廣々としたる野は、菜の花畑にして、恰も毛氈をしきつめたる如く、折から春風そよ〳〵として吹き來り黄なる波背き波を漂らしつゝあり。遙かに遮る山々は紫色を帶び、その麓には櫻かとまがふ程に櫻花みちみてり。何處よりとび來りしか、翩々と一羽の蝶、菜の花にしたはしげに、幾度となく止りては去り去りては止りなどして、去りもえやらず戯むるゝなど、得ならぬ眺の美しさよ。彼方なる土堤には、萌え出でたる計りなり若草の上に、童の戯ひ、其の傍につながれたる牛は、モウ〳〵とのどかに吼え、此方の野邊には、すみれれんげ草など摘みあげたるを、花束つくる少女の愛らしし。さよそ

の繭蠶に胡蝶一つとまりしと見しは、折りてさしたる山吹の花にてありけり。けに春は人生の樂天地なるかな。

○暮春鐘　　横濱　鈴木まつ子

秋の夕べばかりとおもひしものを、くれゆく春のかねのねも、またあはれふかし。さくら花さかりの頃は、たゞうるはしとて、ひまゆくこまもなしまれど、花のさかりはゆめのまにて、木々はおしなべて青葉になりぬれば、そよふく風はこちよけれど、今にいたりてよのつれなきさまなど　おもひいでゝ青葉にひゞく夕べのかねこそ、らのおもはしけれ

女鑑投稿規定

投稿はすべて婦人に限り、〆切は毎月五日と改め翌月の本誌に掲載す、但し俳句は選者の都合により爾後締切期日を掲載前々月末日迄とす、

棄題和歌の甲乙、短文、新體詩、棄題外の短歌俳句それ〴〵別の用紙に認められたく、又同じ用紙に二人またはそれ以上の名を並べることなきやうに願ひたし。

新體詩

文學士　鹽井雨江先生選

天

祝ひの歌　　河内　竹内久子

(一)
野邊のさ百合を慕ひてや、若き光りの星おつる。
今宵よりこそ、新妻の花なる君におはすなれ。

(二)
絹の絮帽の深けれど、紅にほふ脣よ。
あやのま袖に隱すとも、猶もこぼるゝほほ笑よ。

(三)
月の女神は、人の世に靈しき光をおもらせて、
姿も清き花よめの君が行く手を珠とじく。

(四)
めぐるや朱の盃に汲む錫懇の酒こそは、

君が祝ひと御空より、落たる露のかをりあれ。

(五)

あゝ、今よりは、君が胸 愛の泉やあふるらむ。
清く樂しき君が家に、天つ御國やあらはれむ。

(雨評) 幼きところはあれど、詩才の見ゆるを愛す。

地

病院に殘し〻花を傷む

遠江 橘多賀子

死の影暗う迫りよる、藥香漂う部屋なれど、
瓶に翳せばあでやかに、匂ひこぼるゝ玉椿、
枕をめぐる花の輪は、短き春を榮えしが。
宵闇せまる黄昏を、白う染め拔く花瓣の、
雪に刻める五片や、星見るごとく匂ひては、
薫ゆる黄金の蕊の香の、夢にも淡う通ひたれ。
さあれ褪せ行く花色に、癒えぬ病を傷みては、
散らば共にと契りしを、片手落なる山風の、
いつ忍びけん、盗まれて、花は蕾に名殘りしが。
白雲浮ぶ南の、島にわが身を養ふと、
馴し部屋の扉出る日に、結ぶみどりの黒髮の、

亂れ長きをとき詫びて、つい忘れ來し花一枝。
今は水なき瓶の中、渇苦烈しう俛首れて、
蕾ながらにすがれしか、さては小暗き埃溜に、
相抱いては花と葉の、褪せし亡骸や傷むらん。
淋しさ添ふる磯の家を、めぐれる雨は細うして、
春を短かう落ちて行く、軒の椿花を數へては、
貝殼にかく歌筆を、取るに得堪へぬ思かな。

(雨評) 少しく情の足らざる嫌ひあれど、言ひまはしのすなほに、殊に末段の詩詞の優美なるを愛す。

人

夜の賦

美濃 岡 英子

人一日の生存に、疲れし體軀休めよと、
惠みも深き神の子が、其處に下しし夜の幕。
寂寞なりと云ふ勿れ、黑き光の其中に、
露さゝやきて覆れ行く、萬象いかに新なる。
高く薫ずる夜の香に、悶えの炎消え去りて、
胸に慰安を認め得つ、自由の翼いま張るよ。
天には愛のかげ淸く、詩星綺星皎々と、
闇の前途を照しつゝ、悟りのをしへ開きゆく。
地には情の露甘く、もるゝ燈火ほのめけば、

そこ浄樂の花咲きて、
あゝ美はしの大繪巻、
無恨の靈の滾々と、
人は自然の香に眠る。
自然と人と融くる處、
蒼穹一面に流れ流るゝ。

（雨評）調に何處となく氣のこもりたるを愛す。

秀逸

◎流るゝ蝶　大阪　木村春江子

「かつてはあかき花こひて、
ふるとしもなき春雨に、
輕き羽袖をぬらしゝか。」
「黄金花咲く菜の畑を、
心のまゝにあくがれて、
はしき我世とほこりしか。」
「一日童にとらはれて、
何のねたみか、白妙の
片羽もがれし恨めしさ。」
「葉末の露に口づけて、
休らふひまを、吹風に
よろぼひ落ちし細流れ。」
「うつり氣多き我れのみの
憂き身のはてと思ひきや、
おなじ運命のすみれ草。」
「ゆかりの色ハ消えがてに、
名殘の香さへほのめけど、
あはれ汝しもちぎられて。」
ゆかしき色香身にしめて、
せめて消えなむわがねがひ、
さらば流れむもろ共に。

（雨評）調また流るる蝶の如しといふべきか。

◎平和の里　東京　鵜澤菫子

紫匂ふ森蔭の、
若き羊の群れ追ひて、
餘韻に、里は黄昏れぬ。
野を司る神の手に、
鬢のかをりの床しさよ、
水も平和を呼きて。
きけ、草負る乙女子が、
唄ふ一節鄙唄を。
奇しき光のきらめくよ。
春の情にあこがれて、
小草の露にそぼちつゝ、
歸り行く子が草笛の
野山を花ときざみたる、
草柔き汀には、
覆盆子の如き唇に、
ここには聖き愛ありて、
神を讃せむ歌誦せば、

我れ人の子の小さき胸、理想の翼ひろげりて
夕雲遠く翔ける哉。
愛に平和に慰藉に、うれしさ滿てる此里よ、
日ねもす聖き勞働の、つかれは、茲に治まりて、
夢は平和の神路をば。

（雨評）詩才はほの見ゆ。今一層情を活かし珍はんことを望む。さらば、はじめてめでたき詩境に入らむ。

◎◎遊子　千葉　秋月廣江子

まばゆき冠手にとりて　笑しと見しは、夢なりや。
夜半の鐘に目さむれば、　むくろは同じ旅の宿。
胸にしみ入る寂しさを、　夜着の袂に掩ひつゝ、
現ともなきうらぶれを、　泣かじと聲は忍びても。
國の境の三木山に、　遙か故郷を見下して、
彼方の星に見まひにし、　三年の過古を思ひては。
浮世の風になぶられて、　望みの花はちりはてつ。
冷たう枯れし胸の血の　環らぬ今を、いかにせん。
更け行く夜を燈火の、　消えがてにてる一時や、
あゝ其てりしひと時の、　しばしの榮もなき身哉。

（雨評）驚きこえたり。少しくありふれたるををしむ。

◎◎薔薇　美濃　酒向椿子

油にねばる黒髪を、　折れたる櫛に梳らせて、
心もかろき夕まぐれ、　ぶらり野邊より歸る道。
頬にかゝれる髮の毛を、　掻きあげもせで佇めば、
戀しの君のみもとより、　簪しにせよと薔薇の花。
花のつぼみは暖たかき、　君が御手にて育てられ、
色かんばしく綻びし　開もゆかしの賜ものや。
日は一日とうつるとも、　よし花びらは艶あせて、
机の上にしをるとも　我長しへにかざさん哉。

（雨評）着想面白きものあれど、詞に想になほもの足らぬををしむ。

◎◎春の賦　美濃　山中金子

瑠璃空にほがら〳〵。　もゝ色の淡雲引いて。
春あさき陽炎も。　あたゝかき眞晝時。
際限しらぬ青草の。　若緑彼方此方に。
小羊の群見えて。　靜かなる牧場かな
なれ〳〵し小羊の。　優しさに鞭投げて
今日も又横たはる。　草の床心地よや。
微風に吹かれつゝ。　我が結ぶさゝ夢は。
紅花の香に醉うて。　あこがるゝてふ〳〵よ。
をち方にそばだてる。　楡の木の圓き森。

知更鳥の囀りに。　夢長う春送る。

（雨評）これも着想は面白けれど、今少し發表の工夫足らぬをしむ。

○◎花守　下總　岩野瀨白合子

春まだ淡くかすむ夜な　色のおばしまさまよへる
ミーズの神の袖の香に　夢やなれしむ花守女。
青葉若葉をしとねとて、ゆかしき花を枕とて、
ひねもす聖き憧れに　詩をうたひて、花守女。
ひと日野末の花訪うて、つめたき露に褄とりて、
笛をいだきてわけ行ぬ、聲もほがらに花守女。
斯してとこしへ花守女、浮世の塵も露しらで、
崇きみ園におきふして、きよき雅姿を老ざれな。

（雨評）これも着想は面白けれど、發表の工夫の足らぬをしむ。

◎春の野邊　神戸　しみづ子

幾ちやん野邊に菫摘み、清ちやん共に土筆摘む。
リボンを供と見し者か、花をしたひて來し者か、
ひら〱〱二羽の蝶、白はリボンに、黄は花に
止りて眠る暖さ。やがて二人は、花を持つ
兩手を高く差上て、歌ひぬ春の長閑さを。
その聲雲間に聞く雲雀、我も共々唱はんと、
霞の中を鳴き渡る。幾ちやん空を見守れば、
清ちやん立て手を叩く。其を見ませしお日樣は、
につことばかりに笑み給ふ。　（をはり）

（雨評）可愛げなるところはあれど、詩としてはなほ工夫すべきふし多し。

○やさしき乙女　美濃　多田さとる子

若葉の香高き里道を　過ぎてゆくなる乙女子の
かざしににほふ山藤は、いづくの里に折りて來し。
清水の里のなつの日に　早くも咲けるひとふさを、
見捨てがたくて、乙女子は、折りてかざして來しならん。
あはれ、やさしき乙女子と　とほくもわれは見送りぬ、
みやまの奥にわけでゆく　春の女神のこゝちして。

○野の小女　上野　吉田靜子

柔しき姿なよ〱と　映る水面の柳の影に、
小魚集ひて蛙も浮ぶ　いさゝ小川の流れを右に、
露花落ちくる菜の花小徑、霞を分けて小走りに、
草の家さして歸る娘の、父慰むる二合の酒を、
小女心の恥らひや、人や見んかと片手に隱す、
優し前垂れ花模樣、ちらり〱と春風翻りや、
椿油の香に醉ひて、銀杏返しに胡蝶が狂ふ。

〇鶯の墓に立ちて

膽振　八雲志津子

胸向上の火にもえて、
花暖き我里も、
呼ばればならぬ日なりけり、
ほろゝこぼるゝ花枝に、
我枝懸けし籠の緒の、
揺る春風に龍徽塵、
花一時の蝦夷の春、
老し櫻の陰深み、
あゝ春風に誘はれて、
汝は日頃も憧れし、
玉をつられて花にゆり、
されども其れは夢よりも、
我胸とゞろ眼はさゆる、
思ぞ迷ふ故郷の、
あゝ其朝の汝が姿、
花とまぢりて散りしくは、
汝が星影の花塒、
暗に光れる凄き眼や、
ぬくき柔胸やぶられて、
背恐しく血をすゝり、
あゝ汝が最後見る如し、
いたでに胴るゝ心地して、
汝が小さき墓はこゝ、
幼なき雛のあと消えず、
今五歳の後にしも、

父母在ます我家も、
明日が日よりは汝郷と、
せめては今日を梅が香の、
汝遊ばして別れむと、
ゑにしの糸はとけぬるか、
ひごははらゝと鳥ぬけて、
梅の瞬に花揺らの、
我鶯は隠れけり、
籠ぬけ出でし鶯よ、
自由の國の春の歌、
香にほろ醉ひて樂みぬ、
あはれはかなの歌なりき、
過去と未來の境にて、
別れの床を起き出でし、
黄き亂羽血塗れに、
そも梟か木兎か、
花を亂してきら〱と、
毛むらの足の利き爪に、
朱にぞ染めしと曲りの、
骨を碎きて肉を裂く、
何やら深き我胸の、
旅立ちの朝葬りし、
梅の根本に苔むして、
『鶯玉子の墓』とあり、
昔のまゝの春の日を、

この墓のべに佇みて、
花の都は誘惑の、
危くもへて故郷の、
我は幸なり鶯よ、
あかなびくれし鶯よ、
故郷の春を感謝に泣けど、

思へばそゝろ恐しき、
梟ぞ棲む五歳を、
消さまどろの夢にふす、
あゝ身をすてゝ我幸を、
我今こゝの墓に立ちて、
汝は再び枝に來らず。

〇二つの輪影

東京　秋田登志子

華美なりや、
緋の輪を右手に、
乙女は舞ひぬ、
塵浴びし髮は、
紫の輪を、
手にしてトポ〱と、
花の雨降らす、
緋の輪紫の輪、
暫し蛇の目に、
さあれ今や、
弱き細き、
切断れ落ちて、
其刹那吾の、
雨含む風の、

とき色の被衣して、
眉毛が細き、
濟紫の君に似て、
いとも縮れて、
さもうろさげに。
乞食來る見ゆ。
暖き小風に、
フワ〱と飛びて、
くる〱と廻ひぬ。
緋の輪がらめば、
紫の輪は、
胸さと打ちぬ。
夢覺むれば、
雨戸を揺れる。

〇夏初の賦

豊前　柳瀨倭文子

陽春煖き碧空に、
咲きと盛りし山櫻、
あはれ遺憾の茂り葉に、

うかべる雲とたゞ見えて、
たゞ瞬間に散り果てゝ、
夏のけはひは回り來ぬ。

まだいわけなき稚兒の掌に、
そよ吹く風の音につれて、
無二の寶の黄金色、
翠緑滴る樹陰には、
たはるゝ狀態のあどけなさ。
端居の儘に見てあれば、
前栽の置石うづくまる、
桃色淡く咲きいでし
焔の如く燃え出でゝ、
綾羅の袂の舞の手に。
蝶兒のやさ影漂れ行き。
花間に求食る忙しさ。

似たる楓の若葉搖れ、
移らひ易きひとのよの
八重山吹の花盛る。
罪なき兒等のうち集ひ、
日かげの經つも得しらずて。
われ早晩に若がへる。
蝦蟇にも似たる傍より、
姿容艷なる躑躅花。
一際榮ゆるけはひはや。
春日を永く浮かれ來し。
蜂の羽音のいとしげく。
將來の糧食の收穫に。

丶丶〇(春の朝)

霞棚曳く朝りの、
朝日の影にうかびけり。
若草萌ゆる春野邊に、
たのしき戀を語るなり。
あなうれしきは春なるよ、
空にはかゝる雲もなし。

横須賀　渡邊比佐子

小川に散りし花色も、
草刈る乙女打ちむれて、
蝶々飛び舞ふ風低う

丶丶〇落　椿

はるさめつゞく此の夕
豆拾ひ居し飼鳩の
優しうなきて羽ばきして
徒然慰せんと子等の如
手よりはなれて緋鯉浮く

下野　井上倚子

音して落る白椿
柔毛をなでゝ地にすべる
とび立羽れも打しめる
糸に通せし落椿
池の面に三尺の

白鷺狂ふと見まもりぬ
花は亂れてこゝかしこ。

丶丶〇春の川

霞にいでゝ花に入る
岸の菫に蝶生れ
せゝらぎしづか遠方にゆく
夕しつけき歌のせて
あゝ平和の神ぞもる
今し櫻のちりうきて

丶丶〇新嫁

雪より白き其の胸を、
やさしく結ひし丸髷を、
鏡に向ふ若き妻。
玉やあざむく其のかひな、
かはゆき夫の爲めとてか、
胸にやどりし空想に、
日は早や西に傾きぬ、
時計の針を見つめつゝ、
門に聞ゆる靴の音に、

丶丶〇藤

此のしら藤とむらさきを
ながき思ひの君と我れ、
くすしき人のゑにしがな。
君は執柴よ我はゑぞ、

竹竿とりてそとうては

東　京　平塚白百合

水美しき春の川
花の吐息に霞わく。
水美しき春の川
ろの音ゆるうもやに消ゆ。
水美しき春の川
流れにひるの月見えぬ。

陸　前　山形すみ子

あらはに出して惜げなく、
と見つかく見つそはくと、
はつと面を赤からめぬ。
いともやさしの指先きに、
誠を込むる針と糸、
あはれ嬉しくほゝ笑みぬ。
書齋かたづけ茶をたてゝ、
夫の戻りをちわぶる、
床しき眼かゞやきぬ。

伯　耆　錦織さち子

結び合せて契ひてし
富ものぞみもはなれつゝ、
生れし昔十九年、
男波女波の千萬里、

互にしらぬ君と我れ、
神のむすびし君と我れ、
たゞ嬉しさに小さき胸、
秋かされて抱きつゝ、
ゆめさながらの春の風
二人の袖にわたる時、
結びし藤の花散りて、
白と紫と色々に、
ゆく水遠くながれゆく、
望みちたる妹と背の
行末いづち藤の花びら。

、○「乳母と乳兒」

相模　渡邊君代子

「こゝまで來たら御菓子上げよ」
乳兒は這つて來たりしが、
乳母はあとへと二歩三歩。
『こゝまで來たら乳上げよ』
乳兒はあやうく來たりしが、
乳母は亦もやあとすさり。
「こゝまで來たら何上げよ」
乳兒は行かんと思へども、
今は這ひ來る力なし。
聲を高めてほゝ笑つ、
乳母は手を打ち嬉びぬ。
「オー可愛そにおかしいね」
乳母やは今日もかくしつゝ、
たのしく乳兒と遊びけり。

、○學　校

栃木　岩下歌子

春の日や偶とこそ來つる、
花近き聳ゆる學校、
首垂れて靜に歩めば、
ほゝゑみよ畑に上りけれ。
綾羅の音さら／＼と、
先導にして廻廊廻る、
友靜子思は同じか、
浮ぶるよ、溢るゝ笑靨。
紫や清少納言、
幼な時我れ渴仰の、
給ぞ掛る懐かしの室、
輝くよ友の眼眸。
さら／＼と跫音の氣して、
つと急ぐ女の先生や、
もしやとて胸躍りしが、
さに非ず一面のほてりや。
高樓の欄干に倚り、、
打ち見やる懐かし町や、

丹襷の少女等あまた、
何つらむ戯るゝらし。
見よかしと友の言へるに、
打ち見やる春の山の上、
子らあまた組かざして、
のゝしれる戦ひの眞似。

○山寺落花

橫濱　鈴木まつ子

浮世のちりはかよはれど、
浮世の風のかよひきて、
法のめぐみに咲いでし
花のさかりを、つれなくも
さそひしことの哀さよ。
ちるはならひの世なれ共、
あまりみじかき日かずにて、
咲しさくらの花のみか、
人の身上もかくぞとぞ、
おもひし居ればほろ／＼と、
又もふり來る花ふゞき。

○花なき里

清國　富成梓子

雲の空にひはりなき、
柳のまゆは開けども
なにかは春と白雲の、
花なき里はあはくれに、
たゞ待わたる雁のつら、
花のたよりありつなし。

○

東京　牧　千春子

野邊にさかりの若草も
いつかは秋にあはましと
思ひきはめし事ながら、
舞殿にみつる袖の香や、
花のうたげまひのうた、
月のむしろのまひ姿、
思へば悲し三つ年の
君の寵愛今ははや
佛御前の出しより、
秋風ならであきられて、
うつろひやすき現し世の
たのめがたきを知りにけん
二十一年の春老いき
丈なすか髪を斷しより、
母と妹をたづさへて
嵯峨野の奥に結びにし
松風淸き柴の庵
夜半のねざめに時めきし
昔しを思ふ袖の露
あはれ幾度絞るらむ

○

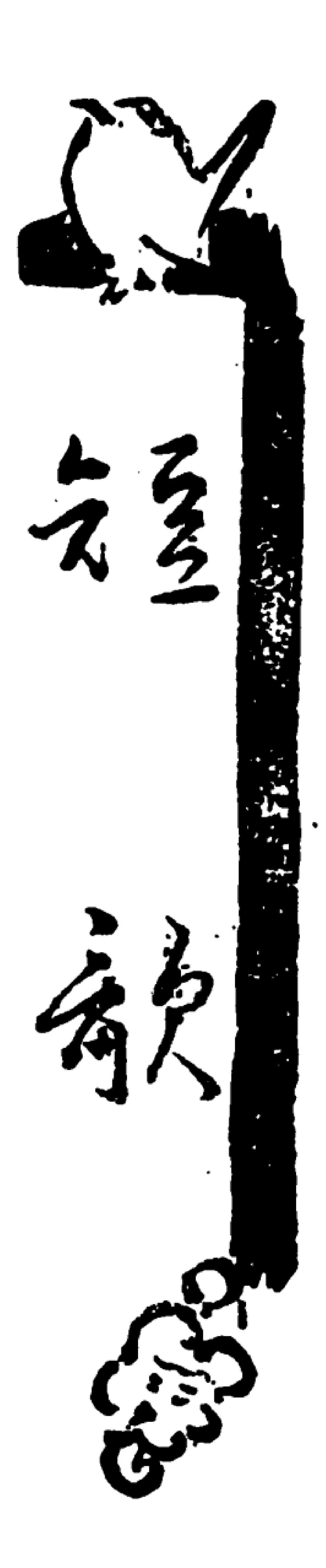
神戸　足立あさ子

「雲か霞とみよし野の。吉野の山の さくら花。開くる御代に伴ひ

て。こと圖迄もかなりけり」
「たまく晴し春雨に。蝶も舞子の濱邊し。久しき御代を打おさむ。濱の鼓みや松の聲」

「初夏」　神戸　足立ゑい子

「人のこゝろは花染の。移ろひすやすき春過て。夏來にけらし卯の花の。かき根の雪は白妙の。衣にかゝる猿覆。立居涼しく覺えけり」



御歌所寄人　小出粲先生選

天

相模　藤原下枝子

一しきり雨戸にさわぐ夜嵐の
　止めば蛙の聲聞こえ來る

地

雲雀　東京　林　艶子

つぶてかと思ふばかりにみ空より
　かすみて落つる夕雲雀哉

人

美濃　酒向椿子

蝶追ひて菜の畑續き少女子の
　小唄うたうてたとり行くかな

甲

鶯　富山　なつ子

梅が枝に鳴く鶯の聲きくも心浮き立つ春は來にけり

阿波旅行中にものす　東京 松浦きよし子
此處彼處釣人立てる吉野川下る小舟は霞にそ入る

夕　美濃 篠島滋子
磯づたひ白帆かそへて繪筆手にみつゝしゆけば日は暮んとす

暮春　美濃 長濱由佐美子
花はちり鳥はかへりて梓弓早くも春はくれてけるかな

○　美濃 杉山靜子
咲きつゞく菜の花畑かけ消えて春雨けふる下有知の村

鶯　東京 淺地あや子
訪ふ人もなきわか宿のうめの花待ちえてけさは鶯のこゑ

殘春　磐城 木幡きよ子
谷川の岸の山吹散りぬらん流れに殘る春の色哉

○　東京 高橋珍子
幼子の衣ほす軒に梅ちりて犬もひるねの門しづかなり

漁村　美濃 芳翠敏子
くちふれの古板ましろ背戸垣にかけならへたるほしわかめかな

尋花　兵庫 今西操子
峰越えて谷間あさりてけふもまた花の白雲尋ねくらしつ

春雨　東京 小林春子
春雨のめぐみの露にうるほひて名もなき草も綠そひけり

盆栽　岩代 岸野常子
むろざきの梅の一枝冬ごもるまとのひかげは春めきにけり

一枝梅　岩代 岸野せい子
かさしにと折りてあたへん妹もかな小瓶にさける一枝のうめ

谷梅　岩代 岸野菊子
光なき谷ふところも春めきてはや一もとの梅ぞ匂へる

花見　東京 神田みれ子
賑はしき都の春を故里の老いにし父母に見せまほしさよ

電車　東京 神田たみ子

あゆみなはひと日もかゝる道すらもはづかに行かむ御代の嬉しさ

春離別　東京 倉重千惠子
見かへりて見送る友を春かすみなに隔つらん今日の別れを

野殘雪　旭川 佐藤央子
落草は色さへめさへはつかにてむらきえ殘る野へのしら雪

野遊　東京 白井岑子
折りもてる花をしたひて春の野の胡蝶は袖をはなれさりけり

窓鶯　東京 白井春子
文机の小かめの梅の香をとめてまとの戸ちかく鶯のなく

○　東京 平塚 白石合子
丹塗かごかきすゑられて御殿山繪日傘ならぶ花の頃かな

山口　神戸 後藤ふじ子
賤か家のまかきに生ふる一本の八重山吹の花咲きにけり

櫻　攝津 磯村さだ子
うら〱と霞こめたる遠山のうごかぬ雲や櫻なるらん

新綠　近江 石王かづ子
まきあぐるすだれに香う風かほる雨のはれゆく新綠の庭

春望　埼玉 香取うめ子
沖津浪なみも霞みて遠山の繪になど欲しきさまにもある哉

○　神奈川 服部幸子
校の音の小さく大きくなり〱は門にあふれて村靜かなり

柳　伯耆 錦織さち子
百年の長者の昔し偲ばるゝ石垣くづれ青柳長し

古寺落花　横濱 鈴木まつ子
うるはしく咲く山寺の花もまた同しうき世の風にちりけり

春の雪　神戸 高橋町子
起き出て庭の面見れは思ひきや木々の梢に雪ふり積る

春　神戸 奥村君子

野に出てゝつくしたんぽゝすみれ花君とつまなん春を待つ哉　兵庫　古東静子

折にふれて

みやこいていたつき直す身しにあれど猶なつかしき谷のわかいほ　兵庫　古東斎美子

墓前

したはしとあこがれ泣きて今さらに手向の言葉いてすなりけり　新潟　岩本芳子

○

かりそめにかさろ錦は何かせん心に飾れ綾もにしきも　後志　山本しづか子

折にふれて

船出してまた程もなきわか友のうへあやふまろ今日のこの風　松山　上原のぶ子

暁

ねさめしてもの思はせぬ鶏ならはこの暁もうれしからまし　埼玉　横田やな子

眼

人皆のめのはたらきに物ごとのよきもあしきも見えやわくらん　横須賀　高橋つれ子

花下逍遙

いさともよ花の木かけをめくりみんよき歌うたひ月更くろまで　近江　柚木音羽子

淡雪

目さむれて庭の枯木を白梅とまかへてしかな今朝の淡雪　横須賀　柏原みな子

○

咲き匂ふ櫻の幹を柱にて葺き下したる花見茶屋哉　横須賀　渡邊比佐子

○

松風はとほくはなれて蜑が屋の煙り淋しき雨のゆふくれ　美濃　平岡かん子

山吹

若鮎のさばしろ見えて長良川岸の山吹うつろひにけり　美濃　服部せき子

材木

昨日まていつくの森にたちつらん門へひきゆくふときひの木は　千葉　秋月旋江子

松下禪尼

かきりなき教は君がつくろひし紙のうすきに似ろべくもなし　神戸　足立あさ子

老鶯

おくれてはいゞどわひしき世の中に鳴て疲れろ老のうぐひす

○

かりくに軒の玉水音せずば降るとも知らし夜の春雨　神戸　足立ゑい子

○

賤がすむふせやの軒もわかぬまで若葉にうつむ小山田の里　名古屋　山根しげ子

山家春

糸つむぐ車音しておみな一人留守する窓に春の日たけぬ　美濃　松田高子

春の歌

つゝきゆく絵日傘一つ又一つ桃の花さく川沿の道　美濃　松田直子

都なる妹のもとへ梅の花を送らんとて

去年の春ともにながめし梅の花ことしは文にまきこめてやる　長野　岡田千穂子

土筆

花さきぬつくしも出てぬとくとへと里なる乳母がふみ送りくる　攝津　磯村直子

○

雨晴れて朧月よになりにけり琴の音ほしく梅の香れる　相模　渡邊君代子

折にふれて

紅梅の花咲き匂ふ賤が家におぼろにさしぬ春の夜の月　美濃　多田瑞枝子

郭公

中空に月をのこしてひとこゑのゆくへやいつこやまほとゝぎす　東京　西村直子

○

人も来ずわれもまた出す日は暮れてふと聞きにけり初ほとゝぎす　京都　山添たみ子

雲雀

なにとなく長閑かりけり夕雲雀かすみの中にこゑのきこゆる　東京　林環子

春の月

春の月おぼろながらにかゝりけり小舟とめたる岸の柳に　下總　岩瀬不二野子

○

春の来て十歩にたらぬ庭ながら廣まくなり菫さくなり　飛騨　中村華子

○

飛騨　南みね子

駿河路や初旅なせる夕まくれ畫繪に似たる富士を見る哉
○　　　陸前　山形さち子
うなゐらが摘み殘したる春日野のつはな穗に出て夏の風吹く
ゝ春の歌　　　豐前　柳瀬倭文子
のどかにも吹く春風にもつれあふ姿ゆかしき青柳の糸
待鶯　　　滋賀　久郷菊子
こゝかしこ梅はさかりとなりにけり早く來てなけ谷のうぐひす
春雨　　　東京　牧千春子
ふる度に綠もふかく青柳の糸くり出す春の雨哉
春さめ　　　神戸　川村千代子
とふ蝶もはそておもけにかへるなりすゝなさく野を雨にぬれつゝ
田舍新年　　　東京　白井峰子
土産の森につとひて里の子も追羽子すなり年の始は
櫻　　　河内　竹田敬子
世の中の浪の立居も打忘れしはし長閑けき花の影かな

乙

落花
山櫻ちるへき時にちりてこそのちの世の人のかゝみとはなれ
○　　　東京　鶴澤きむ子
つはくらめ舞姫かさす紫の傘にかくれぬ橋きはにして
折にふれて　　　東京　鵜澤貞子
やはらかき袱選ひて黒髪の夢にのひむをまつと知りてや
春野　　　神奈川　飯田白露子
摘草の乙女かわすれしかさしともみるへき花よすみれたんぽゝ
雲　　　神戸　今西さう子
吹きすさふ風たになくは浮雲の雲てふ名さへおこらさるらん
○　　　東京　奈良八重子
湯の宿に花と呼はれし姉妹の京にかへりて豊靜なり

○　　　東京　倉重恭子
岸もなき浮世のせとの木のはしのわか身一つのやるせなきかな
鶯　　　東京　中村千代子
つま琴のしらへゆかしみたゝすめは軒はにうたふ鶯の聲
白　　　東京　松原岑子
花のあけ空のみとりもよけれどもけがれぬ雪のしろそめでたき
錦　　　松山　田村多豆子
まかゝやく色はうらにもとほりけり大和錦はひとへなれども
祇園會　　　埼玉　横田秋子
軒つゞき夜るにきはひぬかみそのゝまつりかへりや花の下ふし
打にふれて　　　東京　秋田登志子
學堂の朝通ひに二人して睦び語りし其時戀ゆ
旅にて　　　美濃　長濱鶴子
みこしぢのかゞかさをうる少女子ととまりあひたる旅の宿かな
風　　　美濃　松田春子
山の宿に童のたのみいなみかれて風に鮮とる京の畫工
離別　　　美濃　松田留子
雨しはし堂の夕日に友となりて次の鐘の音われは野にきく
庭前花　　　美濃　松田信子
わか宿の庭の櫻のひともとにこの世の春をかけて見る哉
折にふれて　　　美濃　多田花子
煙なす夕空はれて凪一つ相模の灘は暮れてもあるかな
行春　　　美濃　多田さとろ子
おく園の池のほとりの藤なみに夏くる春をかけてみるかな
汽車中にて　　　靜岡　河合きさ子
まかれ路をはしる車におくれじと山もはやしもかけりてそゆく
蝶　　　東京　佐々木彌子
黄金しく菜畑に遊ぶ少女子の袖の香とめて蝶のむつるゝ
牡丹　　　茨城　近澤八重子

日の本の赤きこゝろをあらはしてやさしく笑める緋牡丹の花
○　清國　福田つる子
佐保姫の引くや霞の八重衣綾模様かもすみれたんぽゝ
○　紀伊　早川新子
今日も亦磯邊につどひ漁夫の子等父まつ暇を取角力する
雲雀 -　鳥取　岡井まつ子
ひら〱と雲より地にとぶひばり辭や宿ると疑はるまで
○　河内　竹内久子
彌月夜馬子の鄙歌おぼろなり桃の花散るおひ分けの路

俳句

内藤鳴雪先生選

天

紫の蝶につゝまれて櫻貝　東京　淺地あや子

地

新しき家に移りて梅寒し　横須賀　柏原美奈子

人

打水に濡れし簾の雫かな　同　柏原みよ子

美しう鶏の肉ふや春の露　横須賀　渡邊比佐子
葉櫻の枝に短冊殘りけり
春雨や妻を相手の小酒盛　同　高橋つれ子
殘雪に崩れかゝりし射垜哉
山吹や寺で自慢の御茶の水　同　齋藤松代子
春風に兎の垂耳動きけり
足かゆき汐干戻りや朧月　東京　勝田宗子
化粧する御局來や青簾　相模　吉岡豔子
吾庵の破れ障子や明易き
横ぐゞる船と船とや風薫る　宮城　山形幸子
茶摘女の餘所心なる雲雀哉
菜の花や四日まばゆき馬の上　神戸　足立ゑい子
此日和極樂めきし彼岸哉
伸び過ぎておろかに見ゆる麥哉　神戸　足立あさ子
てふ〱や机の上の晝の夢
なつかしき奈良の旅籠や花の雨　京都　山添たみ子
鶯にねぼけ眼の宿直かな　横須賀　柏原みな子
提灯に梅が香せまる夜道かな
春の月藁屋の叢を照らしけり　飛騨　中村華子
汽車の吐く煙の末や春の風　同　南みれ子
鳩おりる大寺の庭温き
雛立てゝ豆煎る音の隣哉　臺灣　瀬戸本秀代子
草摘むと新らしき籠買ひにけり
小狐のつどふ忌垣や朧月　美濃　西向椿子
歌反古の手筥にたまる彌生哉
雛の枕洗ふ禿や春の水　兵庫　梶原京子
春雨や夢に故郷の山青し　美濃　加藤思子
ふくらむや牡丹も汐の滿つる時　美濃　鷲見とう子

讀者文壇

餅する砧の音や花の奥	同	鷲見富子
春雨や片戸さしたる手遊店	同	桃月春子
春月や馬の嘶く椎が下	同	岡英子
捨てゝ行く飲みあげ樽や春の山	同	花岡女史
四阿屋は昔しめきたり青簾	同	落合かぎ女
月出てゝ法師に淋し山櫻	神戸	梶原京子
麥畑や嫁入る道に蝶も來る	東京	土田八重子
物賣に小供のたかる日永かな	同	高野みち子
宮鳩に櫻の蘂かゝりけり	札幌	佐藤千代子
雪解して馬糞の道となりにけり		
ほのぼのと梅より明けぬ丘の家	神奈川	服部幸子
郭公鳴くや初瀨の山颪		
面洗ふ水に落ちたり八重椿	茨城	近澤八重子
春月や松にたなびく溫泉の煙り	相模	渡邊君代子
春の宵役者らしきが提灯		
風呂で聞く芝居話しや春の宵	札幌	佐藤千代子
宿したる僧も詣じて花の山	岐阜	後藤英子
一聲は雲もおもしろし杜鵑	東京	秋田登志子
何處やらに蛙の聲やおぼろ月	越後	岩本芳子
湯早く夕餉すまして納涼かな	相模	藤原下枝子
春行くや銚粱美しき小納言	東京	山下文江子
夜櫻や月は隅田の水のそこ	同	倉重茂子
春の月學習はんと思ひけり	岩代	岸野常子
市に賣る心中歌や春の月	東京	淺地あや子

●和歌兼題

六月（撫子花・電話）　七月（螢・百合）

大懸賞案披露

本誌三月號誌上に於て募集したる懸賞案に就て、誌友諸氏より左案の如きものを提出せられたり、

（一）字數あて

懸賞發表號女鑑の各頁の第一行と末行との終りの字は、漢字が何字假名が何字あるかを當てる事、但廣告欄は除く、されば女鑑一部百八十頁とすれば、字數が三百六十字ある筈なり、依て此の内漢字が百五十字假名が一百十字と云ふが如し

（横須賀　三輪安子）

（二）字數あて

來る六月一日發行の官報第五頁に於ける漢字數（但し一、二、三、の如き數の字及國訓は凡て漢字に算す）と日本の假名（平假名片假名を云ふ）數との差の數は如何なるやを目的たる者、若くは之に最近きものを第一等とし以下順次に等級を分つ

（廣島　平岡靜子）

（三）字數あて

中央氣象臺にて（何月何日とか、これは貴社隨意）天氣豫報の總字をかなで書いて是れと同じ字數の者を一番當りとし、此番號より此字數だけかぞへた番號を二番當り、以下之に準じて數へて三番四番當りとす、かう言ふ風に數へて番號なき時は、又第一着番號から右樣の數へ方にすること

（長野　淸水しか）

（四）人數あて

五月卅日新橋停車場に於て、汽車に乘車、下車する人數を當てた人

（陸前　山形すみ子）

（五）　字數あて

六月發行の女鑑記載の小說最末頁の字數あて（富山　仲町しげを）

（六）　字數あて

（其一）翌月一日發行の女鑑に發表する天地人當選の新體詩と、短歌とに用ひし「の」の字の總數、（其二）當選者六名の年齡の合計數但し一名二首又は二題當選せしときも二名として計算す年齡は明治二十年生は二十二歲明治二十五年生れは十七歲とし以下是れに準ず細則は貴社に任す　（伊豫　野田ます）

（七）　字數あて

某月某日の博物館の入場者數を當てること

（其方法としては、例へば六月十五日の入場者數を當てる法とすれば先づ五月號に其旨豫告せられ、六月一日發行のものにでも、參考の爲に前年各月の入場者數を示され、六月十日を締切期限とし、七月號に之が發表の運びに至らば、豫告より發表迄の期間、長きに失せず又短き嫌もなく、頗る興味あることかと思惟す）（京都　紫水）

（八）　年數あて

來る六月一日の女鑑讀者文藝中、短文、新體詩各天地人六名の詩文の字合せたる數をあてたる人を一等とす、二等三等はあたりたる數字の先後を拾ふ事、以上二三等に次ぐ　（美濃　杉山靜子）

（九）　年齡あて

五月一日發行の女鑑の口繪に婦人五六名の肖像を揭げ其年齡の總數の豫想　（東京　秋田登志子）

（十）　廣告の種類

何月何日發行の女鑑に出づべき廣告の種類、及び數、例へば書物何種、化粧品何種、等倘精しくすれば、其名をも擧げる『之れは廣告に注意する點で、廣告を取るに良法でしよう』（東京　安部議）

（十一）　人數あて

明治四十一年六月一日發行の女鑑記載和歌（但し兼題雜題を通じて）の投稿諸氏の人數を豫定せしもの（但し一人にて幾首記せるも一人に數ふ）　（橫須賀　鈴木まつ子）

（十二）　字數あて

一、六月一日發行の女鑑第一頁より第二十頁の本文中に、左の字數いくつありや、　（東京　岡つちよ、霧瀾・淸水万作同案）

　女、鑑、國、光、社、

二、六月一日發行女鑑第一頁より第百頁までの最終の文字を集めて一とつの和歌、詩、狂歌、はいかい其他何なりとも文を作る事選者數人を定めてこれを選拔し甲乙をさだむ（東京　岡つち子）

（十三）　字さがし

御社にて古名歌、又は人口によく膾炙せられてゐる名句を御選擇の上、讀者文藝欄を除き、各題の文章の中へ一字若くは二字三字位宛、特によく目立つ活字に組み置き、其れを一般の讀者に搜し出さしめ、古名歌ならば古名歌に、俳句ならば俳句に組み合はさしむること、隨分面白からんと存じ候　（京都　山添たみ子）

（十四）　三　件

第一方法　現今婦人の缺點と思ふ箇條（格言俚諺にてもよし）十乃至二十を貴誌附錄一枚に中央に綸葉書を入れ（破りとれる樣に）四面に書きつられて、讀者より其中尤も適切必要と思ふもの三か五を選擇せしめ、其綸葉書（1 2 3等解答欄及び番號を入れ置き）にて答へしむ、其第一を一點とし（他は捨つ、若し三箇とすれば一を三點、二を二點、三を一點とするも、又一を五點とするも可なれど）總ての人のを合計して點數の多少により、一等より五等を選ぶ、それに適

合せる（順序も）ものを一等以下順次景品を出す、若し同等多きときは、抽籤又は投函順にて定む、

備考附錄の意匠は任意に定めてよろし、

第二法　實業の日本、雜誌）に當てせる如き矢り出しか又はやきぬき（藥品にて文字をかき）法によるもの、

第三法　貯蓄債券勸業債券當籤番號の豫想、又は抽籤其他あれども、すでに陳腐なり、文字合せ、字探し、探し給も普通なり、故に第一法を机下に呈し候　（愛媛　三好靜子）

（十五）　天氣豫報

來る六月中の日曜日の五ヶ日の天氣を豫定すること

但午前六時より正午迄、午後午後零時より翌午前六時迄、と區別すること　（豐前　柳瀨倭文子）

右外數十件に就て本誌編輯局にて審査せるに、第一公平なる點に於て、第二解答の當否を知るに便なる點に於て、右の諸案中第二を取捨し、

本年六月二十日發行官報第五頁記載の假名文字（ひら、カタ假名とも）の數の豫想答案を募集すること丶せり、就ては、この案の提出者平岡靜子君に、規定の賞金二圓を贈呈す、詳しくは本誌卷頭に掲載せり

愛讀者への景物

一年前金にて申込まれたる諸氏に對して、豫告の如く四月二十日本社重役、編輯局總員立會の上抽籤を行ひ丶左の景品を贈呈すること丶なれり、

一等女持金時計	小石川區御殿町一一〇	藤井はる子
二等繻珍丸帶	東京市淺草區黑船町	平井喜代子
三等紋羽二重	小石川區同心町二十二	牧野一成
四等寳石入金指環	越前國大野郡乾側村	多田やす子
五等勸業貯蓄債券	東京市芝區三田綱町一	菅井誠美
六等女持蝙蝠傘	京都市綴喜郡八幡町	森元信富子
同女持蝙蝠傘	東京芝區金杉濱町二八	石黑こと子
七等縮緬帛紗	熊本縣玉名郡玉水村	原口タス子
同縮緬帛紗	東京麴町區一番町卅一	岩佐純
同縮緬帛紗	東京市本鄕元町一の一	松平伯爵

同　同　北海道石狩國雨龍郡深川村　山下せき子
同　同　下谷區上野櫻木町二丸塚方　川崎貞子
第八等縮緬半襟　渡島國板野郡松坂村矢武　井上れい子
同　同　愛媛縣宇和島町廣小路通五　小高壽子
同　同　栃木縣鹽谷郡舟生村　手塚芳子
同　同　廣島縣加茂郡竹原町　藤田常子
同　同　對馬國嚴原町　嚴原高等小學校

第九等　秋田　小田切克▼東京　石田立▼東京　寺西よし子▼新潟　池田かほる子▼島根　栃木園枝子▼鹿兒島　花城女子小學校▼鳥取　門脇繁次郎▼甲府　名取正代▼島根　山本原七郎▼東京　櫻井忠胤▼東京　乃村繁三▼北海道　小林ハル▼東京　田中平八▼山形　佐藤信子▼清國　三好龜吉▼東京　何禮之▼東京　秋元宗子▼東京　高橋珍子▼清國　宮成梓子▼愛知　永井さい子

第十等　松江　藤井茂與子▼新潟　二宮丑子▼新潟　加田直治▼愛知　土川田鶴子▼臺灣　土屋なか子▼下野　井上尙子▼下總　藤本茂緒子▲越後　岩本芳子▼東京　高山千代子▼愛媛　水沼久吉▼備中　三和光子▲天鹽　五十嵐柳子▼埼玉　横田秋足▼愛知　太田佐兵衛▼東京　高辻千爵▼和歌山　佐々長右衛門▼東京　德川伯爵▼東京　清水都見▼丸山かすみ▼東京　青木たま子▼東京　黑田ます子▼東京　矢部彌綠▼東京　清水別邸▼東京　矢島甲子次郎▼東京　西村伸子▼東京　木下元子▼函館　益田とく子▼備前　前田よし▼東京　村上花子▼常陸　桐生きく子

前號繪探し披露

◎解答　(一)蝙蝠　(婦人の肩と花の枝の間)　(二)鯛　(襟より左の袖帶にかけて)　(三)法師　(髮の上)　(四)人の顏　(帶の中)　(五)扇子の地紙(左の隅の花間)

右のうち四以上を探し當てたる人を、抽籤によりて左の諸氏當選せられたり

第一等　韓國京城倭城臺廿七號　吉田いそ子

第二等　岡山縣眞庭郡落合町　井手雪子

第三等　愛媛縣温泉郡浮穴村大字森松　野中岩惠子

右の選に洩れたる左の諸氏には、各昇雲氏筆繪葉書を贈呈す、

京都　日下てる子▼東京　有地要介▼東京　戸塚とも子▼東京　本間春子▼東京　梅本すみれ子▲東京　關川琴子▼東京　山口ふじ子▼東京　野田賢公▼横須賀　渡邊比佐子▼千葉　小林久子▼東京　石坂絲子▼東京　深田もと子▼備中　竹久嘉美子▼羽前　中村美代志▼茨城　坂野よれ子▼新潟　大石孟▼秋田　伊藤ふさ子▼東京　早川菊枝▼群馬　小野里津多子▼青森　宇野あき子▼名古屋　鈴木鈴子▼福島　氏家貞▼東京　佐土原けさを▼兵庫　稻田兼子▼秋田　辻吉郎▼長野　古瀬隅世▼大阪　吉川とら子▼福島　渡部きみ子▼伊勢　米山たに子▼北海道　伊井つさ

新刊紹介

東海名勝淸見潟

法月銳見著
同　氏發行

海道筋第一の名所を紹介したるものにて、引證殊に入念、加藤政之助氏は梅雨無聊、美人を天の一方に求めて得ず、本書中羽衣の仙人を得たりと、以て其行文の妙をも見るを得べし、殊に附錄として五十三驛を略說したるは、海道旅行に名所舊跡を知るの便ありて頗る重寶なり(定價七拾五錢)

吾國體と宗敎

龜谷天尊著
名敎社發行

加藤文學博士の宗敎論を駁したるものにて、信仰と智識、宗敎と科學、民族敎と世界敎、吾國體と佛敎、科學的證明、眞善美を論じて倫理學上の迷信に及ぶ、等の諸說を揭ぐ(定價三十五錢)

眞生涯の礎

松村介石述
成功雜誌社發行

本書は著者が本邦の靑年者をして俯仰天地に耻ぢざる、眞個の生涯を送らしめん爲に講述したるものと云ふ、目次に曰く、救世的自在、偉人論、靈界の新潮、修養と活動、心機回展、悲境と樂境、不動心、誘惑論、道と人、虛平心、神秘論、地上の天國、目的論、勝伯の人格、ルーテル評傳(定價三十五錢)

北米黑西哥案內

鎌田三之助著
成功雜誌社發行

北米に赴きて本邦人の容易に殖民事業に從事し得べき所は、僅に墨西哥の一國あるのみとし、著者は一年間同國の事情を視察して歸朝、まづ同國の農產の無盡藏にして有望なることを紹介し、本邦殖民者の爲に生活狀態、敎育、宗敎、言語、歷史等に就て詳述したるものにて、志を海外に懷くものゝ必ず一讀を經べきものにして、本書の如き出版を續行せる成功雜誌社の、勇氣に感服せざるを得ず(定價三拾五錢)

定價

	前金
一册	貳拾錢
三册	五拾七錢
六册	壹圓拾錢
拾貳册	貳圓拾錢

全國遞送無料

廣告料

五號活字二行廿二字詰

	四半頁(十六行)	半頁(卅二行)	一頁(六十四行)
特等	……	二十圓	三十五圓
一等	六圓五十錢	十一圓	二十圓
二等	五圓	九圓	十六圓
並等	四圓	七圓	十二圓

御注文規定

一切前金の事(但郵券代用一割增の事)◎前金領收證は差出不申本誌の到着を以て金員領收と御承知ありたし◎領收證を要せらるゝ方は別に參錢切手御送附ありたし◎爲替受取人は東京市京橋區築地二丁目貳拾壹番地國光社と御認ありたし◎振込局は東京築地郵便局へ◎御照會の件は返信料御送附あるべし

明治四十一年四月廿六日印刷
明治四十一年五月一日發行

編輯兼發行人　東京市京橋區築地二丁目二十一番地　株式會社國光社
右代表者　東京市京橋區築地二丁目二十一番地　橋本忠次郎
印刷人　東京市京橋區築地二丁目二十一番地　守岡功

發行所　東京市京橋區築地二丁目二十一番地　株式會社國光社
振替貯金口座番號　壹壹七八番
(電話新橋二六九三番)
(電話新橋　特八八番)

東京高等師範學校教授 文學士 松本孝次郎著

家庭に於ける兒童教育

總クロース 菊版二百頁 定價五拾五錢 郵税八錢

本書は**兒童教育專攻家**として教育界に名聲隱なき著者が多年研究せられたる**學說**と**實驗**とに基き**實地家庭**に行ひ得らるゝやう極めて**平易且切實**に談話體を以て**兒童教育法**を說述せられたる者にして世にありふれたる家庭教育書類と全く其の**選**を**異**にせり而も何人にも解り易く容易に**育兒の妙訣**を了得するを得べしされば世の父母たる人は子女將來の爲**是非熟讀**せざる可らざるものなり

此書は亦**兒童教育**の任にある**學校教師等**には必缺く可らざる**良參考書**なり

重要目次

◉第一家庭に於ける德育 ◉第二家庭に於て起り易き弊害 ◉第三兒童の賞罰 ◉第四遊戲の價値 ◉第五兒童文學 ◉第六兒童と自立心 ◉第七感情教育 ◉第八家庭と園藝 ◉第九兒童と言語 ◉第十兒童と圖書 ◉第十一青年教育の注意 ◉第十二男女の兒童 ◉第十三小兒室の構造及設備

發行所 東京市京橋區築地二丁目 電話新橋八八、二六九三 株式會社 **國光社** 關西大賣捌 大阪市南本町 **積文社**

細川十州先生序文　三輪田眞佐子刀自著

女子の本分

第二十三版

彩色摺表紙大和綴菊版美本全壹冊定價金廿五錢郵稅金六錢

發行所　東京京橋區築地二丁目廿一番地　電話新橋二三九六番　株式會社　國光社


（犬の聲！）
何と云ふ藥が
欲しいのですか
THE BEST POCKET MEDICINE
SEIKAIGAN
清快丸
價金十錢、廿錢、五十錢、一圓
捻布袋二十錢藥罐廿五錢
（令孃の答）
私は高橋盛大堂の
清快丸が欲しいのです
あの藥は勉強して肩が凝たり氣が欝いだりした
時に能く奏効ますからね

女鑑

明治四十一年五月一日發行　毎月一回一日發行　第拾八年第五號
明治廿五年三月十二日第三種郵便物認可

世界美人競爭優等當撰者



土屋のぶ子孃と其筆跡

